主基　丹波國船井郡

明和元年八月廿四日

紫宸殿南庭に於いて行ひたまふ

十月十七日乙未、(中略)今日大嘗宮造立始也、建南殿前庭、如元文、寛延度、

十一月八日乙卯、未剋許參內、(中略)今夜大嘗祭也、

賴言卿記　寶曆十三年十一月廿七日庚辰、(中略)御卽位也、(於紫宸殿被行之、)

明和元年八月廿四日癸卯、(中略)巳刻參內、今日大嘗會國郡卜定也、(中略)卜合、(近江滋賀郡、丹波船井郡、)

十一月八日乙卯、(中略)是夜被行大嘗祭、

後桃園天皇の大嘗祭

八槐記　明和八年四月廿八日戊戌、寅剋參內、(著宿袍、)依吉曜辰時天皇(後桃園)升壇被行卽位禮儀、如代々例、

九月八日乙巳、參內、大嘗會國郡卜定也、(中略)

卜合

悠紀近江國甲賀郡　主基丹波國船井郡

十一月十九日乙卯、參內、(著衣冠、單、)今夜大嘗祭也、

紫宸殿南庭に於いて行ひたまふ

愚紳　明和八年四月廿八日戊戌、此日天皇(諱英仁、春秋十四、順德院、稱光院等御年相當、桃園院第一皇子、母儀准后從三位藤原朝臣富子、後圓成寺關白兼香公女、)於紫宸殿可被行登極禮、

十一月一日丁酉、卯斜束帶參入、巳剋被供忌火御飯、陪膳隆建朝臣、益資矩、源常芳、有出御、其儀如例、先之於南殿前庭有大嘗宮造立始、立柱等事、殿下於南殿庇內々有御見物、(柳原紀光)余候簀子、(萬里小路前大納言(政房)改衣冠紅單同祗候、)其儀、造酒兒(サカツコ)(著白平絹衣紅袴、內藏大屬清原武員女、)立庭中、(可被立大嘗宮南方東面、)次悠紀主基宮材才(木カ)運之、(實者任便兼置之也、)次下手、今度依式文如形被再興由也、次修理職等(其體不可說、近日例也、)令立柱者也、申剋事了由修理職申之也、

十一月十九日乙卯、今日大嘗祭也、

光格天皇の大嘗祭

忠言卿記　安永九年十二月四日戊申、今日於紫宸殿被行卽位禮、(光格)天皇(春秋十歲、)

盛化門院の崩御

天明三年十一月十三日庚子、(中略)巳刻前盛化門院(藤原維子)遺令奏幷警固々關、從今日五ヶ日廢朝、依遺令任葬司已下停止、又一朞之間、宴飲作樂著美服之事可停止條々、上卿三條大(實起)納言奏聞、於陣被仰云々、(依例外記令止音奏云々、)辨良顯云々、使權中將隆久朝臣參門外申遺令旨云々、(四脚門外立東面、外記出逢申遺令、不待勅答退出云々、是故實也云々、)

隆久朝臣如此了云々、後日依語書記、

將軍德川家治の薨去

遺令詞、去月十二日盛化門院崩給、素服擧哀任葬司國忌山陵荷前可從停止、

四年十月十六日戊戌、此日諒闇終、辰刻大祓、參議源宰相中將重嗣、辨胤定、奉行職事隆彭朝臣云々、

從今日供進魚味云々、

戌刻御禊出御云々、近臣惣參可參仕之處、予依所勞不參仕、出御入御之儀、共女房之沙汰云々、

御贖物供進、陪膳隆彭朝臣、役送良顯、亥刻吉書御覽、上卿鷲尾中納言(隆建)、辨昶定、奉行職事隆彭朝臣、訖大床子御膳、出御、陪膳隆彭朝臣、役供俊親云々、

六年十月七日丁丑、依大樹(德川家治)薨去、如先例贈經于東叡山了、般若心經、紺地以金泥書之、使林木工今日出京、依昵近贈經、先例也、

八日戊寅、禁中以下御贈經使各被發駕云々、勅使前內大臣賞季、院使橋本前大納言(實理)、大女院使源宰相中將重嗣、女院使芝山前宰相(持豐)云々、

十一月廿一日辛卯、新嘗祭、雨儀云々、安永八年已後不被行之、大祀已前多無行幸云々、掌侍藤原藤子參向、奉行職事基理朝臣、小忌公卿權中納言通古、宰相中將廷季、少納言福長朝臣、辨均光、侍從

承明門外に於いて行ひたまふ

永彰、少外記職壽、右少史小槻爲秀等參仕云々、

七年三月三日辛未、入夜中御門大納言(宗美)送廻文、番頭也、今年十一月可被行大嘗會御治定旨、武傳議奏各列座被告之間、各可存知旨被告訖、今明日中各賀申云々、

四日壬申、先仙洞、大女院、女院、殿下等參入、大嘗會御治定申賀參內、大嘗會今年可被行之被治定申、珍重、

四月廿八日乙丑、大嘗會國郡卜定也、(中略)卜部卜訖進上卿(一條輝良)、上卿令左大辨(葉室頼熙)宰相書之、卜合近江滋賀郡、丹波氷上郡、

十一月廿七日辛卯、此日大嘗祭也、(中略)

此間大臣一人左大臣輝良公著小忌、就廻立殿坤角庭上座、東面、小忌、公卿鷲尾大納言(隆建)、源中納言(廣幡)前基、(千種)二位宰相中將有政著巽角庭上座、北上西面、予、實章等自便宜所下殿、入大嘗宮東西鳥居、實章東、予西、經主基殿後及悠紀殿西、引陣悠紀嘗殿南階下、豫設胡床、不帶兵具、不放緌、引裾跿跣、此事近代絕無之、進退舊記無所見者歟、事々傳奏中山前大納言被諷諫了、實章經悠紀殿東立南階東邊、寒風甚而白雪頻飛、大忌公卿民部卿(上冷泉)爲泰、花山院大納言(愛德)檢校、權中納言(醍醐)輝久、日野中納言(資矩)檢校、宰相中將(庭田)重嗣、檢校、等着幄座、大嘗宮在南門外、西上南北面、(中略)次御悠紀嘗殿、

仁孝天皇の大嘗祭

禁裏執次詰所日記　天明七年四月廿八日乙丑

一、今日大嘗會國郡卜定、辰剋、

悠紀　近江國甲賀郡

主基　丹波國氷上郡

右卜定候

四月廿八日

十一月廿六日庚寅、(中略)

一、今晩大嘗宮之邊江如先格御使番兩人相詰候樣、議奏衆被仰渡、番頭江申渡相廻り候衆表江相伺廻ル、西之月花門之邊、東之日花門之邊ニ罷在、大嘗宮之邊、夜中見廻り候樣申渡、

十一月廿七日辛卯

一、大嘗會御當日也、

禁裏執次詰所日記　文化十四年九月廿一日壬戌

一、(仁孝天皇)御卽位御當日也、

紫宸殿南庭に於いて行ひたまふ

孝明天皇の大嘗祭

文政元年四月廿五日壬辰

一　卜合國郡

近江國　滋賀郡

丹波國　桑田郡(中略)

右之通被仰出候旨、議奏衆御達書面御附衆被爲見、

十一月廿一日乙卯

一、大嘗會御當日也、

實久卿記　文化十四年九月廿一日壬戌、今日天皇於紫宸殿被行卽位禮給、

文政元年四月廿四日辛卯、今日大嘗會國郡卜定也、仍參內申上慶賀、

十一月廿一日乙卯、大嘗祭也、(中略)須臾出御、先劒內侍進出、公師朝臣著小忌付之、實遠朝臣以下各取脂燭(燭)前行、爲下萬先、予取脂燭(燭)、小舍人自階下傳之、一人留候御前、宸儀令步給、予前行、闕白殿被候御裾、次璽內侍進出、定靜朝臣著小忌付之、職事候御後、經南殿乾戶御後東廂東階等入御于廻立殿、予以下於東階上留平伏、(中略)御湯殿事、著御々祭服等畢、亥剋斗渡御于悠紀嘗殿、

隆光卿記　弘化四年九月廿三日己亥、今日辰刻今上(孝明)諱統仁、御年十七、先帝皇子、御養母皇太后宮從三位祺子、實正親

孝明天皇の大嘗祭

紫宸殿南庭に於いて行ひたまふ

明治天皇の大嘗祭

町故前大納言、實光女、權典侍局、於紫宸殿可被行登壇之禮也、

嘉永元年十一月廿一日辛卯、（中略）

先是、前行大臣、小忌納言、參議等入月花門（敬法門代也、）著大嘗宮南庭座、大臣座設坤角、（東面、）小忌座巽角、（北上東面、）

此間出御于廻立殿、有御湯御服御手水等事、了渡御于大嘗宮、

吉田家日記　嘉永元年四月廿四日丁卯、大嘗會國郡卜定當日也、（中略）

今日上卿書給ヲ國郡名四通ハ、近江國滋賀郡、甲賀郡、丹波國桑田郡、船井郡也、卜食ハ甲賀郡、桑田郡也、

太政官日誌　六十九　明治元年

○八月廿七日辛未

（明治）天皇御卽位御大禮被爲行候事

太政官日誌　明治三年

○三月十四日庚辰

御沙汰書寫

留守官

大納言德大寺實則

兵亂凶荒に依り延引す

國務多端に依り東京に於いて行ひたまふ

當年還幸之上、大嘗會被爲執行候筈ニ候處、東北綏撫之道未被爲行屆、加之諸國凶荒、輿羽ニ於テハ皆無同樣國用缺乏、旁以不被爲止得、還幸御延引被仰出候間、右之趣布告可致事、

太政官日誌　十九　明治四年

○四月八日丁卯

御沙汰書寫

孝明天皇山陵　勅使被　仰付候事

宣　命

天皇乃大命爾坐世、掛卷母恐支後月輪東乃御陵乃大前爾、正二位行大納言藤原朝臣實則乎使止爲旦白給波久白佐久、往志明治二年乃春、東京爾伊傳麻志旦、與內外乃國乃政乎聞食志治服幣給布爾依利旦、朝爾暮爾怠留事無久忘留事無久、天神地祇、御代御代乃天皇乃大前乎愼敬比守給幣幸幣給止乞祈奉良久、故內外乃國乎彌遠長爾安國止平氣久

知食左卑思食須隨爾、尙東京爾留坐旦御代乃初乃大嘗聞食佐卑事乎、今大前爾告左世給布乎、
都婆良爾知食世宣留天皇乃大命乎聞食世止、恐美恐美母白須、

明治四年四月

太政官日誌　二十九　明治四年

○五月廿二日辛亥

神祇官ニ於テ悠紀主基國郡ト定御祭典、（中略）
次第、（中略）
國郡ト定

合

悠紀

甲斐國

巨摩郡

主基

安房國

長狹郡

太政官日誌　九十九　明治四年

○辛未十一月十七日

此日　皇城吹上廣芝ニ於テ大嘗祭行ハセラル

嵯峨實愛日記　慶應四年八月廿七日辛未、（中略）

一、今日卽位登壇禮被行之、

明治四年五月二十二日辛亥、（中略）

一、今朝八字於神祇官有國郡卜定、悠紀甲斐國巨摩郡、主基安房國長狹郡有卜定、

十一月十七日癸卯、（中略）

一、今日被行大嘗祭、悠紀主基兩殿以下、於吹上廣芝有造立、

八弘仁式斷簡　公爵九條道秀氏所藏

凡踐祚之初有大嘗祭、七月以前卽位者、當年行事、八月以後、明年行事、此據受讓卽位、非謂諒闇登極、

儀式　二踐祚大嘗祭儀上

天皇卽位之年、七月以前卽位、當年行事、八月以後、明年行事、謂受讓卽位、非謂諒闇登極、

三代實錄　三十二　陽成天皇

元慶元年十月卅日丁酉、所司大祓於朱雀門前、緣欲供奉大嘗

東京宮城内吹上御苑において行ひたまふ

大嘗祭の時期

會也、十一月戊戌朔、頒告百官五畿、豫禁凶事、凡天皇受讓踐祚、七月以前卽位者、當年行事、八月以後者、明年行事、

延喜式（七　踐祚大嘗祭）　凡踐祚大嘗、七月以前卽位者、當年行事、八月以後者、明年行事、

北山抄（五　大嘗會事）　天皇卽位之年、（七月以前卽位、當年行事、八月以後、明年行事、此據受讓卽位、非謂諒闇登極、）諒闇時、喪年後行之、卽位者、謂行卽位儀乎、

九　皇室典範義解

（第二章　踐祚卽位）

第十一條　卽位ノ禮及大嘗祭ハ京都ニ於テ之ヲ行フ

恭テ按スルニ、（中略）大嘗ノ祭ハ、神武天皇元年以來、歷代相因テ大典トハセラレタリ、蓋天皇位ニ卽キ天祖及天神地祇ヲ請禮セラルヽノ禮ニシテ、一世ニ一タヒ行ハルヽ者ナリ、天武天皇以來、年毎ニ行フヲ新嘗ト爲シ、一世ニ一タヒ行フヲ大嘗トス、王政ノ中コロ衰ヘタルトキ、此ノ儀久シク廢絕シタリシニ、後土御門天皇以來二百二十二年ノ間廢止シ、東山天皇ニ至リ再ヒ行ハレ、中御門天皇以來五十一年ノ間行ハレス、櫻町天皇ニ至テ、明治四年十一月詔アリテ擧行セラレタリ、

官報

（號外　明治四十二年二月十一日　皇室令第一號）

登極令に依る大嘗祭

登極令

第四條　卽位ノ禮及大嘗祭ハ秋冬ノ間ニ於テ之ヲ行フ

大嘗祭ハ卽位ノ禮ヲ訖リタル後繼テ之ヲ行フ

第八條　大嘗祭ノ齋田ハ京都以東以南ヲ悠紀ノ地方トシ京都以西以北ヲ主基ノ地方トシ其ノ地方ハ之ヲ勅定ス

第九條　悠紀主基ノ地方ヲ勅定シタルトキハ宮內大臣ハ地方長官ヲシテ齋田ヲ定メ其ノ所有者ニ對シ新穀ヲ供納スルノ手續ヲ爲サシム

第十條　稻實成熟ノ期至リタルトキハ勅使ヲ發遣シ齋田ニ就キ拔穗ノ式ヲ行ハシム

第十二條　卽位ノ禮ヲ行フ當日勅使ヲシテ之ヲ皇靈殿神殿ニ奉告セシム

大嘗祭ヲ行フ當日勅使ヲシテ神宮皇靈殿神殿竝官國幣社ニ奉幣セシム

第十三條　大嘗祭ヲ行フ前一日鎭魂ノ式ヲ行フ

第十八條　諒闇中ハ卽位ノ禮及大嘗祭ヲ行ハス（一一六頁參照）

踐祚卽位禮大嘗祭表

天皇	踐祚年月日	卽位禮年月日	大嘗祭年月日	悠紀主基
神武天皇	元年正月一日	元年正月八日		
綏靖天皇	元年正月	三十三年七月三日（綏靖天皇）		
安寧天皇	元年正月	二年二月四日		
懿德天皇	元年正月	九年二月九日		
孝昭天皇	元年正月	七十五年七月七日		
孝安天皇	元年正月	二年正月十二日		
孝靈天皇	元年正月	七十六年正月十四日		
孝元天皇	元年正月	五十七年十一月十二日（孝元天皇）		
開化天皇	元年正月	六十年十一月十三日		
崇神天皇	元年正月	十年正月二日		
垂仁天皇	元年正月	九十九年正月十一日		
景行天皇	元年七月	五十一年七月十一日		
成務天皇	元年正月	六十年正月五日		
仲哀天皇	元年正月	九年正月十一日		
應神天皇	元年正月	三十九年正月一日		
仁德天皇	元年正月	八十七年正月三日		
履中天皇	元年二月	六年正月二日		
反正天皇	元年正月	二年正月二日		
允恭天皇	元年十	二年十二月		
安康天皇	四十二年十二月十四日（允恭天皇）	三年正月十六日		
雄略天皇	三年十一月十三日（安康天皇）	二十三年八月七日		
清寧天皇	元年正月	五年正月十六日		
顯宗天皇	元年正月	三年正月一日		
仁賢天皇	元年正月	六年正月五日		
武烈天皇	十一年十二月（仁賢天皇）	八年十二月		
繼體天皇	元年二月四日	二十五年正月		
安閑天皇	元年	二年正月		
宣化天皇	二年十	四年十二月		
欽明天皇	四年十二月（宣化天皇）	三十二年四月		
敏達天皇	元年四月	十四年閏正月		
用明天皇	十四年九月（敏達天皇）	二年四月		
崇峻天皇	二年八月（用明天皇）	五年十一月		
推古天皇	五年十二月二日（崇峻天皇）	三十六年九月		

舒明天皇	元年正月四日			
皇極天皇	元年正月十五日			
孝德天皇	(皇極天皇)四年六月十四日			
齊明天皇	元年正月三日			
天智天皇	七年正月三日			
弘文天皇	(天智天皇)十年十二月五日			
天武天皇	二年二月二十七日		二年十一月十六日	播磨 丹波
持統天皇	四年正月一日		五年十一月二十四日	因幡 播磨
文武天皇	(持統天皇)十一年八月一日	元年(持統天皇十一年)八月十七日	二年十一月二十三日	尾張 美濃
元明天皇	慶雲四年七月十七日		(慶雲五年)和銅元年十一月二十一日	遠江 但馬
元正天皇	(靈龜元年)和銅八年九月二日		靈龜二年十一月十九日	遠江 但馬
聖武天皇	(神龜元年)養老八年二月四日		神龜元年十一月二十三日	備前 播磨
孝謙天皇	(天平勝寳元年)天平感寳元年七月二日		天平勝寳元年十一月二十五日	因幡 美濃
淳仁天皇	天平寳字二年八月一日		天平寳字二年十一月二十三日	丹波 播磨
稱德天皇	天平寳字八年十月九日		(天平寳字九年)天平神護元年十一月二十三日	美濃 越前
光仁天皇	(寳龜元年)神護景雲四年十月一日		寳龜二年十一月二十一日	三河 因幡
桓武天皇	天應元年四月三日	天應元年四月十五日	天應元年十一月十三日	越前 備前
平城天皇	延暦二十五年三月十七日	(大同元年)延暦二十五年五月十八日	大同三年十一月十四日	伊勢 備前

嵯峨天皇	大同四年四月一日	大同四年四月十三日	(大同五年)弘仁元年十一月十九日	三河 美作
淳和天皇	弘仁十四年四月十六日	弘仁十四年四月二十七日	弘仁十四年十一月十七日	美濃 丹波
仁明天皇	天長十年二月二十八日	天長十年三月六日	天長十年十一月十五日	近江 備中
文德天皇	嘉祥三年三月二十一日	嘉祥三年四月十七日	(嘉祥四年)仁壽元年十一月二十三日	伊勢 播磨
清和天皇	天安二年八月二十七日	天安二年十一月七日	(天安三年)貞觀元年十一月十六日	三河 美作
陽成天皇	貞觀十八年十一月二十九日	(元慶元年)貞觀十九年正月三日	元慶元年十一月十八日	美濃 備中
光孝天皇	元慶八年二月四日	元慶八年二月二十三日	元慶八年十一月二十二日	伊勢 備前
宇多天皇	仁和三年八月二十六日	仁和三年十一月十七日	仁和四年十一月二十二日	近江 播磨
醍醐天皇	寛平九年七月三日	寛平九年七月十三日	寛平九年十一月二十日	近江 丹波
朱雀天皇	延長八年九月二十二日	延長八年十一月二十一日	承平二年十一月十三日	近江 丹波
村上天皇	天慶九年四月二十日	天慶九年四月二十八日	天慶九年十一月十六日	近江 備中
冷泉天皇	康保四年五月二十五日	康保四年十月十一日	(康保五年)安和元年十一月二十四日	近江 播磨
圓融天皇	安和二年八月十三日	安和二年九月二十三日	(安和三年)天祿元年十一月十七日	近江 丹波
花山天皇	永觀二年八月二十七日	永觀二年十月十日	(永觀三年)寛和元年十一月二十一日	近江 丹波
一條天皇	寛和二年六月二十三日	寛和二年七月二十二日	寛和二年十一月十五日	近江 備中
三條天皇	寛弘八年六月十三日	寛弘八年十月十六日	(長和元年)寛弘九年十一月二十二日	近江 丹波
後一條天皇	長和五年正月二十九日	長和五年二月七日	長和五年十一月十五日	近江 備中
後朱雀天皇	長元九年四月十七日	長元九年七月十日	長元九年十一月十七日	近江 丹波

後冷泉天皇	寛徳二年正月十六日	永承元年（寛徳三年）十一月十五日	備中近江
後三條天皇	治暦四年四月十九日	治暦四年十一月二十二日	備中近江
白河天皇	延久四年十二月八日	承保元年（延久六年）十一月二十一日	丹波近江
堀河天皇	應徳三年十一月二十六日	寛治元年（應徳四年）十一月十九日	備中近江
鳥羽天皇	嘉承二年七月十九日	天仁元年（嘉承三年）十一月二十一日	丹波近江
崇徳天皇	保安四年正月二十八日	保安四年十一月十八日	備中近江
近衛天皇	永治元年十二月七日	康治元年（永治二年）十一月十五日	丹波近江
後白河天皇	久壽二年七月二十四日	久壽二年十一月二十三日	丹波近江
二條天皇	保元三年八月十一日	平治元年（保元四年）十一月二十三日	丹波近江
六條天皇	永萬元年六月二十五日	仁安元年（永萬二年）十一月十五日	丹波近江
高倉天皇	仁安三年二月十九日	仁安三年十一月二十二日	備中近江
安徳天皇	治承四年二月二十一日	壽永元年十一月二十四日	丹波近江
後鳥羽天皇	（壽永二年八月二十日）（元暦元年）（壽永三年七月二十八日）	（壽永二年十一月十八日）	備中近江
土御門天皇	建久九年正月十一日	建久九年十一月二十二日	備中近江
順徳天皇	承元四年十一月二十五日	建暦二年十一月十三日	丹波近江
仲恭天皇	承久三年四月二十日	（承久四年）貞應元年十一月二十三日	丹波近江
後堀河天皇	承久三年七月九日	嘉禎元年十一月二十日	備中近江
四條天皇	貞永元年十月四日	貞永元年十二月五日	備中近江

後嵯峨天皇	仁治三年正月二十日	仁治三年十一月十三日	備中近江
後深草天皇	寛元四年正月二十九日	寛元四年十一月二十四日	丹波近江
龜山天皇	正元元年十一月二十六日	（正元二年）文應元年十一月十六日	備中近江
後宇多天皇	文永十一年正月二十六日	文永十一年十一月十九日	丹波近江
伏見天皇	弘安十年十月二十一日	（弘安十一年）正應元年十一月二十二日	備中近江
後伏見天皇	永仁六年七月二十二日	永仁六年十一月二十日	丹波近江
後二條天皇	正安三年正月二十一日	正安三年十一月二十日	備中近江
花園天皇	徳治三年八月二十六日（德治三年）	延慶二年十一月二十四日	丹波近江
後醍醐天皇	文保二年二月二十六日	文保二年十一月二十二日	備中近江
後村上天皇	延元四年八月十五日	延元四年十一月二十二日	備中近江
長慶天皇	正平二十三年		
後龜山天皇	弘和三年（弘和二年四月十一日）（弘和二年十二月二十八日）	（弘和三年十一月十六日）	
後小松天皇			
稱光天皇	應永十九年八月二十九日	應永二十二年十一月三十一日	備中近江
後花園天皇	正長元年（正長二年）七月二十八日	永享二年十一月十八日	備中近江
後土御門天皇	寛正五年七月十九日	寛正六年十二月二十七日	丹波近江
後柏原天皇	明應九年十月二十五日	永正十八年三月二十二日	備中近江
後奈良天皇	大永六年四月二十九日	天文五年二月二十六日	

正親町天皇	弘治三年十月二十七日	永祿三年正月二十七日		
後陽成天皇	天正十四年十一月七日	天正十四年十一月二十五日		
後水尾天皇	慶長十六年三月二十七日	慶長十六年四月十二日		
明正天皇	寛永六年十一月八日	寛永七年九月十二日		
後明天皇	寛永二十年十月三日	寛永二十年十月二十一日		
後西天皇	承應三年十一月二十八日	明暦二年正月二十三日		
靈元天皇	寛文三年正月二十六日	寛文三年四月二十七日		
東山天皇	貞享四年三月二十一日	貞享四年四月二十八日	貞享四年十一月十六日	近江
中御門天皇	寶永六年六月二十一日	寶永七年十一月十一日		丹波
櫻町天皇	享保二十年三月二十一日	享保二十年十一月三日	元文三年十一月十九日	近江
桃園天皇	延享四年五月二日	延享四年九月二十一日	寛延元年十一月十七日（延享五年）	丹波
後櫻町天皇	寶暦十二年七月二十七日	寶暦十三年十一月二十七日	明和元年十一月八日（寶暦十四年）	近江
後桃園天皇	明和七年十一月二十四日	明和八年四月二十八日	明和八年十一月十九日	丹波
光格天皇	安永八年十一月二十五日	安永九年十二月四日	天明七年十一月二十七日	近江
仁孝天皇	文化十四年三月二十二日	文化十四年九月二十一日	文政元年十一月二十一日（文化十五年）	丹波
孝明天皇	弘化三年二月十三日	弘化四年九月二十三日	嘉永元年十一月二十一日（弘化五年）	近江
明治天皇	慶應三年正月九日	慶應四年八月二十七日（明治元年）	明治四年十一月十七日	丹波
大正天皇	明治四十五年七月三十日（大正元年）	大正四年十一月十日	大正四年十一月十四日	甲斐
今上	大正十五年十二月二十五日（昭和元年）	昭和三年十一月十日	昭和三年十一月十四日十五日	安房
				愛知縣
				香川縣
				滋賀縣
				福岡縣

第四節　皇嗣

第一款　皇嗣の册立

皇嗣は天皇在位中に之を選定册立したまふことを恒例とす。日本書紀神武天皇四十二年正月の條に「立皇子神渟名川耳尊爲皇太子」と見えたるを始め、歷代天皇は概ね其の例に依りたまへり(一)。皇嗣の册立ありたるときは、其の皇嗣が皇子又は皇孫なると、皇兄弟又は其の他の皇親なるとを問はず、之を皇太子と稱す(二)。册立に依りて皇嗣たる身位始めて定まり、皇太子の稱亦始めて之に伴ふ。時としては、皇弟を立てゝ皇嗣としたまふ場合に、特に皇太弟と稱したまへる例あり(三)。

皇太子は「ヒツギノミコ」と訓めり。或は東宮又は春宮と稱す。蓋

し御在所の稱より出でたるなり。其の他儲君、儲貳等の別稱あり(六)。

皇太子の册立に當り、特に詔したまへることの國史に見えたるは、日本書紀繼體天皇の條に、皇子勾大兄(安閑天皇)を皇太子と爲したまふに當り「宜處二春宮一、助レ脩施レ仁、翼レ吾補レ闕」と詔したまへる旨を記せるを最初とす(七)。續日本紀聖武天皇の條にも、皇子の誕生に當り「新誕二皇子一、宜立爲二皇太子一、布二告百官一、咸令中知聞上」と詔したまへる旨見えたり。されど當時は未だ一定の成例を爲すには至らざりしが、光仁天皇以後は、皇太子の册立に當り詔を以て之を天下に宣示したまふことが、定例を爲すに至れり(八)。

皇太子册立の儀禮に付いては、貞觀儀式には「立皇太子儀」として其の次第を記せり。其の儀は紫宸殿の前庭に於いて之を行ひ、親王以下百官參列し、宣命大夫をして立太子の宣命を宣せしめたまふ。立太子の宣命は「天皇詔旨勅命乎、親王、諸臣、百官人等、天下公民衆、聞食止宣、隨レ法可レ有レ伎政止志、其親王立而皇太子止定賜布、故此之狀悟天、百官人等仕奉レ禮止詔天皇勅命乎、衆聞食止宣」とあり、此の宣命の儀は永く踏襲せられて、近世に至るまで皇嗣册立の儀典の中樞を爲せり(九)。立太子の當日、又は其の後日ならずして、東宮奉仕の職員を補任し、又拜覲節會の事あり、日を隔てゝ立太子の由を山陵に告げたまふ(一〇)。

中世以後、皇太子には壺切の御劍を授けたまふ。壺切の御劍は、初め藤原基經の家に傳へ、基經之を宇多天皇に獻じ、天皇之を當時皇太子に在しゝ醍醐天皇に授けたまひ、醍醐天皇は延喜四年二月皇子保明親王を立てゝ皇太子と爲したまふに當り、之を授けたまひ

しに始まり、爾來歷代皇太子の册立に當り、護身の御劒として、之を授けたまふの例を爲し、以て今日に及べり(八)。

皇太子册立の儀は、後小松天皇より後西天皇に至る十二代約三百年の間全く中絶し、靈元天皇の天和三年に至り、之を再興したまひしが、其の再興に當り、立太子の儀に先だち儲君治定の事ある新例を開きたまへり。初め靈元天皇は、兄皇子を越えて第四皇子朝仁親王(東山天皇)を立てゝ皇嗣としたまはん叡旨あり、速に之を決せんとしたまひしも、久しく中絶したる皇太子册立の儀を急速に復興したまふこと困難なりしを以て、天和二年三月先づ同皇子を儲君に治定したまひ、次いで翌三年二月皇太子册立の儀を擧げたまへるなり。爾來此の事先例と爲り、明治二十年八月嘉仁親王(大正天皇)の儲君治定の事ありしに至るまで、歷代立太子の儀に先だち儲君治定の事あるの例を爲せり(九)。儲君は本來は皇太子の別稱なりしが、是に至り立太子の儀ある以前の皇嗣を特に儲君と稱することゝ爲れり。

皇嗣は天皇在位中に豫め皇太子として册立せられ、天皇の崩御又は讓位に依り、皇太子踐祚したまふを常例と爲せども、時としては天皇在位中に皇太子を册立したまふに至らざりし例も少からず。或は讓位の宣命に於いて、皇太子を定めて之に皇位を讓る旨を宣したまへる例あり。鳥羽天皇の讓位の宣命の趣を記せる法性寺關白記に「以二顯仁親王一可レ爲二皇太子一、今依二薄德一卽讓二皇位一」と見え、後陽成天皇の讓位の宣命に「隨レ法仁可レ有 支 政 止 爲 氏、既吉曜良辰 乎 擇定 氏、今日二品政仁親王 乎 皇太子 止 定賜 比、此天日嗣高座之業 乎 授賜 布」とあるが如き是なり(一〇)。或は應神天皇の如く先帝の崩後母后の

攝政中に立太子あり、或は光仁天皇の如く先帝の崩後遺宣に依り立太子ありて踐祚したまひ(二)、或は孝德天皇、六條天皇の如く立太子の事なくして踐祚したまひ(三)、儲君治定の制起りて後は、或は光格天皇、明治天皇の如く立太子の儀なく儲君治定ありしのみにて踐祚したまひし例もあり(四)。時としては皇嗣未だ定まらざるに天皇崩じ又は位を去りたまひ、因りて或は遺旨に依り、或は院旨に依り、或は權臣の推戴に依り、或は群臣の上表に依り、天皇踐祚したまへる例もなきに非ず(五)。天皇崩ずるの後皇嗣故ありて踐祚したまはざりしときも亦同樣の例あり(六)。

皇嗣册立の異例としては、尙仁賢天皇、天智天皇、聖武天皇の如く前後二代の天皇に皇太子と爲りたまひし例あり。後桃園天皇は桃園天皇の儲君に治定あり、次代後櫻町天皇の皇太子と爲りたまへり(七)。

立太子の時に於ける皇嗣の年齡は、時に依り長幼甚だ異なれり。安德天皇は誕生後僅に三十餘日にして皇太子と爲りたまひ、光仁天皇は六十二歲にして始めて皇太子と爲りたまへり。されど何れも特殊の事情に因りたるものにして、常例には非ず。立太子の事例中、皇太子の年齡不明なるものを除きたる八十四例に就きて按ずるに、最も多きは十歲以下の三十六例にして、之に次ぐは十一歲以上二十歲以下の三十一例なり(八)。

皇室典範の制定せらるゝに及び、新に皇位繼承の順位を一定したまふと共に「儲嗣タル皇子ヲ皇太子トス皇太子在ラサルトキハ儲嗣タル皇孫ヲ皇太孫トス」と規定し、又皇太子、皇太孫を立つるときは、當日詔書を以て之を公布したまふことを定め、立太子、立太孫の

禮に付いては、中古以來の皇太子册立の儀を參酌し、立儲令に依り詳細に之を定めたまへり(八)。之に依り皇嗣に關する上代以來の制度は、種々の點に於いて重要なる變革ありたり。其の諸點を擧ぐれば、舊制に於いては、皇嗣は册立に依り始めて定まりしに對し、新制に於いては、皇嗣は册立に依らず、法定の順位に從ひ當然に定まること、其の一なり。舊制に於いては、皇太子の稱は皇嗣の册立に依り始めて授けられしに對し、新制に於いては、儲嗣たる皇子は生れながら皇太子と稱したまふこと、其の二なり。舊制に於いては、皇太子の稱は必ずしも皇子に限らざりしに對し、新制に於いては、皇太子の稱は專ら儲嗣たる皇子に限り、皇孫(皇曾孫、皇玄孫等亦同じ)の儲嗣たる場合は、特に皇太孫と稱し、皇兄弟其の他の皇族の儲嗣たる場合は、特別の名稱を用ひざること、其の三なり。舊制に於いては、立太子の儀は、之に依り始めて皇嗣たる身位を定むるものなりしに對し、新制に於いては、立太子又は皇太孫の禮は、既に皇太子又は皇孫の皇嗣たる地位に在すことを天下に宣示し祖宗に奉告したまふ儀禮にして、傍系の皇族の皇嗣たる地位に在す場合は、此の儀禮を行はせられざること、其の四なり。

天皇在位中の立太子
神武天皇の皇太子

一　日本書紀　三　神武天皇　(壬寅)四十有二年春正月壬子朔甲寅、立皇子神渟名川耳尊爲皇太子、

綏靖天皇の皇太子

日本書紀　四　綏靖天皇　(甲辰)二十五年春正月壬午朔戊子、立皇子磯城津彦玉手看尊爲皇太子、

安寧天皇の皇太子
懿德天皇の皇太子
孝昭天皇の皇太子

日本書紀　四　安寧天皇　(癸亥)十一年春正月壬戌朔、立大日本彦耜友尊爲皇太子也、

日本書紀　四　懿德天皇　(壬子)二十二年春二月丁未朔戊午(十二日)、立觀松彦香殖稻尊爲皇太子、

日本書紀　四　孝昭天皇　(癸酉)六十八年春正月丁亥朔庚子(十四日)、立日本足彦國押人尊爲皇太子、

孝安天皇の皇太子　孝霊天皇の皇太子　孝元天皇の皇太子　開化天皇の皇太子　崇神天皇の皇太子　垂仁天皇の皇太子　景行天皇の皇太子　成務天皇の皇太子　應神天皇の皇太子　仁徳天皇の皇太子　履中天皇の皇太子　允恭天皇の皇太子

日本書紀　四　孝安天皇　（甲辰）七十六年春正月己巳朔癸酉、立大日本根子彦太瓊尊爲皇太子、

日本書紀　四　孝靈天皇　（丙午）三十六年春正月己亥朔、立彦國葦尊爲皇太子、

日本書紀　四　孝元天皇　（戊申）二十二年春正月己巳朔壬午、立稚日本根子彦大日日尊爲皇太子、

日本書紀　四　開化天皇　（辛亥）二十八年春正月癸巳朔丁酉、立御間城入彦尊爲皇太子、

日本書紀　五　崇神天皇　（辛未）四十八年夏四月戊申朔丙寅、立活目尊爲皇太子、

日本書紀　六　垂仁天皇　（戊辰）三十七年春正月戊寅朔、立大足彦尊爲皇太子、

日本書紀　七　景行天皇　（辛酉）五十一年秋八月己酉朔壬子、立稚足彦尊爲皇太子、

日本書紀　七　成務天皇　（戊午）四十八年春三月庚辰朔、立甥足仲彦尊爲皇太子、

日本書紀　十　應神天皇　（己巳）四十年春正月甲子、立菟道稚郎子爲嗣、卽日任大山守令掌山川林野、以大鷦鷯尊（仁徳天皇）爲太子輔之、令知國事、

日本書紀　十一　仁徳天皇　（癸卯）三十一年春正月癸丑朔丁卯、立大兄去來穗別尊爲皇太子、

日本書紀　十二　履中天皇　（辛丑）二年春正月丙午朔己酉、立瑞齒別皇子爲儲君、

日本書紀　十三　允恭天皇　（甲戌）二十三年春三月甲午朔庚子、立木梨輕皇子爲皇太子、

堆略天皇の皇太子　清寧天皇の皇太子　仁賢天皇の皇太子　繼體天皇の皇太子　欽明天皇の皇太子　推古天皇の皇太子　孝徳天皇の皇太子　天智天皇の皇太子

日本書紀　十四　堆略天皇　（戊午）二十二年春正月己酉朔、以白髮（清寧天皇）皇子爲皇太子、

日本書紀　十五　清寧天皇　（壬戌）三年夏四月乙酉朔辛卯、以億計（仁賢天皇）王爲皇太子、

日本書紀　十五　仁賢天皇　（甲戌）七年春正月丁未朔己酉、立小泊瀬稚鷦鷯尊（武烈天皇）爲皇太子、

日本書紀　十七　繼體天皇　（癸巳）七年十二月辛巳朔戊子、詔曰、朕承天緒、獲保宗廟、兢々業々、（八日）聞者天下安靜、海內清平、屢致豐年、頻使饒國、懿哉摩呂古、示朕心於八方、盛哉勾大兄（安閑天皇廣國押武金日尊）光吾風於萬國、日本邕々、名擅天下、秋津赫々、譽重王畿、所寶惟賢、爲善最樂、聖化懋玆遠扇、玄功藉此長懸、寔汝之力、宜處春宮、助朕施仁、翼吾補闕、

日本書紀　十九　欽明天皇　（甲戌）十五年春正月戊子朔甲午、（七日）立皇子渟中倉太珠敷尊（敏達天皇）爲皇太子、

日本書紀　二十二　推古天皇　（癸丑）元年夏四月庚午朔己卯、（十日）立廐戸豐聰耳皇子爲皇太子、仍錄攝政、以萬機悉委焉、

日本書紀　二十五　孝徳天皇　（皇極）天豐財重日足姫天皇（孝徳天皇元年乙巳）四年六月庚戌、（十四日）（中略）天豐財重日足姫天皇授璽綬禪位、策曰、咨爾輕皇子云々、輕皇子再三固辭、（中略）由是輕皇子不得固辭、昇壇卽祚、（中略）是日奉號於豐財天皇曰皇祖母尊、以中大兄爲皇太子、

扶桑略記　五　天智天皇　（天智天皇葛城皇子）七年戊辰二月戊寅（二十三日）日、倭姫皇女立爲皇后、古人大兄皇子女、同日、以大

海皇子立皇太子、天武天皇是也、

日本書紀　二十八天武天皇　天淳(天武)中原瀛眞人天皇、(中略)天命(天智)開別天皇元年立爲東宮、四年冬十月庚辰(十七日)(天智)天皇臥病以痛之甚矣、於是遣蘇賀臣安麻侶、召東宮引入大殿、時安摩侶(麻カ)素東宮所好、密顧東宮曰、有意而言矣、東宮於茲疑有隱謀而愼之、天皇勅東宮授鴻業、乃辭讓之曰、臣之不幸、元有多病、何能保社稷、願陛下擧天下附皇后、仍立大友(弘文天皇)皇子、宜爲儲君、臣今日出家、爲陛下欲修功德、天皇聽之、

天武天皇の皇太子

扶桑略記　五天智天皇　十年辛未十月、天皇臥病、(中略)同月、立大友太政大臣爲皇太子、

水鏡　中天智天皇　十年ト申シヽ正月五日、御門ノ御子ニ大伴(友)ノ皇子ト申シヽヲ太政大臣ニ成奉給キ、(中略)サテ其年ノ十月ニゾ、大伴ノ太政大臣ハ東宮ニ立給シ、

日本書紀　二十九天武天皇　十年(壬午)二月庚子朔甲子(二十五日)、(中略)是日立草壁皇子尊爲皇太子、因以令攝萬機、

持統天皇の皇太子

釋日本紀　十五述義十一　十一年、爲東宮大傅、

私記曰、愚案、當卷三年夏四月、太子草壁皇子薨、其後未立皇太子、而十一年二月丁卯朔甲午、二十八日也、召東宮大傅並春宮大夫等、八月乙丑朔、天皇定策禁中、禪天皇位於皇太子云云、以此案之、丁卯朔下、可設壬午立珂瑠皇子爲皇太子之句歟、何則、案王子枝別記云、文武天皇少名珂瑠皇子、天武天皇皇太子草壁皇子尊之子也、持統天皇十一年春二月丁卯朔壬午、十六日也、立爲皇太子云云、師說、可謂史之失誤也、藤侍郎同之、右尙書後聞又許之、

元明天皇の皇太子

續日本紀　九聖武天皇　天璽(聖武天皇首親王)國押開豐櫻彥天皇、(註略)天之(文武)眞宗豐祖父天皇之皇子也、母曰藤原夫人(宮子娘)、(中略)和銅七年六月、立爲皇太子、

聖武天皇の皇太子

續日本紀　十聖武天皇　神龜四年十一月己亥(二日)、(中略)詔曰、朕賴神祇之祐、蒙宗廟之靈、久有神器、新誕皇子、宜立爲皇太子、布告百官、咸令知聞、

續日本紀　十三聖武天皇　天平十年春正月壬午(十三日)、立阿倍內(孝謙天皇)親王爲皇太子、

孝謙天皇の皇太子

續日本紀　十九孝謙天皇　天平勝寶八歲五月乙卯(二日)、是日太上(聖武)天皇崩於寢殿、遺詔、以中務卿從四位上道祖王爲皇太子、

續日本紀　二十孝謙天皇　天平寶(天平勝寶九)字元年夏四月辛巳(四日)、(中略)是日遣內舍人藤原朝臣薩雄、中衞廿人、迎大炊王(淳仁天皇)立爲皇太子、

光仁天皇の皇太子
桓武天皇の皇太子
平城天皇の皇太子
嵯峨天皇の皇太子
淳和天皇の皇太子
仁明天皇の皇太子

續日本紀　光仁天皇（三十一）　寶龜二年春正月辛巳（二十三日）、立他戸親王爲皇太子、

續日本紀　光仁天皇（三十二）　寶龜四年春正月戊寅（二日）、立中務卿四品諱（桓武天皇山部親王）爲皇太子、

續日本紀　光仁天皇（三十六）　天應元年夏四月壬辰（四日）、立皇弟早良親王爲皇太子、

續日本紀　桓武天皇（三十八）　延曆四年十一月丁巳（二十五日）、詔、立安殿親王（平城天皇）爲皇太子、

日本後紀　平城天皇（十四）　大同元年五月壬午（十九日）、詔、彈正尹某（嵯峨天皇神野親王）定賜皇太弟、

日本紀略　嵯峨天皇　大同四年四月己丑（十四日）、立高丘（岳）親王爲皇太子、

日本後紀　嵯峨天皇（二十）　弘仁元年九月庚戌（十三日）、是日廢皇太子（高岳親王）、立中務卿諱（大伴親王）淳和爲皇太弟、

日本紀略　淳和天皇　弘仁十四年四月壬寅（十八日）（中略）先立侍從々四位下恆世王爲皇太子、々々上表固辭、仍立正良（仁明天皇）親王爲皇太子、

續日本後紀　仁明天皇（一）　天長十年二月丁亥（三十日）、立恆貞親王爲皇太子、

續日本後紀　仁明天皇（十二）　承和九年八月乙丑（四日）、公卿重上表、言應任天下之望、早立儲貳之狀、因循故事、輕用上聞、陛下遠布謙光、未定所請、特降明詔、更使疇咨、臣等道謝博聞、職忝端揆、何能對揚帝系、匡贊皇圖、但周家季歷、漢室臨江、事據權時、非必通典、其樹嫡以長、曠古之徽猷、立子以尊、先生之茂實也、今者皇子道康（文德天皇）親王、系當正統、性在溫恭、率土宅心、群后歸美、豈弃震方之元長、擇蕃屏之諸王、伏願、准的舊儀、立爲太子、不勝丹款之至、謹重上表以聞、是日立皇太子、

文德天皇の皇太子
清和天皇の皇太子
光孝天皇の皇太子
宇多天皇の皇太子
醍醐天皇の皇太子
朱雀天皇の皇太子
村上天皇の皇太子

文德實錄　二　嘉祥三年十一月戊戌（二十五日）、戊、惟仁（清和天皇）親王爲皇太子、

三代實錄　清和天皇（十六）　貞觀十一年二月己丑、朔、天皇臨軒、立貞明（陽成天皇）親王爲皇太子、

三代實錄　光孝天皇（五十）　仁和三年八月廿六日丁卯、天皇聖體乖豫、是日立第七皇子諱（宇多天皇定省親王）爲皇太子、

日本紀略　宇多天皇　寬平五年四月二日庚午、詔、敦仁（醍醐天皇）親王爲皇太子、

日本紀略　醍醐天皇　延喜四年二月十日乙亥、今上第二子崇象（保明）親王爲皇太子、於紫宸殿宣制、

（延喜二十三）延長元年四月廿九日癸酉、詔、以故文獻彥（保明親王）太子息慶賴王爲皇太子、

日本紀略　朱雀天皇　天慶七年四月廿一日庚辰、以第十一無品寬明（朱雀天皇）親王爲皇太子、

日本紀略　冷泉天皇　冷泉院王爲皇太子、

諱憲平、村上天皇第二子也、（中略）天曆四年七月廿三日戊子、於外祖右大臣（藤原師輔）第立爲皇太子、

日本紀略 冷泉天皇の皇太子

康保四年九月一日丙戌、立先皇（村上）第五皇子守平（圓融天皇）親王爲皇太弟、

日本紀略 圓融天皇の皇太子

安和二年八月十三日戊子、（中略）又立先帝（冷泉）第一皇子師貞（花山天皇）親王爲皇太子、

日本紀略 花山天皇の皇太子

永觀二年八月廿七日、（中略）又以先皇（圓融）第一懷仁（一條天皇）親王爲皇太子、

日本紀略 一條天皇の皇太子

寬和二年七月十六日壬午、冷泉院第二居貞（三條天皇）親王於外祖（藤原兼家）摠政南院第加元服、年十一、今日立親王爲皇太子、

日本紀略 三條天皇の皇太子

寬弘八年六月十三日乙卯、（中略）又立第二敦成（後一條天皇）親王爲皇太子、

日本紀略 後一條天皇の皇太子

長和五年正月廿九日甲戌、（中略）又立先皇（三條）第一皇子式部卿敦明親王爲皇太子、

寬仁元年八月九日甲戌、皇太子敦明親王請退儲皇、卽日立帝同胞弟敦良（後朱雀天皇）親王爲皇太弟、

扶桑略記 後朱雀天皇の皇太子

二十八　後朱雀天皇

長元（長暦元）十年丁丑八月十七日、以親仁（後冷泉天皇）親王立皇太子、

寬德二年乙酉正月十六日癸酉、天皇讓位於皇太子親仁親王、同日第二皇子尊仁（後三條天皇）親王立

扶桑略記 後冷泉天皇の皇太子

二十九　後三條天皇

治曆（延久元）五年己酉四月廿八日甲子、以今上第一皇子貞仁（白河天皇）親王立皇太子、

百錬抄 後三條天皇の皇太子

延久四年壬子十二月八日壬午、戌時天皇春秋三十九、讓位於皇太子貞仁親王、同日以第二皇子實仁親王爲皇太子、

百錬抄 白河天皇の皇太子

五　堀河院

康和五年八月十七日、立第一親王宗仁（鳥羽天皇）爲皇太子、一歲、去正月降誕、一歲立坊、淸和、冷泉二代之例也、

百錬抄 堀河天皇の皇太子

六　崇德院

保延五年八月十七日、立體仁（近衞天皇）親王爲皇太子、太上皇第六子、母從三位得子、美福門院也、

百錬抄 崇德院の皇太子、後白河天皇の皇太子

七　二條院

二條天皇、諱守仁、七年、

百錬抄 六條天皇の皇太子、高倉天皇の皇太子

七　六條院

仁安元年十月十日、以憲仁（高倉天皇）親王爲皇太子、

百錬抄

八　高倉院

治承二年十二月十五日、以第一皇子言仁（安德天皇）爲皇太子、

土御門天皇の皇太子
順德天皇の皇太子
後堀河天皇の皇太子
後嵯峨天皇の皇太子
後深草天皇の皇太子
龜山天皇の皇太子
後宇多天皇の皇太子
伏見天皇の皇太子
後伏見天皇の皇太子
後二條天皇の皇太子

百錬抄　十一　土御門院　正治二年庚申四月十五日、有立太子之事、（順德天皇守成親王）

百錬抄　十二　佐渡院　建保六年十一月廿六日、被行立太子節會、（仲恭天皇懐成親王）

百錬抄　十三　後堀河院　寛喜三年十月廿八日、今上第一親王爲皇太子、秀仁、（四條天皇）

百錬抄　十五　後嵯峨院　寛元元年八月十日、今上第一皇子　久仁、（後深草天皇）有立太子事、

百錬抄　十七　後深草院　正嘉二年八月七日癸未、立坊儀也、（後嵯峨上皇）院第二親王　恒仁爲東宮、（龜山天皇）

吉續記　文永五年八月廿五日甲辰、（後宇多天皇世仁親王）今日立太子也、

歷代編年集成　二十七　伏見院　第九十二代　伏見院諱熙仁、

後深草院第一皇子、（中略）建治元年乙亥十一月五日、立太子、

勘仲記　正應二年四月廿五日甲戌、今日今上若宮（後伏見天皇諱胤仁親王）二歳、御母儀故五辻宰相立太子册命日也、（伏見）

增鏡　十四　つげのをぐし　堀川の具守のおとゞの女の御はらに、さきの（基子）新院の若宮（後宇多）むまれ給へりし、（永仁六年）六月廿七日、御元服し給て、八月十日、春宮にたち給ぬ、御諱邦治ときこゆ、（後二條天皇）

萬一記　正安三年八月廿四日、參內、依立太子節會也、（中略）今日册太子事被宣下、

（中略）次定房朝臣著軾仰云、以富仁親王（花園天皇）可爲皇太子、令作宣命、（中略）宣命使著版宣制、

花園天皇の皇太子
後醍醐天皇の皇太子
長慶天皇の皇太子

〔萬里小路宣房〕

歷代皇紀　五　後醍醐天皇　德治三年九月十九日、（後醍醐天皇尊治親王）立太子、

資朝卿記　文保二年三月九日、今日有立坊之儀、後二條院一宮、邦良親王、

增鏡　十七　春の別　かくさま〴〵におはしますを、此たびいかで坊にとおぼしつれど、かねてよりもよほしおぼせられし事なれば、あづまより人まいりて、（後伏見上皇）（光嚴院量仁親王）本院の一の宮をさだめ申つゝいとけやけくきこしめせど、いかゞはせんにて七月廿四日に（嘉暦元年）皇太子の節會をこなはる、

元弘日記裏書　（元弘四）建武元年正月二十三日、以恆良親王爲皇太子、

新葉和歌集　下　雜歌上　十六　延元四年よしのゝ行宮にて、（義良親王）後村上院立坊有し比よめる、

前大僧正賴意

花の色鳥の聲まて時にあふ春の宮ぞ光ことなる

和漢合符　十　延元四　曆應二年己卯三月、（後村上天皇）儲君入芳野、

嘉喜門院御集　秋　正平廿三年八月つねよりもあはれなりし夕暮に、（後龜山天皇照成王）春宮の御方より、

靈元天皇の皇太子
東山天皇の皇太子
中御門天皇の皇太子
櫻町天皇の皇太子
後櫻町天皇の皇太子
光格天皇の皇太子
仁孝天皇の皇太子
明治天皇の皇太子

おもひやれ同し空にやなかむらんなみたせきあへぬ秋の夕暮

兼輝公記　天和三年二月九日、今日立太子也、(東山天皇朝仁親王)

季連宿禰記　寶永五年二月十六日癸亥、(中略)今日親王御方(中御門天皇慶仁親王)(東山)今上皇子、御八才、御母櫛笥前中納言隆賀卿女、新大典侍局、宮去年四月廿九日立親王、有立太子之事、被行節會幷小除目、

光榮卿記　享保十三年六月十一日、此日立太子節會也、(櫻町天皇昭仁親王)

八槐記　延享四年三月十六日丙午、(中略)此日遐仁親王冊命皇太子日也、(桃園天皇)

八槐記　明和五年二月十九日戊寅、(中略)英仁親王(後桃園天皇)春秋十一歲、(桃園)先帝皇子、立皇太子之日也、

篤長卿記　文化六年三月廿四日甲申、今日冊命立太子也、(光格)當今第五皇子、儲君親王、御(仁孝天皇)諱惠仁、十歲、爲中宮御實子、(欣子內親王)實母勸修寺故前大納言經逸卿女、宰相典侍婧子、

隆光卿記　天保十一年三月十四日乙巳、今日統仁親王可有冊命立太子、(孝明天皇)

官報　號外明治二十二年十一月三日

朕祖宗ノ遺範ニ循ヒ嘉仁親王(大正天皇)ヲ立テヽ皇太子ト爲ス玆ニ之ヲ公布シテ周ク知悉セシム

明治二十二年十一月三日

皇子を皇太子と爲したまへる例
皇女を皇太子と爲したまへる例
皇孫を皇太子と爲したまへる例

宮內大臣子爵　土方久元奉

二

日本書紀　四　懿德天皇　大日本彥耜友天皇、(安寧)磯城津彥玉手看天皇第二子也、(中略)磯城津彥玉手看天皇十一年春正月壬戌(一日)、立爲皇太子、

三代實錄　三十　陽成天皇　後太上天皇

天皇、諱貞明、(清和)先太上天皇之第一子也、(中略)貞觀十一年二月一日、天皇立爲皇太子、誕育三月矣、

百錬抄　十三　後堀河院　寬喜三年十月廿八日、今上第一親王爲皇太子、秀仁、(四條天皇)

憲臺記　延享四年三月十六日丙午、(中略)是日遐仁親王、(桃園天皇)春秋七歲、(櫻町)今上皇子、(中略)有策命立太子事、(柳原光綱寶曆十年薨)

八槐記　延享四年三月十六日丙午、此日遐仁親王冊命皇太子日也、

續日本紀　十三　聖武天皇　(天平)十年春正月壬午(十三日)、立阿倍內親王爲皇太子、(孝謙天皇)

續日本紀　一　文武天皇　天之眞宗豐祖父天皇、(天武)天渟中原瀛眞人天皇之孫、(草壁)日並知皇子尊之第二子也、(中略)高天原廣野姬天皇十一年、立爲皇太子、(持統)

本朝皇胤紹運錄　上

舒明天皇（第三十五）
- 天智天皇（第三十九）
  - 持統天皇（第四十一）
- 天武天皇（第四十）
  - 草壁皇子　母持統天皇
    - 文武天皇（第四十二）

續日本紀　九　聖武天皇　天璽國押開豐櫻彦天皇、（註　略）天之（文武）眞宗豐祖父天皇之皇子也、（中　略）和銅七年六月、立爲皇太子、（元明天皇）

本朝皇胤紹運錄　上

舒明天皇（第三十五）
- 天智天皇（第三十九）
  - 元明天皇（第四十三）
- 天武天皇（第四十）
  - 草壁皇子
    - 文武天皇（第四十二）
      - 聖武天皇（第四十五）

日本紀略　醍醐天皇　（延喜二十三）延長元年四月廿九日癸酉、詔、以故文獻（保明親王）彥太子息慶賴王爲皇太子、

本朝皇胤紹運錄　中

醍醐天皇（第六十）
- 保明親王
  - 慶賴王

日本書紀　十五　仁賢天皇　億計天皇、諱大脚、（註　略）字嶋郎、弘（顯宗）計天皇同母兄也、（中　略）三年夏四月、遂立億計天皇爲皇太子、（清寧天皇）事具弘計天皇紀、計五年白（清寧）髮天皇崩、天皇以天下讓弘計天皇、爲皇太子如故、事具弘計天皇紀也、

本朝皇胤紹運錄　上

履中天皇（第十八）
- 皇兄を皇太子と爲したまへる例

皇弟を皇太子と爲したまへる例

市邊押羽皇子
- 第二十五 仁賢天皇
- 第二十四 顯宗天皇

日本書紀　十二　反正天皇　瑞齒別天皇、(履中)去來穗別天皇同母弟也、去來穗別天皇二年立爲皇太子、

本朝皇胤紹運錄　上

第十七 仁德天皇
- 第十八 履中天皇
- 第十九 反正天皇

續日本紀　三十六　光仁天皇　天應元年(桓武天皇)四月壬辰(四日)、立皇弟早良親王爲皇太子、

本朝皇胤紹運錄　中

第四十九 光仁天皇
- 第五十 桓武天皇
- 早良親王

皇叔父を皇太子と爲したまへる例

百錬抄　七　六條院　仁安元年十月十日、以憲仁(高倉天皇)親王爲皇太子、

本朝皇胤紹運錄　中

第七十七 後白河院
- 第七十八 二條院
- 第七十九 六條院
- 第八十 高倉院

皇兄弟の御子を皇太子と爲したまへる例

日本書紀　七　成務天皇　四十八年三月庚辰朔、立甥足仲彦(仲哀天皇)尊爲皇太子、

本朝皇胤紹運錄　上

第十二 景行天皇
- 小碓尊
- 第十三 成務天皇

第十四 中哀天皇(仲)

日本書紀　二十二　推古天皇　元年夏四月庚午朔己卯(十日)、立厩戸豐聰耳皇子爲皇太子、

本朝皇胤紹運錄　上

第三十 欽明天皇
第三十一 用明天皇
庶戸皇子　聖德太子是也
第三十四 推古天皇

日本紀略　淳和天皇　弘仁十四年四月壬寅(十八日)、(中略)先立侍從々四位下恒世王(淳和天皇皇子)爲皇太子、々々上表固辭、仍立正良親王(仁明天皇)爲皇太子、

本朝皇胤紹運錄　中

第五十 桓武天皇
第五十一 嵯峨天皇
第五十三 淳和天皇
第五十四 仁明天皇

日本紀略　圓融天皇　安和二年八月十三日戊子、(中略)立先帝(冷泉)第一皇子師貞親王(花山天皇)爲皇太子、

皇伯叔父の御子を皇太子と爲したまへる例

本朝皇胤紹運錄　中

第六十二 村上天皇
第六十三 冷泉院
第六十五 花山院
第六十四 圓融院

八槐記　明和五年二月十九日戊寅、(後桃園天皇)英仁親王(春秋十一歲)、(先帝)皇子、立皇太子之日也、左大臣尙實奉勅被行之、

本朝皇胤紹運錄　下

第百十六 櫻町院
第百十八 後櫻町院
第百十七 桃園院
第百十九 後桃園院

續日本後紀　一　仁明天皇　天長十年二月丁亥(三十日)、立恒貞親王爲皇太子、

本朝皇胤紹運錄　中

第五十桓武天皇
- 第五十二嵯峨天皇
- 第五十四仁明天皇
- 第五十三淳和天皇

恒貞親王

日本紀略　花山天皇　花山院

諱師貞、（中略）永觀二年八月廿七日、（中略）又以先皇（圓融）第一懷仁（一條天皇）親王爲皇太子、

本朝皇胤紹運錄　中

第六十二村上天皇
- 第六十三冷泉院
- 第六十五花山院
- 第六十四圓融院
- 第六十六一條院

日本紀略　一條天皇　寬和二年七月十六日壬午、冷泉院第二居貞（三條天皇）親王、（中略）今日立親王爲皇太子、

本朝皇胤紹運錄　中

第六十二村上天皇
- 第六十三冷泉院
- 第六十五三條院
- 第六十四圓融院
- 第六十六一條院

百錬抄　四　三條院　三條天皇、諱居貞、（中略）寬弘八年六月十三日受禪、是日立敦成（後一條天皇）親王爲皇太子、四歲、一條院二男、

本朝皇胤紹運錄　中

第六十二村上天皇
- 第六十三冷泉院

遠き皇親を皇太子と爲したまへる例

第六十七 三條院
第六十四 圓融院
第六十六 一條院
第六十八 後一條院

日本書紀　十五 顯宗天皇　白髮(清寧)天皇三年春正月、天皇隨億計(仁賢天皇)王到攝津國、使臣連持節、以王靑蓋車迎入宮中、夏四月、立億計王爲皇太子、

本朝皇胤紹運錄　上

第十七 仁德天皇
第十八 履中天皇
市邊押羽皇子
第二十五 仁賢天皇
第二十四 顯宗天皇
第二十 允恭天皇
第二十二 雄略天皇

第二十三 淸寧天皇

續日本紀　十九 孝謙天皇　天平勝寶八歲五月乙卯(二日)、(中略)是日太上(聖武)天皇崩於寢殿、遺詔以中務卿從四位上道祖王爲皇太子、

本朝皇胤紹運錄　上

第四十 天武天皇
草壁皇子
第四十一 文武天皇
第四十五 聖武天皇
第四十六 孝謙天皇
新田部親王
道祖王

續日本紀　二十 孝謙天皇　(天平勝寶九)天平寶字元年夏四月辛巳(四日)、(中略)是日遣內舍人藤原朝臣薩雄、中衞卅人、迎大炊(淳仁天皇)王立爲皇太子、

續日本紀　二十一 淳仁天皇　廢帝諱大炊王、(天武)天淳中原瀛眞人天皇之孫、一品舍人親王之第

七子也、（中略）四月四日乙巳（天平勝寶九歳（辛カ））、遂迎大炊王於仲麻呂田村第、立爲皇太子、

本朝皇胤紹運錄　上

第四十 天武天皇
- 草壁皇子
  - 第四十二 文武天皇
    - 第四十五 聖武天皇
      - 第四十六 孝謙天皇
        - 舍人親王
          - 第四十七 淡路廢帝 諱大炊
- 續日本紀 三十一 光仁天皇 寶龜元年（神護景雲四）八月四日癸巳、高野天皇（稱德）崩、群臣受遺、卽日立諱爲皇太子、
- 本朝皇胤紹運錄　上
  - 第三十五 舒明天皇
    - 第三十九 天智天皇

第四十 天武天皇
- 草壁皇子
  - 第四十二 文武天皇
    - 第四十五 聖武天皇
      - 第四十六 孝謙天皇
        - 第四十八 稱德天皇 孝謙重祚
          - 施基皇子
            - 第四十九 光仁天皇

三　日本紀略　平城天皇

大同元年五月壬午（十九日）、（中略）詔、彈正尹某（神野親王）嵯峨定賜皇太弟、

本朝皇胤紹運錄　中

第五十 桓武天皇
- 第五十一 平城天皇
- 第五十二 嵯峨天皇

日本紀略　嵯峨天皇　弘仁元年九月庚戌（十三日）、是日廢皇太子（高岳親王）、立中務卿諱（大伴親王）淳和爲皇太弟、

本朝皇胤紹運錄　中

第五十　桓武天皇
- 第五十一　嵯峨天皇
- 第五十三　淳和天皇

日本紀略　冷泉天皇　康保四年九月一日丙戌、立先皇（村上）第五皇子守平（圖證天皇）親王爲皇太弟、

本朝皇胤紹運錄　中

第六十二　村上天皇
- 第六十三　冷泉院
- 第六十四　圓融院

日本紀略　後一條天皇　寬仁元年八月九日甲戌、皇太子敦明親王請退儲皇、卽日立帝同胞弟敦良親王（後朱雀天皇）爲皇太弟、

本朝皇胤紹運錄　中

第六十六　一條院
- 第六十八　後一條院
- 第六十九　後朱雀院

爲房卿記　應德二年十一月八日戊戌、今日寅刻、皇太弟（實仁親王）冊命爲太子云々、薨給、（春秋十五、後三條院第二親王、母故參議源基平卿子、女御也、延久四年十二月八日爲太弟、）

本朝皇胤紹運錄　中

第七十一　後三條院
- 第七十二　白河院
- 實仁親王

續世繼　二やへのしほぢ　いまの女院（鳥羽天皇皇后美福門院得子）時めかせ給ひて、近衞（實仁親王）のみかどうみたてまつらせ給へる、東宮に立てまつりて位ゆづりたてまつらせ給ふ、（中略）みかどの御養ひ子例なきこととて、皇太弟とぞ宣命にはのせられ侍りける、

本朝皇胤紹運錄　中

第七十四　鳥羽院
- 第七十五　崇德院

第七十七 後白河院
第七十六 近衛院

御讓位部類記　宮槐記　承元四年十一月廿五日己酉、（中略）今日御讓位也、皇太（順德天皇）第十四歲、舊主十六歲、（土御門天皇）可被渡璽劒皇太弟御在所云々、

本朝皇胤紹運錄　中

第八十二 後鳥羽院
第八十三 土御門院
第八十四 順德院

ヒツギノミコ

東宮春宮の稱

四　日本書紀私記　人代　太子、日豆支乃美己、

和訓栞　二十五比　ひつぎのみこ　日本紀に皇太子を訓せり、日嗣に立たまふ御子也、又儲君をもよめるは、皇太弟などをまうす也、

運歩色葉集　一登　東宮、唐名大傅、太子、詹事、春宮、皇太子事、

八雲御抄　三下異名　春宮　はるのみや　あをきみや　みこのみや　まうけの宮

新野問答　春宮幷東宮

皇太子の別稱

東宮、春宮、此二品いかゞ覺悟候哉、（野宮定基）答、東宮は、皇太子の御身の上を書申候時、東宮と書申候、春宮は、坊に奉仕傅、大夫、亮、進、役の官の名を書申候、ひつきやう二字共に同心にて候、東春二字とも、はじめ又は一の心にて候、歌には春の宮とよみ申候、

雜問答考　東宮春宮と書事

答に、東宮とは、皇太子の御身をさすといふはさる事ながら、いか成故にさはいふといはぬは答のかひなし、先此御事を、いと古へは日嗣の皇子命と申し、又某の皇子命とのみも申せし也、さて後に字にては、皇太子、儲君など書たり、令など行はるゝほどより、その皇太子の御在所を東宮とかき、大夫以下官人の奉仕所を春宮と書わけたり、それより後々に、東宮と書は卽皇太子の御身をさす事となりぬ、又此答に、春宮は坊に奉仕傅、大夫云云と云は誤れり、大夫以下は春宮に奉仕れり、傅と學士は輔導奉說の職故に、卽太子の御在所に侍りて春宮坊にはゐず、持統紀より以下の書に、皆東宮傅、東宮學士と有也、

（頭書）天智紀に、太子をさして東宮と書しことあれど、是は奈良の朝にて書し物のみ、

拾芥抄　中本官位唐名　春宮　春闈　青宮　昭陽　（少）小陽　儲君　儲闈　儲貳　詹事　龍樓　鶴禁　前星　明兩

竹書紀年　下穆王九年　築春宮、王所居有鄭宮春宮、

漢魏六朝一百三家集　王司空集皇太子箴　秋坊通夢、春宮養德、

陸宣公翰苑集　七李勉太子太師制　輔翼春闈、是資教諭、

初學記　青宮、一曰春宮、太子宮也、

文選　一西都賦　昭陽特盛、隆於孝成、善曰、漢書曰、孝成趙皇后弟、絕幸爲昭儀居昭陽舍、其璧帶往往爲黃金釭、函藍田璧、明珠翠羽飾之、

文選　四十六三月三日曲水詩序　正體毓德於少陽、王宰宣哲於元輔、少陽東宮也、鄭玄禮記注曰、東郊少陽諸侯象也、

白虎通義　一京師　天子太子食采者、儲君嗣主也、當有土以尊之也、

文選　四十奏彈王源　父璿升采儲闈、亦居清顯、良曰、儲闈、東宮也、

晉書　二十一禮下　志十一　太寧三年三月戊辰、明帝立皇子衍爲皇太子、癸巳、詔曰、禮無生而貴者、故帝元子、方之於士、而漢魏以來、尊崇儲貳、使官屬稱臣、朝臣咸拜、此甚無謂、

漢書　十九百官公卿表七上　詹事、秦官、掌皇后太子家、有丞、屬官有太子率更家令丞僕、中盾、衛率、厨廐、長丞、又中長秋、私府、永巷、倉廐、祠祀、食官、令長丞、諸宦官皆屬焉、

東宮

春宮

漢書　十成帝紀　上嘗急召太子、出龍樓門、張晏曰、門樓上有銅龍、若白鶴飛廉之爲名也、不敢絕馳道、

五車韻瑞　一百一十九禁字　鶴禁、列仙傳、周靈王太子、七月七日、乘白鶴駐山巓、謝時人而去、後世稱太子之駕曰鶴駕、禁曰鶴禁、

漢書　二十七五行志七下之下　星傳曰、心大星天王也、其前星太子、後星庶子也、

文選　三十擬魏太子鄴中集　不謂息肩願、一旦値明兩、濟曰、武帝既明、而太子又明、故謂太子爲明兩也、

下學集　上人倫門　儲君（チヨクン）（マウケノキミ）　春宮（トウグウ）即東宮也、青圍（セイイ）（圍カ）東宮、龍樓（リヨウロウ）東宮、

伊呂波字類抄　一波　地儀　坊（バウ）、春宮

日本書紀　二十三舒明天皇　（辛丑）十三年冬十月己丑朔丁酉（九日）、天皇崩于百濟宮、丙午（十八日）、殯於宮北、是謂百濟大殯、是時東宮開別皇子（マウケノミヤヒラカスワケノミコ）年十六而誄之、

左經記　寬仁元年八月九日甲戌、申刻東宮立給、作法如常、

猪隈關白記　正治二年十一月廿一日癸酉、此日有（中略）東宮御著袴事、

基楨卿記　享保十三年六月廿三日壬寅、此日禁中ニ而東宮拜覲有之、

日本書紀　十七繼體天皇　（癸巳）七年十二月辛巳朔戊子（八日）、詔曰、（中略）宜處春宮（ヒツギノミコノ位ニ）、助朕施仁、翼吾補闕、

新後撰和歌集　十七　雜歌上　(伏見)院、みこの宮と申しける時、御持僧に加はりて、程なく位につかせ給ひて後、天台座主になりて、内裏にて春の頃七佛藥師の法をおこなひ侍りける時、思ひつゞけ侍りける、

春の宮に仕へしまゝの年をへて今は雲居の月をみるかな

前大僧正源惠

榮花物語　九　岩蔭　御讓位(寛弘八年)六月十三日なり、十四日より御心ちをもらせ給、(敦成親王)わか宮春宮にたゝせ給ぬ、

五代帝王物語　(文永)同五年八月廿五日、主上第二宮(後宇多)世仁親王、御母(藤原佳子)后宮、春宮に立給ふ、御歳二歳也、

御湯殿上日記　明和五年二月廿八日、春宮御方行けいはしめにて、女院御方〻御まな一折まいる、春宮御方成、御しうき三種二かまいる、

日本書紀　十二　履中天皇　(辛丑)二年春正月丙午朔己酉(四日)立瑞歯別(反正天皇)皇子爲儲君(ヒツギノキミ　ヒツギノミコ(北野本))、

日本書紀　十二　反正天皇　(丙午)元年春正月丁丑朔戊寅(二日)儲君卽天皇位、

本朝文粹　九　論文　序乙　詩序二　七言、冬日陪東宮、聽第一皇孫(敦明親王)初讀御注孝經、應令、

江匡衡

夫孝者德之本也、風敎所生、學者邦之先也、日新所寶、學若儲君、令第一碩儒參議吏部侍郎菅原朝臣授御注孝經於第一皇孫、道之行也、

源氏物語　一　桐壺　一のみこは、右大臣の女御の御はらにて、よせおもく、うたがひなきまうけのきみと世にもてかしづき聞ゆれど、此御にほひにはならび給ふべくもあらざりければ、

續日本紀　二十四　淳仁天皇　天平寶字六年冬十月(十四日)己未、夫人正三位縣犬養宿禰廣刀自薨、(中略)聖武皇帝儲貳之日、納夫人生安積親王、

續日本後紀　十二　仁明天皇　承和九年八月(四日)乙丑、公卿重上表、言應任天下之望、早立儲貳之狀、

凌雲集　(嵯峨天皇)御製廿二首　夏日皇太弟南池納涼儲貳南池裏、盡洗煩襟碧水灣、岸影見知楊柳處、潭香聞得菱荷間、風來前浦收煙遠、鳥散後林欲暮閑、天下共言貞萬國、何勞羽翼訪商山、

符宣抄　別本皇太子事　臣某等言、(中略)踐祚以降八年於玆矣、春闈未逮、震宮久虛、(中略)伏願早立儲嗣、永固本枝、樂正按重潤之章、端士思輔翼之道、臣等不勝懇欵□(之カ)至、謹奉表

陳請以聞、臣某等誠惶誠恐、□(頓々首カ)□々、死々罪々、謹言、

延喜四年正月廿七日

爲房卿記　康和五年七月一日戊寅、早旦從院有召事、去夕□青圍(閤)御同宿如何者、准據例可尋申、門院□冷泉院儲貳之間、久令同宿給之由、豫以執奏了、

萬一記　正安三年八月二十四日、參內、依立太子節會也、(中略)坊官奏慶之後、左少將俊言朝臣爲勅使被獻御劒於青闈、

小右記　寛弘八年三月十三日丙戌、資平云、昨日青宮、(中略)五度爲限、募以小鮎云々、

八槐記　明和五年三月三日辛卯、參內、賀申上巳節、拜天顏、青宮有御同座、

續日本後紀　十二　仁明天皇　承和九年八月壬戌朔、(中略)左大臣正二位藤原朝臣緒嗣、右大臣從二位源朝臣常已下十二人上表言、周固本枝、寔資重離之業、漢啓磐石、必建少陽之宮、(中略)頃者昊穹降禍、太(嵯峨)上皇帝昇遐、山陵未乾、逆臣謀亂、推究由緒、事屬儲闈、皆賴聖明、並羅憲網、方今上嗣佇賢、前星虛位、其皇太子者、國之元基、不可暫曠、監撫惟重、審論所歸、伏望、具擧彝章、早立明兩、

續日本後紀　一　仁明天皇　天長十年三月戊子朔、(中略)後(淳和)太上天皇重復奉書曰、(中略)今恒貞漢莊難擬、周儲不追、(中略)恐龍樓之守爰墜、鮑俎之譏有聞、

政事要略　二十二　八月上　年中行事　二十二　四日北野天神會事　廿三(延喜)年四月廿日、詔曰、追而賞之、往聖遺訓、過而宥之、先王格言、故太宰權帥從二位菅原朝臣、在朕童蒙、嘗其侍讀、自從宸宮之日、至于宸位之朝、久爲近臣、非无勤苦、而身從謫宦、命殞遐鎭、雖積多歲、何有相忘、故贈本職、兼增一階、爰示舊意、以慰幽靈、宜棄去昌泰四年正月廿五日宣命、燒却之、(大內記三善文以作、)

從二位菅原朝臣

右可贈正二位

中務、昔侍龍樓之闥、又趍鳳闕之庭、久仕之間、歲月多積、而遙汲山川之外郊、不歸京城之舊里、故訪幽魂、深存懷古、宜贈先華之朝章、以照古苔之夜壑、可依前件、主者施行、

年　月　日

爲房卿記　應德二年十一月一日辛卯、從昨日殿下(藤原師實)令候大內給、御出之次、令參龍樓給、依日來煩疱瘡給也、

源氏物語　一　桐壺　坊にも、ようせずばこのみこのわ給ふべきなめりと、一のみこの

女御はおぼしうたがへり、(中略)明くる年の春、坊定まり給ふにも、

爲房卿記　康和五年七月二日己卯、□前被仰立坊間事、(晩)曉頭戸部(源俊明)參入、爲御使參內、

愚管抄　二皇帝年代記　今上(仲恭)

諱懷成、承久三年辛巳四月廿日甲戌、受禪、四歲、建保六年十一月廿六日立坊、一歲、

立太子詔の初例

繼體天皇の立太子詔

五　**日本書紀**　十七繼體天皇　七年(癸巳)十二月辛巳朔戊子(八日)、詔曰、朕承天緒、獲保宗廟、兢々業々、間者天下安靜、海內淸平、屢致豐年、頻使饒國、懿哉摩呂古、示朕心於八方、盛哉勾大兄(安閑天皇廣國押武金日尊)光吾風於萬國、日本邕々、名擅天下、秋津赫々、譽重王畿、所寶惟賢、爲善最樂、聖化憑茲遠扇、玄功藉此長懸、寔汝之力、宜處春宮、助朕施仁、翼吾補闕、

聖武天皇の立太子詔

六　**續日本紀**　十聖武天皇　神龜四年閏九月丁卯(二十九日)、皇子誕生焉、十一月己亥(二日)、天皇御中宮、太政官及八省各上表、奉賀皇子誕育、幷獻玩好物、(中略)詔曰、朕賴神祇之祐、蒙宗廟之靈、久有神器、新誕皇子、宜立爲皇太子、布告百官、咸令知聞、

光仁天皇の立太子詔

續日本紀　三十一光仁天皇　寶龜二年春正月辛巳(二十三日)、立他戸親王爲皇太子、詔曰、明神御八洲養德根子天皇詔旨勅命乎、親王、諸王、諸臣、百官人等、天下公民衆聞食宣、隨法爾皇后御子他戸親王立爲皇太子、故此狀悟弖、百官人等仕奉詔天皇御命、諸聞食止宣、故是以大赦天下罪人、又一二人等冠位上賜治賜、又官人等大御手物賜、高年窮乏孝義人等養給治賜牟止勅天皇命乎、衆聞食宣、

桓武天皇の立太子詔

續日本紀　三十二光仁天皇　寶龜四年春正月戊寅(二日)、立中務卿四品諱(桓武天皇山部親王)爲皇太子、詔曰、明神大八洲所知須和根子天皇詔旨勅命乎、親王、諸王、諸臣、百官人等、天下公民衆聞食止宣、隨法爾可有伎政止志弖、山部親王立而皇太子止定賜布、故此之狀悟天、百官人等仕奉禮止詔天皇勅命乎、衆聞食宣、大赦天下、但謀殺故殺訖、私鑄錢、强竊二盜、及常赦所不免者、並不在赦限、又一二人等仁冠位上賜、高年窮乏孝義人等養給久止勅天皇命乎、衆聞食宣、

平城天皇の立太弟詔

續日本紀　三十六光仁天皇　天應元年夏四月壬辰(四日)、立皇弟早良親王爲皇太子、詔曰、天皇勅命乎、親王、諸王、諸臣、百官人等、天下公民衆聞食止宣、隨法爾可有伎政止志弖、早良親王立而皇太子止定賜布、故此之狀悟天、百官人等仕奉禮止詔天皇勅旨乎、衆聞食宣、

嵯峨天皇の立太子詔

續日本紀　三十八桓武天皇　延曆四年十一月丁巳(二十五日)、詔、立安殿(平城天皇)親王爲皇太子、

日本後紀　十四平城天皇　大同元年五月壬午(十九日)、(中略)詔、彈正尹某(嵯峨天皇神野親王)定賜皇太弟、

日本紀略　嵯峨天皇　大同四年四月己丑(十四日)、立高丘(岳)親王爲皇太子、詔曰云々、

日本後紀　二十嵯峨天皇　弘仁(大同五)元年九月庚戌(十三日)、(中略)是日廢皇太子(高岳親王)、立中務卿(大伴親王)諱淳和爲皇

太弟、詔曰、現神止大八洲所知須倭根子天皇詔旨良麻止勅御命乎、親王等、王等、臣等、百官人等、天下公民衆聞食止宣、食國之法止定賜比行賜閇留因法隨爾中務卿諱乎立而皇太弟止定賜布、故此之狀悟旦、百官人等仕奉止宣天皇勅命乎、衆聞賜止宣、

日本紀略　淳和天皇　弘仁十四年四月壬寅(十八日)、出自東宮遷御內裏、先立侍從々四位下恒世王爲皇太子、々々上表固辭、仍立正良(仁明天皇)親王爲皇太子、詔曰、天皇我詔旨云々、

續日本後紀　一　仁明天皇　天長十年二月丁亥(三十日)、立恒貞親王爲皇太子、詔曰、天皇我詔旨良萬止勅御命乎、親王等、王等、諸臣等、百官人等、天下公民衆聞食止宣、朕以拙弱旦、掛畏支倭根子天皇我朝廷乃厚慈乎蒙天、皇太子止成禮利、因畏萬利貴比賜己止晝夜止无之、然乎慮外爾、天日嗣乎授賜布、依天不堪流狀乎再比三比畏利申賜戶止容賜比許賜波須、今思行佐久、厚恩乎蒙人波、必報倍支理利有、故是以正嗣止有戶支恒貞親王乎皇太子止定賜布、故此之狀乎悟天、百官乃人等仕奉止宣布天皇我御命乎、衆聞食止宣、

續日本後紀　十二　仁明天皇　承和九年八月乙丑(四日)、(中略)是日立皇太子、詔曰、天皇詔旨勅命乎、親王、諸王、諸臣、百官人等、天下公民衆聞食止宣、隨法爾可有岐政止志天、道康(文德天皇)親王乎立而皇太子止定賜布、故此之狀悟天、百官人等仕奉禮止詔天皇勅旨乎、衆聞食宣、

文德實錄　二　嘉祥三年十一月戊戌(二十五日)、惟仁(清和天皇)親王爲皇太子、策命曰、天皇我詔旨勅命乎、親王、諸王、諸臣、百官人等、天下乃公民衆聞食止宣、隨法爾可有岐政止志天、惟仁親王乎立而皇太子止定賜布、故此之狀乎悟旦、百官人等仕奉禮止詔天皇勅旨乎、衆聞食宣、

三代實錄　十六　清和天皇　貞觀十一年二月己丑朔、天皇臨軒、立貞明(陽成天皇)親王爲皇太子、公卿已下、五位已上於內庭、諸司六位已下於承明門外、並拜受詔命、策文曰、天皇我詔旨勅命乎、親王、諸王、諸臣、百官人等、天下公民衆聞食宣、隨法爾可有岐政止志天、之貞明親王乎立而皇太子止定賜布、故此之狀悟天、百官人等仕奉禮止詔天皇勅旨乎、衆聞食宣、

三代實錄　五十　光孝天皇　仁和三年八月廿六日丁卯、天皇聖體乖豫、是日立第七皇子諱(宇多天皇定省親王)爲皇太子、策曰、天皇我詔旨勅命乎、親王、諸王、諸臣、百官人等、天下公民衆聞食止宣、隨法爾可有岐政止志天、定省親王乎立而皇太子止定賜布、故此之狀乎悟天、百官人等仕奉禮止詔天皇勅旨乎、衆聞食宣、

御產部類記　伏見宮記錄文書　利三十五　本朝世紀　寬平五年四月□(二)日庚午、爲(讓國天皇敎仁親王)皇太子、(宇多)天皇御南殿、百寮侍列、其儀□(如例、宣命カ)□□□曰、天皇詔□(旨カ)勅命乎、親王、諸王、諸臣、百官人等衆聞食止宣、朕卽位以降、年月漸積、奴、其間一二皇子生長利、然而頃年五穀不登爾志百姓疲弊多留爾依

淳和天皇の立太子詔

仁明天皇の立太子詔

文德天皇の立太子詔

清和天皇の立太子詔

光孝天皇の立太子詔

宇多天皇の立太子詔

醍醐天皇の立太子詔

天、可有煩支事波不行賜志止思賜恤賜(悕イ)度毛、隨法爾可有支政止志天、敦仁親王乎立天皇太子爾定賜布、此位波不得已志天□(鋼カ)置賜止毛、諸事波從儉約志(ヲイ)、坊司品官雜色□□不據舊例志天、隨宜就便弖治賜任賜布事乎(マヽ)信天、百官人等仕奉禮止宣勅旨(ナシイ)乎、衆聞食止宣、

朱雀天皇の立太子詔

符宣抄　別本皇太子　天皇詔旨勅命乎、親王、諸臣等、天下公民衆聞食宣、諸卿等頻上表天白久、太子位波一日毛不可曠、此爲宗廟社稷爾仍久那(天カ)利止固請天、至于再利、至于三利、故是以隨法爾可有支政止之天、不獲止天、雖幼稚以崇象(保明)親王天皇太子仁定賜布、故此之狀悟天、百官人等仕奉禮止詔天皇勅旨乎、衆聞食止宣、

延喜四年二月十日

日本紀略　醍醐天皇　(延喜二十三)延長元年四月廿九日癸酉、詔、以故文獻彦(保明親王)太子息慶賴王爲皇太子、

西宮記　十一　侯爵前田利爲氏所藏　臨時戊　立皇后太子任大臣事　(裏書)延長三年十月廿一日吏部記云、

立寛明親王(朱雀天皇)爲皇太子云々、宣命了、

西宮記　十一　侯爵前田利爲氏所藏　臨時戊　立皇后太子任大臣事　(裏書)同記云、天慶七—四—廿二—、立(吏部王記)

大宰帥成明(村上天皇)親王爲皇太弟云々、大納言師輔奉勅、令大內記直幹草宣命、使令持清書詔、就

村上天皇の立太子詔

宜陽殿、(註略)云々、

御產部類記　伏見宮記錄文書　冷泉院　外記立太子　天曆四年七月廿三日戊子、

今日有奉立皇太子宣命之事、(中略)

現神止大八州(洲)所知須倭根子天皇詔旨良麻止勅命於、親王、諸王、諸臣、百官人等、天下公民衆聞食止宣、頃年水旱失節天、人民疲勞多留依天、有費爭事波不行給之止所念行天、隨法爾可有支政度爲天奈(冷泉天皇)憲平親王於皇太子止定賜不、此位於波不得已天鎭置給止毛、諸事波從儉約天行賜布、故此乃狀於悟天、供奉禮止詔勅旨於、衆聞食止宣、

小右記　寛和二年七月十六日壬午、早朝參攝政(藤原兼家)丞相殿、冷泉院第二親王居貞(三條天皇)年十二、於東三條南宮東對加元服、(中略)未時以此親王立皇太子云々、宣命已後、諸卿率參於宮云々、

一條天皇の立太子詔

日本紀略　一條天皇　寛弘八年六月十三日乙卯、有御讓位事、午刻宣命云、皇太子座定賜へる(部留カ)居貞(三條天皇)親王仁天日嗣遠授賜布、(後一條天皇)敦成親王立天皇太子止定賜布、

三條天皇の立太子詔

日本紀略　後一條天皇　長和五年正月廿九日甲戌、(中略)又立先皇(三條)第一皇子式部卿敦明親王爲皇太子、宣制畢、

後一條天皇の立太子詔

後白河天皇の立太子詔

六條天皇の立太子詔

立坊部類記　後朱雀院、寛仁元年八月九日甲戌立之、九歳、外記日記　寛仁元年八月九日甲戌、（中略）是日於一條院內裏奉立皇太弟、（中略）其宣命者、

現神と大八洲國所知須倭根子天皇大命良末と勅大命乎、親王、諸王、諸臣、百官人等、天下公民衆聞食と宣、比年國家も凋弊たれは、公費在倍岐政波行給波志と所念行度も、皇太子定置介留敦明親王波、霧露相侵志天監撫仁不堪留由頻辭遁申とも再三納賜者佐るニ、謙損之心益深くて休退之思彌苦奈波、禮（後朱雀天皇）敦良親王者朕加同胞乃親多留、內仁、天性恭恪爾天風姿岐嶷奈加、儲貳之位爾材幹寔至禮を、留舊例も在爾依天奈皇太弟と改定給乎、故此狀乎悟天、仕奉禮と勅天皇御命を、衆聞（食）命と宣、

寛仁元年八月九日

兵範記　久壽二年九月廿三日丁卯、立太子事、

今上一宮守仁親王（二條天皇）、件御名字、式部大輔（中略）辰剋關白殿（藤原忠通）下令參內給、（註略）內大臣（藤原實能）以下公卿參著仗座、次立太子召仰事宣下內府、次被奏宣命、

兵範記　仁安元年十月十日庚辰、有立太子事、（中略）

宣命

高倉天皇の立太子詔

後嵯峨天皇の立太子詔

伏見天皇の立太子詔

現神度大八洲所知須倭根子天皇我詔旨良麻勅命乎、親王、諸王、諸臣、百官人等、天下公民衆聞食度宣、隨法爾可有支政度爲天、（高倉天皇）憲仁親王乎皇太子度定賜布、故此之狀悟天、仕奉禮度詔天皇勅旨乎、衆聞食度宣、

仁安元年十月十日

玉葉　治承二年十二月十五日甲辰、此日有册命立太子事、（中略）

宣命

大內記藤敦周

現神止大八洲所知須倭根子天皇我詔旨良止萬勅命乎、親王、諸王、諸臣、百官人等、天下公民衆聞食止宣、隨法爾可有支政止爲氏、（安德天皇）言仁親王乎皇太子止定賜布、故此之狀乎悟氏、仕奉禮止詔天皇勅旨乎、衆聞食止宣、

大內記業實

故一品記　寛元々、十八癸未、（後深草天皇久仁親王）皇太子册命之日也、（後嵯峨）皇上第一皇子、內辨右大臣實經公、宣命使等練歩事等有之、（中略）

管見記　正應二年四月廿五日甲戌、今日立太子也、當今皇子胤仁親王、（伏見）（後伏見天皇）今年二歳、（中略）次內辨召內記仰宣命草、（中略）次少內記某入宣命於筥持參、內辨披見了給內記、々々持筥立小庭、內辨自立蔀東進弓場、右番長武枝、經小庭內記持宣命相從、奏聞了、關白被候御所、仍奏聞使內覽歟、內辨歸

後二條天皇の立太子詔

著陣、內記置筥、內辨卽押出之、可淸書之由被仰歟、內記退出持參淸書、內辨披見之（令歟）持內記進弓場、奏聞之儀如前、內辨歸著陣、

萬一記　正安三年八月廿四日、參內、依立太子節會、（中略）子剋左大臣（九條師敎）已下著仗座、（中略）次定房朝臣著軾、仰云、以富仁親王（花園天皇）可爲皇太子、令作宣命ヨ、次召大內記淸範仰宣命趣、次內記持參宣命草、次內辨於陣以頭左中辨奏聞之、（二條兼基）關白被候御所、頭辨使以內覽歟可尋、次返下之、次同人奏淸書、先例多就弓場奏、在上卿所存、次令定宣命使、

花園天皇の立太子詔

立親王立太子記　伏見宮記錄文書　利四十三

（德治三年九月十九日）立太子（後醍醐天皇尊治親王）

內裏儀

諸卿還著仗座、有立太子召仰事、（中略）群臣參列南庭、（中略）宣命使就版、宣制兩段、群臣共再拜、

靈元天皇の立太子詔

基熙公記　天和三年二月九日壬午、今日立坊也、（中略）次奉行職事篤親朝臣來軾、經柱內不經小庭、是彼一流家說也、仰云、以朝仁親王（東山天皇）皇太子タルヘシ、宣命令作ヨ、余微唯、職事退入、次以官人召大內記、ミミミ長詮朝臣來軾、余仰云、朝仁ノ親王ヲ以テ皇太子トスヘシ、宣命ツクラシメヨ、長詮朝臣退、次少內記職永入宣命草（宿紙）於莒持參、余披見、（依草不加御名字、）乍莒見之、目外記令退、次以官人招職事奏聞、返給之時仰云、淸書セシメヨ、次召內記下草、淸書事如職事、內記退更持參淸書、猶乍莒中披見之、（未奏文書每々如此、）如元卷了、令持莒於內記、進弓場代奏聞、返給、還著陣、內記置莒欲退之時、仰云、陣ノ腋ニ候ヘ、內記立小庭、次向宣命使仰云、權中納言藤原朝臣宣命使ニ、淳房卿微唯、次向內府示、外辨直起座、內記相從、於陣後著靴、（此間內府以下外辨幄ニ向、）次向宜陽殿壇上、（如例節會不立兀子、是例也、）（中略）次公卿參列（東上北面、）著標、（內府練步著標、權大納言以下不練、）次召宣命使、（其儀取出懷中檜扇、笏ヲナラス、）宣命使離列、堂上立余後、（左方、）余取宣命給之、（以左手從座下微々給之、）宣命使昇一足於長押上、（左足、）及手取之、立定一揖下殿、欲下階程、余下殿、（階下揖、）向宣命使一揖、出軒廊東二間斜向巽除步、（徐カ）不到標事二丈許練步著標、（須經內府後大納言列前、而爲早速如此、）北面一揖、欲引直裾之處、召使率爾出來直裾了、次宣命使著版、（曲折揖如例、）宣制一段再拜、又一段再拜、了宣命使復列、

東山天皇の立太子詔

中御門院御昇壇記　立太子宣命

現神（度）大八洲國所知（須）倭根子天皇（我）詔旨（良萬止）勅命（乎）、親王、諸王、諸臣、百官人等、天下萬民衆聞食（度）宣、隨法（爾）可有（岐）政（度）爲（天）、（中御門天皇）慶仁親王（乎）皇太子（止）定賜布、故是狀（乎）悟（天）、仕奉

中御門天皇の立太子詔

禮止宣天皇我勅命遠、衆聞食止宣、

寶永五年二月十六日

立坊拜覲記　享保十三年六月十一日、今日昭仁親王（櫻町天皇）御九歳、立太子節會也、（中略）次職事頭中將奉行人也、就軾、仰云、以昭仁親王立皇太子可令作宣命之由、次內辨召大內記仰宣命之哀、次少內記中原昌範持參宣命草、入筥、內辨披見之、內記退去、次內辨以官人召內記仰清書事、內記退覽奏聞、先是殿下令候鬼間、職亟歸來仰可令清書之由退去、次內記持參清書、內記候小庭、次內辨披見畢進弓場代、內記持筥相從、內覽奏聞畢返給、次內辨還著仗座、給宣命於內記、仰可候陣腋之由、次告宣命使之由於其人、次內辨起座、於宣仁門外著靴進宜陽殿壇上、（中略）此間諸卿雁列、次內辨宣召刀禰、少納言召之、次外辨參列標下、（公卿一人入門、無程練歩欲入承明門、次內辨召宣命使、以笏扇鳴、授宣命了下殿、於軒廊向宣命使、古來例也、今度無之、）（中略）向東揖、古來例也、今度無之、）（中略）揖、出軒廊南ニ進、於橘樹西邊練初就標、次宣制二度、內辨以下再拜二度、宣命使還就標、

八槐記　延享四年三月十六日丙午、（中略）此日還仁親王（桃園天皇）册命皇太子日也、（中略）

宣命、大內記家長朝臣作進、

天皇我詔旨良萬止親王、諸王、諸臣、百官人等、天下公民衆聞食止宣、國政乃所可有止天、志

後櫻町天皇の立太子詔

光格天皇の立太子詔

還仁親王乎皇太子登定賜布、此狀乎悟氏、隨法爾仕奉止宣勅命乎、衆聞食止宣、

延享四年三月十六日

八槐記　明和五年二月十九日戊寅、參內、英仁親王（後桃園天皇）春秋十一歳、立皇太子之日也、左大臣尙實奉勅被行之、（兼日作進次第、陰陽頭泰邦卿勘申、百妻吉日天勅也、吉時也、未剋許宣制了、（中略）

天皇我詔旨良萬止親王、諸臣、百官人等天下公民衆聞食止宣、國政乃所可有止志、先皇儲給布隨爾、英仁親王遠以氏皇太子爾定賜布、此狀乎悟氏、隨法爾仕奉止宣勅命乎、衆聞食止宣、

明和五年二月十九日

大江俊矩記　文化六年三月二十四日甲申、

一、立太子節會也、（仁孝天皇恵仁親王）（中略）

一、先出御朝餉御座、御服以前、宣命艸有御覽、先是資愛朝臣歸來、於鬼間殿下內覽相濟也、次召御衣紋之人著御々服、黃櫨染御束帶、此間大臣來立弓場奏宣命淸書、奉行迎取、先於鬼間殿下內覽、次御服畢、進朝餉簾下奏聞、畢還出弓場返給大臣、々々歸陣、告宣命使於其人、

（中略）

一、內辨召宣命使、作法先懷中、宣命使取出扇叩笏、一聲、畢懷中扇、出宣命取副笏如元、

一、宣命使參上、右衞門實綱卿、督立南簀子東第二間中程西面、揖、挿笏進寄磬折給宣命、內辨自右袖下給之、退立初所、拔笏取副宣命揖、左廻下立軒廊、立何間乎不見及、且階、下昇降揖有無亦不知之、

一、內辨下殿練足就版、於軒廊對宣命使有揖歟、不見及、

一、宣命使練足就版、每曲折有揖、

一、宣命使復本列後、諸卿各出自承明門退出、

仁孝天皇の立太子詔

明治天皇の立太子詔

隆光卿記　天保十一年三月十四日乙巳、今日統仁（孝明天皇）親王可有册命立太子、（中略）宣命續左、

天皇我詔旨良止萬親王、諸王、諸臣、百官人等、天下公民衆聞食止宣、隨法爾可有岐政止爲氏、正嗣止有戸岐隨爾、統仁親王乎皇太子止定賜布、此狀乎悟氏、仕奉禮止宣勅命乎、衆聞食止宣、

天保十一年三月十四日

官報　號外　明治二十二年十一月三日

朕祖宗ノ遺範ニ循ヒ嘉仁（大正天皇）親王ヲ立テ、皇太子ト爲ス玆ニ之ヲ公布シテ周ク知悉セシム

明治二十二年十一月三日

皇太子册立の儀禮

七　儀式　五　立皇太子儀

前一日、太政官召式部省、仰可令會集刀禰之狀、當日早旦、式部丞錄率史生省掌等、於建禮門前庭、左右相分列立刀禰、爰中務丞執版參入、置紫宸殿前庭退出、訖所司開閤門、親王以下應召、左右相分參、五位以上在承明門內庭、六位以下在同門外、錄稱容止如常、立定宣命大夫進就版、宣制曰、天皇詔旨勅命乎、親王、諸臣、百官人等、天下公民衆聞食止宣、隨法爾可有伎政止氏、志其親王立而皇太子止定賜布、故此之狀悟天、百官人等仕奉禮止詔天皇勅命乎、衆聞食止宣、訖宣命大夫復本位、皇太子進拜舞而退、次親王以下退出、

宮內大臣子爵　土方久元奉

新儀式　五　臨時下　册命皇太子事

册命皇太子、或依公卿論奏、或有勅答、承和、仁壽（和カ）、延喜例也、或不待上表、隨法册命也、前一日、大臣奉勅行事、並當日早旦、所司裝束南殿、近仗陣階下開門、親王已下五位以上、依喚參入、列立之儀等、皆同册命皇后之儀、但親王已下列立之後、應被立者、入自日華門立親王前、若幼稚不關此儀、雖長大不必參入矣、大臣喚宣命大夫、中納言、大夫從本列東度、昇自東階、就大臣几子後、授宣命文、受之暫

東宮奉仕の職員補任

立太子の由を山陵に告げたまふ

皇太子拜覲

立軒廊之邊、大臣起座、下自東階就本位、承詔者進就版、宣制曰、現神止大八洲所知須倭根子天皇我詔旨良萬止勅命乎、親王、諸王、諸臣、百官人等、天下公民衆聞食止宣、群官稱唯再拜、訖更宣云、隨法仁可有岐政止爲氏、某乎立氏皇太子止定賜布、故此狀乎悟旦、仕奉禮止詔布天皇勅命乎、衆聞食止宣、王公共稱唯再拜、被立者不稱、宣制者復本所、次皇太子兩段再拜舞蹈退出、出自日華門、五位已上退出、宸儀還御本殿、大臣依召參上御前、有除目事、被拜除傅、學士、春宮坊官屬以上、被官諸司等、事畢退下、又參射殿奏清書、皇太子若出、傅若大夫奉勅定補藏人、昇殿者陣頭、大夫傅者等下令旨、厥後又試其武藝補帶刀、或天皇御射殿覽其射藝、貞觀十一年例也、後日遣使二陵、告以册命皇太子之狀、

皇太子初謁見事

皇太子初謁見、一同元正朝覲之儀、但不設酒肴、只賜祿物、或賜酒肴、天長元年、於仁壽殿東簾下聊儲酒肴、公卿一兩預焉、坊官給祿各有差、

柱史抄　下臨時皇太子部

立太子由被申山陵事

上卿參仗座召內記、大內記可參也、內記著軾、仰云、立太子事被申山陵宣命可草進者、即成草持參內覽、內記持參之、但可隨上卿命、或以職事被覽也、內覽奉上卿、々々令持內記蟲損奏覽、々々畢還著仗座、令清書、以六位內記等令書之、清書畢持參覽上卿、奏下之後、分賜使參議等了、

立太子節會

皇太子册立儀禮の例

立太子事

天皇讓位之時被載加宣命、是恒例也、臨時立太子之時有節會、其儀同立后節會、刻限內辨參陣、先是式部省入自日華門、立親王以下標、中務省入自同門、執版置南殿前庭、大臣召官人令敷軾、職事奉勅仰可有立太子之由、大臣召外記問緣事諸司參否、次召內記、仰以某親王可爲皇太子之宣命可草進、可用何年例者、內記微音稱唯退出、持參宣命、入筥、大臣奏覽之後仰清書事、內記即清書持參、奏下如先、大臣暫預宣命於內記、群卿起座著外辨座、內辨於宣仁門外著靴、歷幔門入軒廊二間召宣命、如元入筥、或說、今度不挿書杖云々、天慶七年立太子時、直幹奉宣命於內辨、九條相府令持宣命、直幹捧筥、具見李部王記矣、內辨取副宣命於笏、立軒廊西一間、時剋天皇御南殿、內侍臨檻、內辨即著堂上兀子、此間上官內記著階下座、〔藤原孝範編天福元年卒〕

御產部類記　伏見宮記錄文書　利三十五

本朝世紀　寬平五年四月□(二)日庚午、爲皇太子、天(字多)皇御南殿、百寮侍列、其儀□□(如例宣命カ)、□□文曰、天皇詔□(旨カ)勅命乎、親王、諸王、諸臣、百官人等衆聞食止宣、朕即位以降、年月漸積奴、其間一二皇子生長利、然而頃年五穀不登爾志天、百姓疲弊多留爾依天、可有煩支事波不行賜志止思賜憚賜度毛、隨法爾可有支政止志天、敦仁親王乎立天皇太子爾定賜布、此位波不得已志天□(鎭カ)置賜止毛、諸事波從儉約志(互イ)、坊司品官雜色□□不

據舊例志天、隨宜就便弖治賜任賜布事乎、(マヽ)信天、百官人等仕奉禮止宣勅旨乎、衆聞食止宣、便任坊司等、大納言正三位兼行左近衛大將民部卿陸奥出羽按察使源朝臣能有爲皇太子傅、中納言兼右近衛大將從三位藤原朝臣時平爲春宮大夫、參議從四位下守左大辨兼行式部權大輔勘解由長官菅原朝臣(道眞)爲亮、正五位下守右近衛權中將藤原朝臣敏行爲大進、從五位下守右衛門佐藤原朝臣定國爲少進、右大史從六位下壬生忌寸望材爲大屬、並本官如故、册立了、皇太子拜覲天皇、賜御裝束一具、幷櫻色合褂一雙、又參覲中宮(班子女王)、賜白綾褂一襲、蒲桃染褂御衣一重、

十日戊寅、奉遣使者於山陵、令告立皇太子之由、其册文曰云々、

西宮記　十一　臨時戊　立皇后太子任大臣事　侯爵前田利爲氏所藏　寬平(裏書)五年四月十四日、新太子(敦仁親王)參覲、天皇御大床子、御倚子、太子拜舞、天皇下座(坐)蕈上、太子又坐蕈上、內侍授祿、太子拜舞、謁尙侍(淑子)、次參中宮(班子女王)、有御祿、女裝束、

西宮記　二　正月　除目　大臣召　延喜四年(醍醐天皇御記)二月十日、召左大臣(藤原時平)、仰立太子(保明親王)宣命旨、午二刻御紫宸殿、諸司懸御簾如例、卽大床子、掌侍守子出召大臣、左大臣立近廊候、召之、內裏式无召、內辨因陣日記行之、可言不式例、左大臣昇、卽忽(兀)子座、近衛開門、次中務置宣命位、次諸大夫參入、內辨不召大夫等、列定、大臣召中納言有穗朝臣、乃稱唯、自列昇受宣命文、下立東近廊、則大臣下卽列立、宣命者進、卽版而宣制曰、詞在宣命文、宣了群臣再拜、其間宣命者、宜復本座列、而此度設還左仗後、退出、近衛開門々、退還寢(浸カ)召左近少將忠相、右近少將好蔭、仰率官人近衛、可侍東宮狀、左大臣仰之、皇太子坐左大臣東一條第、因到彼宅、召左大臣、定坊官等、又召右(光)大臣預之、以右大臣兼東宮傅、右大將藤原朝臣(定國)兼春宮大夫、菅根兼亮、枝良兼大進、以大宰監藤原良忠、刑部丞藤原忠門爲少進、右大臣取除書奏之、次語曰、襁褓未宜受傅道之力、而自今有之、最所悅也、大臣正笏揖而退、(中略)

十七日、遣使柏原(桓武天皇)、後田村(光孝天皇)兩陵、告立皇太子由、

西宮記　正月上　童親王拜覲事　延喜九年二月廿一日、皇太子(保明親王)始朝覲、乘輦入自玄暉門、至淸涼殿北簷下輦、候息(穩子)所直曹、藏人供奉御裝束、尋常帳立倚子、鋪毯代、不立置物机、卽太子進當御座拜舞、寬平入自南方、於又廂舞踏、此度以太子幼齒、殊用正廂拜、此間左大臣(藤原時平)候簾下奉引、禮了還、

立坊部類記　後朱雀院寬仁元年八月九日甲戌立之、九歲、　外記日記　寬仁元年八月九日甲戌、是日於一條院內裏奉立皇太弟(後朱雀天皇敦良親王)、春宮日者被辭遁云々、

早旦諸司裝束於南殿、垂御簾、□中如常、中務省入自西中門、預置宣命版位、去尋常版位北一許丈、式部省入自同門、立親王以下位標於左右庭中、

申二點左右近衞陣列、天皇不御南殿、于時內侍臨西檻召人、內辨右大臣起右仗座著靴、昇自西階著殿上兀子座、次左右近衞將曹各一人、率近衞各五人趍到承明門代東西、將曹猶立壇下、近衞進開門退還、次圍(閑)司二人降自殿東階、經左近陣前著承明門代東西披草墪座、次內辨大臣召舍人二聲、大舍人四人立承明門代外屛幔內、同音稱唯退出、少納言藤原朝臣良經入自同門西扉、進立尋常版位下、(殆欲行過版位之間、於殿上有〈マ〉之音、仍返立版位、是大失禮也、)上宣、召刀禰、少納言稱唯退出、(須右返也、而左返、失禮重疊也、)召之、大納言藤原實資卿、權大納言同齊信卿、權中納言同行成卿、同教通卿、同賴宗卿、參議同兼隆卿、源道方卿、藤原公信卿、同朝經朝臣參入、諸大夫入自同門東西扉、參入列立標下、立定之後、內辨大臣召宣命使、權中納言藤原行成卿稱唯、經右仗南頭昇自西階、進立內辨大臣後、賜宣命退降、暫立軒廊東第二間砌上、是間內辨大臣降殿、進立庭中標下、立定後、宣命使進立宣命版位下、宣制一段再拜、又宣制一段再拜、(或說、有舞踏然而存式文也、)其宣命者、

現神(止)大八洲國所知(須)倭根子天皇大命(良末と)勅大命(乎)、親王、諸王、諸臣、百官人等、天下公民衆聞食(止)宣、比年國家(も)凋弊(たれは)公費在(倍岐)政(波)行給(波志と)所念行(度も)、皇太子定置(介留)敦明親王(波)、霧露相侵(志天)監撫仁不堪(留)由頻辭遁申(とも)、再三納賜(者佐るこ)謙損之心益深(くて)、休退之思彌苦(奈禮波)、敦良親王(者)朕(加)同胞(乃)親(多留加)內仁、天性恭恪(爾天)風姿岐嶷(奈留加)、儲貳之位(爾)材幹最至(禮留を)、舊例(も)在(爾)依(天奈毛)皇太弟(と)改定給(乎)、故此狀(乎)悟(天)、仕奉(禮と)勅天皇御命(を)、衆聞食(と)宣、

寬仁元年八月九日

事訖、宣命使□公卿自東退還、如本列立定之後、公卿以下一々□代如入儀、訖公卿以下著陣座、□臣□直廬(別納)、被行坊官除目、後還著陣座、令參議淸書召名、給於式部丞、次經奏聞、召右少將源顯基、右近少將藤原兼房等、依例仰可奉仕啓陣之由、相率召仰、率將監以下府掌以上各一人、近衞各十人參向東宮、次公卿相共參向東宮令啓悅由、蒙仰後拜舞如常、先是東北對儲饗座、仍公卿以下著座、々闌已後各有被物、及亥時各退出、又今日被定東宮藏人殿上人云々、

外辨

是日有奉立皇太弟之事、仍於一條院承明門代前行外辨事、其儀式、早朝掃部寮立兀子幷床子、出承明門代西片扉、東上南面、爲公卿以下座、次南方庭中立床子四脚、(一脚少納言辨、一脚外記史、一脚史生二人座、一脚官掌召使座、但外記前立床子一脚、置日記筥料、、、、)申二剋權少外記高橋國儀、右少史津守致任、率史生

二人官掌召使等、就床子座行事、東面北上、次少納言藤原朝臣良經、右少辨藤原朝臣資業、同參著床子座、東面北上、次左右兵衞府承明門代外東面立胡床各□、兵衞等服中儀、但不立平張、又主殿寮承明長樂永安門代前立屛幔、但長樂永安門不開、于時式部兵部彈正承錄忠疏等、各率史生省掌等列立承明門前屛幔外西、敎正容儀、少選大納言藤原實資卿、權大納言同齊信卿、權中納言同行成卿、同敎通卿、同賴宗卿、參議同兼隆卿、源道方卿、藤原公信卿、同朝經朝臣着兀子幷床子座、次諸大夫等列立、次大舍人四人列立承明門代前屛幔外、于時內辨大臣喚舍人二聲、卽大舍人四人趁出承明門前壇、同音稱唯、趁復本所、次少納言藤原朝臣良經入承明門西扉就版位、承內辨上卿宣稱唯、須臾退出、出同門壇下召之、公卿一々參入、次諸大夫相分左右、自東西扉一々參入訖、

春宮

傅正二位藤原朝臣公季　兼　學士正四位下藤原朝臣廣業　兼

學士從五位下藤原朝臣義忠　兼

春宮坊

大夫正二位藤原朝臣敎通　兼　權大夫從三位藤原朝臣公信

亮正四位下藤原朝臣惟憲　兼　權亮正四位下藤原朝臣公成

大進從五位上藤原朝臣惟任　權大進從五位上藤原朝臣章信

少進從五位下源朝臣懷信　權少進正六位上藤原朝臣資國

大屬正六位下小槻宿禰貞行　兼　少屬□□林宿禰重通　少屬□□宇治宿禰忠信　兼

主膳監

正々六位上藤原朝臣孝茂　兼

主殿署

首正六位上三善朝臣基時

主馬署

首正六位上藤原朝臣庶孝　兼

廿一日丙戌、此日皇太弟初參御所、朝謁天皇、其儀、申二剋皇太弟出東北面對西行、乘御在所殿南庇參給、前攝政(藤原賴通)幷傅右大臣(藤原公季)、坊官大夫權中納言藤原敎通卿、同賴宗卿等立前後、他坊官等於殿下伺候、皇帝御倚子御座、此御座立於殿中南第四間、南面、皇太弟進而拜舞、於後廂間拜舞、訖退出、于

時天皇下倚子御座御平敷御座、更令內侍召還皇太弟、還參著座、南第三廂間置褥一枚、西面、頃之、掌侍□子取御祿、御衣一襲、青色表御衣、蘇芳張下襲、綾表御袴、合御袴、阿古女等幷白綾細長一襲也、攝政取御祿授於大夫卿、其中以袙單御衣奉保御頸、又步進南廂、再拜舞踏、退出儀式行列如初、便參皇太后宮、(藤原彰子)是御在所殿東妻也、又再拜舞踏、依母后御氣色入御簾中、有御祿、女裝束一襲、以單御衣奉保御頸、再拜舞踏又如初、此間作法神妙、上下云者感涙難禁、推而可察、次大夫以下進以上、給祿各有差、大夫白大褂一襲、學士、亮、大進等各紅衾一條、六位進黃襖子一領、於瀧口邊藏人範永賜之、北上西面、再拜舞踏、皇太弟御本殿、公卿以下有饗饌也、

十月廿六日辛卯、□後權大納言源俊賢卿、參議同道方卿、藤原通任卿、同朝經朝臣著左仗座、依東宮初被立山陵使、柏原、深草道方卿、邑上、後邑上通任卿、圓城寺朝經朝臣、幷頭官等參入、于時上卿召少內記楊爲賢、令進宣命草、卽令藏人修理助藤原範永令奏如常、(中略)宣命、天皇我詔旨と掛畏支某山陵爾申賜へと申久、頃年水旱不節天、人民疲勞之留爾依天、有費牟夏波不行給之と所念行とも、隨法爾可有岐政と爲天々(奈毛カ)乎、皇太子敦明親王乃辭遁乃替に敦良親王ヲ皇太弟と定賜不、故是以、此狀を官位姓名を差使天、恐みも申賜ハクと申、

寬仁元年十月廿六日

爲房卿記

康和五年八月十七日甲子、今日有策命立太子事、(堀河)(鳥羽天皇宗仁親王)今上第一皇子、母贈女御從二位藤原茨子、(苡)故大納言實季卿、(女脫カ)母前大貳經平卿女、去正月十五日降誕、同廿五日女御逝去、其當日皇子遷御太上(白河)法皇高松亭、六月九日爲親王、一歲立太子、淸和、冷泉兩帝之例也、

鷄鳴先著衣冠、參入仙院、(中略)院宣云、所申可然、早參高陽院、顯季朝臣相共卯剋可立御帳、卽可勤仕御裝束者、(註略)御裝束儀、以西對爲東宮御所、(註略)三間母屋立御帳、(註略)當御帳間庇、供晝御座、(註略)夜御殿內逼東戶又立御帳、(註略)其北庇爲朝餉、晝御座歟、北庇幷北渡殿爲臺盤所、立大盤幷棚厨子、朱辛櫃、如懸塞鬼間戶、同北庇御簾垂之、撤却石灰壇西壁置鳥居障子、爲供膳之道、西庇爲殿上侍、(註略)以北東渡殿、以北西渡殿爲御膳宿、立棚厨子、朱辛櫃等、以其西子午廊爲上下御厨子所、以其南卯酉廊爲藏人所、以乾角廊爲藏人町、所々鋪設、雜器等大略支配了、(中略)兩方御車寄東對南庇東戶、宮經寢殿北庇渡御御所、以寢殿西北渡殿爲御所、(註略)遷御之間、陰雲又霽、陽烏更明、天之與善、盡以詔之、允、(註略)藏人左少將顯國持參御膳具、銀飯垸一口、御湯器一口、四種四口、馬頭盤一枚、御箸二双、匕二枚、前々一枚、右可尋之、本盤六枚、窪器二口、汁器二口、朱漆御外座三枚、匕納朱漆辛櫃、御臺二脚、立臺、御帳今朝渡奉、於殿上之西上戶下、令申事由、顯季朝臣令奏此由於院御方、次召上殿上座給祿、白褂一重、顯季朝臣取之、顯國退下、再拜退出、範國幷匡房卿等此御使之時給祿、不拜歟、所々饗辨備、其國々見定文、殿上居饌、藏人所廳饗幷女房衝重一々勤之、居藏人所饗十前、殘十前、小舍人給之、啓陣官人以上饗、左近左兵衞居中門南廊、右近

右兵衛居同西廊、掃部敷座、主殿引幔、未剋左大臣被參仗座、以頭辨重資朝臣、今日册命皇太子事被宣下、可召仰諸司之由、(後御カ)□、年々例、前一日下知、寛仁元年前二日被宣下、延久元年當日宣下、其例也、裝束使辨兼奉仕南殿御裝束、候院之間、禁中儀以傳說記之、策命之間次第、以藏人重隆、自內有召、勘年々例、以檀紙三枚所書(マヽ)致也、左大臣奏宣命草清書等、兩度被奏草不注御名、式部立標、中務置宣命版位、申剋出御南殿、御束帶、內侍二人捧璽劍、余女房不供奉、右大辨、頭辨重資、藏人爲隆等候御共、簾中供大床子御座、劍璽置此上、近衛陣立、不立胡床、次將縫腋、卷纓、蒔繪劍、壺胡籙、著靴、諸卿就外辨、民部卿俊明、權大納言家忠、新大納言經實、左衛門督雅俊、源中納言國信、右兵衛督師賴、源宰相能俊、左大辨基綱、源宰相中將顯雅、新宰相中將家政、螺鈿劍、隱文帶、不付魚袋、著靴、辨、少納言同著巡方、上官同帶巡方、內侍臨東檻、內辨左大臣取宣命著堂上兀子、近衛開承明門、不開建禮門幷左右脇門、延喜儀式、年々日記不同、事見延長三年御記、次闈司著草墪、次內辨召舍人、少納言懷季代參立尋常版、次內辨宣、刀禰召せ、懷季稱唯退出召之、次諸卿列立標下、次內辨召宣命使、其詞云、中ノ物申ノ職ノ源朝臣、源中納言參上給宣命、至立軒廊第一間、次內辨下加列、次宣命使著版、宣制兩段、每段群臣再拜、次宣命使歸本列、次公卿退出還著陣座、出御以後天霽、仍用晴儀、今日殿上人々丸柄帶也、宸儀還御本殿、此間藏人奉仕御殿裝束、其儀如官奏、左大臣奉勅召四府將佐、可參啓陣之由、各令下宣下云々、次召左大臣、被行坊官除目、右大臣兼被候執柄座、御座左右供燈燭、又執筆座立切燈臺、左大臣召藏人、爲隆參上、依仰持參紙筆、卽被行坊官除目、

除目

東宮

傅正二位藤原朝臣忠、(實)兼、正右大臣、

學士正五位下藤原朝臣俊信、兼、正右少辨、右衛門權佐、文章博士、周防介、

春宮坊

大夫正二位藤原朝臣公實兼、正大納言、

權大夫正二位源朝臣雅俊兼、正中納言、左衛門督、

亮正四位上藤原朝臣顯季兼、正修理大夫、美作守、

權亮從四位上藤原朝臣實隆兼、正左少將、

大進正五位下藤原朝臣顯隆兼、正防鴨河使、左少辨、左衛門權佐、播磨介、

權大進從五位□(上)高階朝臣仲季(章)兼、正但馬守、右衛門佐、

少進正六位上藤原朝臣行盛兼、正縫殿助、院判官代、

大屬正六位上紀朝臣盛言兼、正左大夫、

少屬正六位上佐伯朝臣義保兼、主計屬、官功、廳執行、

正六位上中原朝臣定親（故女御侍所司、）

主膳監

正正六位上中原朝臣基時（大夫申、）

主殿署

首正六位上山宿禰永經（亮顯季申、）

主馬署

首正六位上藤原朝臣實盛（兼、左衞門少尉、使、）

除目畢、左府被渡納言、々々以參議令淸書、奏下如例、次召頭辨重資朝臣於御前、被定殿上人竝藏人、件文被奏院者、先是坊官、右大臣、兩大夫幷學士等參弓場、奏慶賀、亮以下候本宮不立此列、後日申慶賀云々、秉燭之間、上皇有喚、仍參候、仰云、册命已了者、儲君何伺（時カ）可渡御御殿哉、奏云、如延久例者、公卿拜間、可御晝御座歟、但册命事（畢カ）者、只以吉事可遷御歟、上皇覽御曆、戌亥吉時者、受修理職下部、舁立炬火屋於前庭中央、內匠寮立時簡、（兼以散位章綱書銘、如內裏、）幷御膳棚於殿上前頭、此間傅右大臣以下坊官參列西中門外、以亮顯季朝臣被啓案內、參御所啓之、歸仰聞食之由、加列各以再拜、（傅、大夫一列、亮、學士、進等一列、）右府被候殿上、次左大臣率諸卿參入、參內人々皆參、列立中門外、（大夫以下爲申慶賀參院御方、兩亮遲歸之間、公卿佇立有程、）此間儲皇渡御々殿御座、（兼垂御簾、三位取御劍幷乳母奉抱、）公卿拜列遲々、仍入御夜御殿云々、頃亮顯季朝臣相逢公卿、啓事由之後還出、仰聞食之由、次左大臣以下諸卿、（右大臣不列給、延久元年故大臣不被列之例歟、長曆關白以下列此拜、）入自中門北廊西北戶、列立南庭、（東上北面、）再拜還歸、次參上公卿被聽昇殿之由、以亮被下令旨、左府以下於中門外再拜之後、次第昇殿、（大夫、權大夫不可立此拜之由、余所執懷也、坊官無昇殿之令旨故也、殿上人可立此列、然而自內未被仰下之間、已以遲々、）次被仰下殿上人、（十五人、）藏人、（三人、）以頭辨自內被仰歟、十四人、今一人被加之由、自院奏之、經忠朝臣追被相加云々、

十月廿二日戊辰、今日權大納言家忠卿參左仗、定申山陵使、被告申立太子由也、

廿五日辛未、立太子由被告申山陵、（上卿權大納言、）

百錬抄

（十五後嵯峨天皇）　寬元元年八月十日、今上第一皇子（後深草天皇）久仁有立太子事、申刻被始行節會、々々畢、於御前被行坊官除目、坊官等於弓場申慶、又參本宮申慶、公卿相引參本宮、事畢自內裏被獻御劍、壺切紛失之間、被渡他御劍、勅使頭中將師繼朝臣賜祿、再拜退出、

勘仲記

正應二年四月廿五日甲戌、今日今上（伏見）若宮（後伏見天皇胤仁親王）二歲、御母儀故五辻宰相經氏卿息女、中納言典侍、立太子册命日也、職事頭皇后宮亮爲俊朝臣奉行、本所俊光奉行、殿下未刻御出、先御院參、宮司除目任人御沙汰料也、內府可令任傅給云々、依節會御參內、公卿、內辨內大臣殿、外辨右大將實

兼、花山院大納言家教、中宮權大夫通重、坊門中納言忠世、宣命使別當爲方、左大辨宰相俊定、新宰相爲兼朝臣、辨仲兼朝臣、少納言兼有朝臣、天皇出御南殿、簾中、左右近引陣如例、節會了、主上出御晝御座、御引直衣、關白殿令著簀子圓座給、內大臣殿同令參著圓座給、被行坊官除目、五位藏人持參硯續紙、大臣書了被奏除目、其後大臣取副除目於笏退、於小板敷召外記給除目、大臣令著仗座給、左大辨著陣被行淸書事、每事如例、本所儀、於常盤井殿被行之、節會了人々參入、解陣上卿花山院大納言(家教)奉行、

東宮傅藤原兼忠兼　學士藤原信經兼

東宮大夫藤原家教兼　權大夫同冬平(基忠)鷹司前殿御息、字治殿御例云々、

亮同隆政兼　權亮同實爲兼

大進同俊光兼　權大進平忠顯兼

冷泉相公息少進藤賴定兼　權少進同惟藤

大屬中原俊員兼　少屬安倍資久兼

權少屬同資增

主膳正中原職賴兼

主殿首同忠淸兼

主馬首同爲景兼

萬一記　正安三年八月廿四日、參內、依立太子節會也、(宣房)予用丸鞆、依片節會也、上官者用巡方、早旦諸司奉仕南殿御裝束、秉燭以後令參集、子剋左大臣(九條師教)已下著仗座、以藏人頭左中辨定房朝臣、今日冊太子事被宣下、可召仰諸司之由、年々例、前一日下知寬仁元年前二日被宣下、延久元年當日宣下、近代當日宣下也、於此節會者、不被仰內辨例也、次左大臣召外記幷頭辨定房朝臣仰之、次定房朝臣著軾、仰云、以富仁親王(花園天皇)可爲皇太子、令作宣命ヲ、次召大內記淸範仰宣命趣、次內記持參宣命草、次內辨於陣以頭左中辨奏聞之、關白被候御所、頭辨使以內覽歟可尋、次返下之、次同人奏淸書、先例多就弓場奏、在上卿所存、次令定宣命使、次宸儀黃櫨染、出御南殿、兼設筵道、淸涼殿額間左右供掌灯、關白殿令候御裾給、頭辨供御草鞋、藏人正經傳之、內侍二人候劍璽、右中將實任朝臣、藏人兵部大輔經世等扶持之、予候脂燭、次內侍置劍璽於大床子東頭、內侍候御帳東邊、天皇御座定、簾中、御大床子御座、此間近衞陣立、不立胡床、次將卷纓、縫腋、蒔繪劍、壺胡籙、丸鞆帶、或淺履、或靴、奉行職事於南殿西簀子催促之、次諸卿著外辨、辨少納言同著之、內辨著靴、取副宣命於笏、立軒廊西一間、內侍臨東檻、自簾中出之扶持之、關白相具令出給也、內侍居東檻卽歸入、予同令扶持之、次內辨昇東階著兀子、此間上官著階下座、次開門、次圍(闕)司分著、次內辨召舍人、少納言就版、內辨宣、刀禰召セ、少納言稱唯退入、外辨王卿立標、異位重行、內辨召宣命使藤

中納言俊光、宣命使參上給宣命、立軒廊第一間、次宣命使著版、宣制兩段、々々再拜、次宣命使歸本列、次公卿退出還著陣座、次宸儀還御本殿、其儀如出御、但右中將實任朝臣、左中將公秀朝臣等令扶持內侍、此間藏人奉仕御殿御裝束、其儀如官奏、但敷圓座二枚、立切灯臺、次主上出御晝御座、御直衣、次關白殿令候御前圓座給、次予參進承仰、召執筆大臣、其儀出御殿、就軾仰左府云、關白御消息云、コナタヘ令參給ヘ、次左大臣昇自殿上小板敷著執筆座、不被著殿上、次執筆召男共、予參進、左府云硯續紙、次予入硯續紙於柳筥持參之、於小板敷小舍人傳之、次執筆書之、近代不被召人々名簿、任人關白殿被進執筆、書畢入柳筥奏覽、次執筆左大臣歸著陣、令右宰相中將實躬、左大辨宰相有房雖申領狀不參、仍右宰相中將書也、清書也、黃紙一枚傅、別紙折堺一枚、兩大夫、折堺一枚、學士、亮、進、屬幷監署載一紙、清書畢大臣奏聞、此間定房朝臣依所勞退出、仍予所奉行也、大臣乍陣召職事、仍參著軾、入折堺於筥蓋被下也、仰云、執柄被候歟、申云、御參富小路殿、仰云、然者只可奏聞、次奏聞、次返下、先是執筆令書之間、上卿有召仰、參著軾之處、左府被申云、啓陣宣下事、可令遲々、早可申請、且上卿申請有其例者、次予起座歸著、仰云、任例令差遣除目清書、奏聞之後、上卿召官人令敷加軾一枚、次召外記、召左少將敎氏、右少將爲守朝臣、左兵衞佐資名、右兵衞尉代仰之、次坊官、傅、大夫、權大夫等、就弓場奏慶賀、予申次也、其儀先出逢自無明門代、左府氣色、予又深氣色、次持笏歸出深氣色、仰聞食由也、左府氣色、次予居之退入、依家禮令既居也、各舞踏、主上出御之後、藏人兵部大輔經世相具御膳具、參富小路殿、儲皇御所、勅使立中門外、右大辨雅俊朝臣出逢歸出氣色、告可著殿上座之由、次勅使著殿上座賜祿大祿、退出云々、勅使事予雖有催申子細畢、

坊官奏慶之後、左少將俊言實歟本不詳朝臣爲勅使、被献御劍於青圍、(闕)壺切、代々儲皇御護劍也、此間被置仙洞、仍參萬里小路殿申出之、於東面妻戸被出之、持參內裏、付大納言典侍進入之、於鬼間召俊言朝臣、內侍被出之、賜俊言朝臣、俊言朝臣差笏給之、入赤地錦袋、出自無明門代於弓場給小舍人、康和俊忠令持隨身、可守彼例歟之由後示之、令持小舍人例也、康和令持隨身有其難歟之由、予示之、仍令持小舍人畢、次俊言朝臣參青圍、(闕)次予退出、于時及曉天、

坊官

傅左大臣師敎、大夫權大納言源通重卿、權大夫左衞門督兼季、參木檢非違使別當、亮左大辨藤雅俊朝臣、權亮中將藤清雅朝臣、大進右衞門權佐資冬、權大進平親時、少進左衞門佐平忠望、六位進平知有、大屬中原俊幸、少屬安倍資景、今一人可尋名字、學士菅原在經朝臣、藏人三人、

立太子節會

公卿

左大臣內辨、權大納言實泰、土御門源大納言通重、二條中納言賴藤、藤中納言俊光、右宰相中將實躬、押小路宰相顯家、別當兼季、

少納言

信賢

辨

權右中辨光定朝臣　左少辨光方　右少辨惟輔

近衞將

左

俊兼朝臣　敎氏朝臣

右

實任朝臣　公秀朝臣　經賢朝臣　淸雅朝臣　業邦朝臣

啓陣將

敎氏朝臣　爲守朝臣

左兵衞

資名（佐）

右兵衞

尉某

御劍役

左少將俊□朝臣（實歟、言歟、本不詳、俊定者坊城前中納言云々、然者本誤歟、）

御膳具

藏人兵部大輔經世

基熙公記

天和三年二月九日壬午、今日立坊也、（中略）前關白、右內兩府、前內府、九條（鷹司房輔）（鷹司兼熙、今出川公規）（大炊御門經光）大納言（輔實）、二條三位（綱平）中將等被來會、猶言談移時、既及巳上刻、外辨等悉具之由奉行職事篤親朝臣來申之、有早可始節會仰、仍下殿著陣、端、次外辨公卿次第著座了、次召官人令敷軾、次召外記、大外記師庸來軾、仰云、諸司ハ具シタリヤ、師庸申候由退、次奉行職事篤親朝臣來軾、（經柱內不經小庭、是彼一流家說也、）仰云、以朝仁親王（東山天皇）皇太子タルヘシ、宣命令作ヨ、余微唯、職事退入、次以官人召大內記、〻〻〻長詮朝臣來軾、余仰云、朝仁ノ親王ヲ以テ皇太子トスヘシ、宣命ツクラシメヨ、長詮朝臣退、次少內記職永入宣命草（宿紙）於莒持參、余披見、（依草不加御名字、）乍莒見之、目外記令退、次以官人招職事奏聞、返給之時仰云、淸書セシメヨ、次召內記下草仰淸書事、如職事、內記退更持參淸書、猶乍莒中披見之、（未奏文書每々如此、）如元卷了令持莒於內記、進弓場代奏聞、返給還著陣、內記置莒欲退之時仰云、陣ノ腋ニ候ヘ、內記立小庭、次向宣命使仰云、

權中納言藤原朝臣宣命使ニ、淳房卿微唯、次向內府示、外辨直起座、內記相從、於陣後著靴、此間內府以下外辨幄ニ向、次向宜陽殿壇上、如例節會不立兀子、是例也、內侍臨西檻聊一兩步進出、磬折入軒廊、用東二間例也、取副宣命於笏堂上、有階下揖、經簀子著兀子、西第三間西ノ柱ニヨセテ立之、次開門、次圍(閉)司ハマカリヨンヌルカ、次舍人二音、少納言著版位、官人每々答申事如例節會、次公卿參列東上北面、著標、內府練步著標、權大納言以下不練、次召宣命使、其儀取出懷中檜扇、笏ヲナラス、宣命使離列堂上立余後、左方、余取宣命給之、以左手從座下微々給之、宣命使昇一足於長押上左足、及手取之、立定一揖下殿、欲下階程余下殿、階下揖、向宣命使一揖、出軒廊東二間斜向巽除(徐カ)步、不到標事二丈許練步著標、須經內府後、大納言列前、而爲早速如此、北面一揖、欲引直裾之處、召使率爾出來直裾了、次宣命使著版、曲折揖如例、宣制一段再拜、又一段再拜了、宣命使復列之後、余廻列上方、出承明門代、於月華門腋邊脫靴改淺沓、不經床子座前經立蔀外、直還著陣、(中略)次以除目居柳莒、先可奏哉之由窺關白氣色、許諾之後奏之、進御座膝行、置除目於御座、拔笏逆行、龜居、(磬)磬屈候、天覽終之時進寄、膝行如始、取柳莒復座、逆行、居圓座、裾たゝなはらを、仍不及總直、置柳莒於前、除目ヲとりをろして、硯以下之物如本居柳莒、聊置左方、始職事持來置所也、次取副除目於笏、深揖逆行、押圓座、退出殿上方、此間窮屈無爲方之間、於布障子邊密々用藥飲湯、暫時休息、著殿上、端疊、清原宣通候沓脫邊、余目、卽出來、仰云、外記ニ莒持參シ、六位外記捧莒立沓脫、及手差出莒、予又及手除目ヲ納莒中、揖起座、降沓脫揖還陣、外記持莒相從、外記置莒於余前退、次以官人召外記、仰云、硯折堺、外記持參硯置參議座上、次余目參議基量卿、參議請目、移著執筆座、余又目、參議來余前、余取出除目授參議、々々取副笏復本座、了置除目於前、置笏左、先卷返續紙、黃紙一枚、宿紙折堺也、二局一、禮帋局籠之、先黃紙、次折堺、取禮紙入板下、一々卷返置前、次摺墨文字歟、次染筆二管共染之如常、但可用筆ノ本ヲ筆臺ニ不掛例也、二管共ニ如本筆臺ニカク、不知故實歟、先取黃紙書傅、次又取一卷書兩大夫、又取一卷書亮以下、此時放餘紙、其儀注奧、悉書了、餘紙ヲカキ板ノ下ニ入、清書三通幷草等取副笏來余前、余置笏取之、空莒ヲ左ノ方ニ押遣了、文共ヲ右ノ方ニ置テ、此間參議復座一々見之、未奏間高不取上見之、畢置莒中、於草者懷中之、次以官人召外記令持莒、進弓場奏之、足所勞無術之間、小板敷ニ腰ヲカケテ休息、宿德作法也、職事歸出之程、退無名門代、如奏時、給莒令持外記、還著陣、外記置莒退、次以官人更召外記、仰云、ノンノツカサハ候ヤ、外記申候由退、更又立小庭蹲踞、申云、ノンノツカサ候、仰云、候ハセヨ、外記退又更進出事如始、申云、ノンノツカサ候、余仰云、召セ、外記退、次式部丞卜部兼充立小庭、著靴、余仰云、マウコ、兼充來軾、余此間取副清書於笏、三通一度ニ下之、式部丞取之退立小庭、余仰云、マカリタマヘ、兼充唯退、次以官人外記ニ空莒硯等令撤之、其詞硯ヲ撤セヨ、外記來軾欲取筥之間、自懷中取出除目給之、仰云、明日里亭ニ

持參レ、外記懷之、取莒直到參議座、取重硯退、次參議復本座、次職事來軾、仰云、近衞各一人、兵衞各一人令候春宮啓陣ヨ、余微唯、職事退、次以官人令加敷軾、其詞軾加ヘヲケ、官人退加置本軾東方、次以官人召外記、召近衞、左中將雅豐朝臣、右中將爲敎朝臣、雖上﨟守府次第後來、兩人著軾、余云、東宮ノ啓陣ニサフラヘ、兩人退、次又以官人召外記、召兵衞、左兵衞佐康綱朝臣、右兵衞佐相起來軾、仰詞如始、畢退、次撤軾、如常、起座、堂上於番衆所暫休息、此程關白以下坊官人々參本宮云々、既申斜也、仍引率外辨公卿參東宮御所之處、傅以下慶賀等事終云々、仍各列立中門外、亮持言朝臣出向、余一兩步進出一揖、亮退入、更出一揖、余答揖、亮退入、余以下入中門列立、有揖、一同再拜了、退中門外、又列立、權亮持房朝臣進立、余如始一兩步進出一揖、權亮退入、更出一揖、予答揖、權亮退入、余兩三步進立、內府、權大納言等可有二拜由示之、余答云、兩三步進出可拜タメ也、仍俄各進出、一同再拜、此後內府早出、頗不甘心、於早出者不可立此拜、次第著殿上、揖等如常、關白兼被座、余著之後、傅從奧方經小板敷著端座、余次也、上卿次第著座、但大夫、權大夫自下口守次第出來著座、參議等著了、各立箸匕如常、飯兼居之、饗等各兼居之、次大夫起座、箸匕共撤之、爲早出也、於小板敷未挿笏取盃進關白前、大進賴重取瓶子、勸盃了大夫不復座、早父子之禮事多故也、巡流至最末參議、次二献、勸盃權大夫、瓶子權大進輔長、巡流如始、次居汁物、此時余拔箸匕取笏、關白以下箸汁拔之、取笏、陪膳雅永朝臣、實久朝臣、納言以下從始居之、居之、了關白以下立箸、余此時取箸立汁、取匕更立飯、次三献、權亮勸盃、瓶子權少進安倍泰貞、巡流如始、每勸盃巡流拔箸、每々之事也、了亮取祿、關白目不取之、目亮々持之、下小板敷給、關白隨身、豫候退路、隨身取之退、關白起座、自小板敷下出中門、次雅永朝臣取余祿、余取之掛左肩、卽揖下小板敷、前駈諸大夫光好朝臣取之取(衍カ)之退、余揖退出中門外、東宮外祖父前亞相右大將等向顏、今日之儀無異無事、珍重之由伸祝詞直退出、權大納言以下次第退出歟、抑今日大床子御膳陪膳事大夫卿勤之、雖然未若年之上、大床子陪膳無益之事也、仍內々讓權大夫了、仍大夫傍令早退出了、大床子事可尋記、日既暮便路直參內、申珍重之處、御對面除目儀等神妙之由被仰下、余又今日再興大禮無異無事、珍重之由種々伸祝言退出、取松明、日來所勞之上、終日之儀窮屈失前後、雖然太儀無事參勤、頗喜悅而已、

今日散狀如此、篤親朝臣所持參也、

立太子節會

公卿

御參　內大臣(今出川公規)

權大納言(清閑寺熙房)　三條大納言(實通)

左右近府

雅豐朝臣　爲經朝臣

左右兵衞府

康綱朝臣　相起

日野中納言（資茂）　万里小路中納言（淳房）
東園宰相中將（基量）　清水谷宰相中將（實業）
少納言
時方朝臣
辨
賴重
（中略）
一關白折紙如此、大高檀紙、
東宮
傅　藤原兼熙（鷹司）
學士　藤原韶光（勸解由小路）
學士　菅原長量（高辻）
大夫　藤原家熙（近衛）
權大夫　藤原冬基（醍醐）

大將
左
英通朝臣　基輔朝臣
爲綱朝臣
右
定經朝臣　公晴朝臣
公光
啓陣將

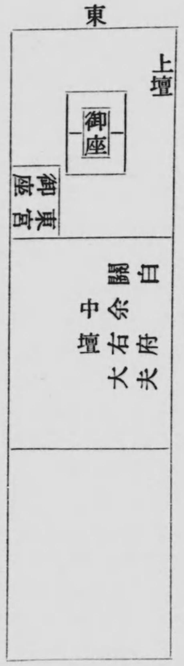
亮　藤原持言（山科）
權亮　藤原持重（花山院）
大進　藤原賴房
權大進　藤原輔長（甘露寺）
少進　安倍泰福（土御門）
權少進　安倍泰貞（倉橋）
大屬　小槻利昭
少屬　中原章成
權少屬　宗岡常辰
主膳正　平正久
主殿首　藤原俊長
主馬首　源國信

十六日己丑、今日東宮始行啓禁裏、大夫可供奉之間、天明之後著束帶衣袍、紋リンタウ立涌、下襲等如常、蒔繪劍、紫綾平緒、紋橘、懷中檜扇、把笏、此笏借前平中納言物了、小故也、先笏之體歟、前駈諸大夫四人、衛府

長一人、童二人、退紅等也、余同參東宮、時刻押移之後、關白被參、既及巳刻關白同道參內、便路之間向勸修寺大納言(經慶)家、兩人密々窺見行啓行列如此、

出車　左兵衛府大尉賀茂氏生　少尉昌倫　佐康綱朝臣　陣頭　利忠　陣頭　宗辰　內舍人和氣安重　內舍人和氣秀宣　卷纓右老懸、帶弓箭　兵衛督　源宰相(有維)中將　清水谷宰相(實業)中將　垂纓、不帶弓箭、右衛門督　卷纓老懸、帶弓箭、左兵衛督　西園寺中納言(實輔)　今出河中納言(伊季)　日野中納言(資茂)　日野大納言(弘資)　右大將(花山院定誠)　權大納言　學士　韶光朝臣　權亮持定朝臣　亮持房朝臣　權大夫　大夫　傅　帶刀　藤原之孝　源國信　藤原吉氏　帶刀　平正顯　源武矩　藤原俊長　藤原元信　藤原英益　重承　重基　童子二人　舍人二人　平正久　藤原光章　景福　安益　童子二人　舍人二人　御車　車副八人　大進賴重　權大進輔長　少進泰福　權少進安倍泰貞　大屬利昭　少屬中原章成　權少屬宗岡常辰　英通朝臣　惟庸朝臣　定經朝臣　雅元朝臣　爲經朝臣　雅豐朝臣　隆盈朝臣　實久朝臣　通躬朝臣　公晴朝臣　在庸、實陰、公光、有胤、公韶、光胤、　右兵衛府　佐相起　大尉兼佐　大尉賀茂忠直　委細猶在別、隨見及注之、

入御內裏之後、於常御所御對面、



東宮火色闕腋
御袍、御ヒンツラ、
御帶劍、牙御笏、

御對面之後、早以各退出、又參東宮、依便路、關白、余、前關白、向西園寺黃門(實輔)家、窺見還御、則參東宮、伸珍重退出、既日沒之程也、

資方朝臣記抄

享保十三年六月十一日、昭仁親(櫻町天皇)王立太子節會也、卯剋被相催、內辨左大臣吉忠、外辨今出川大納言公詮、三條西大納言公福、權中納言爲久、三條中納言利季、宣命使葉室中納言賴胤、宰相中將實岑、陣執筆、右兵衛督俊宗、少納言宣香朝臣、辨光潔朝臣、次將左基廉朝臣、宣季朝臣、家胤、右隆英朝臣、雅富王、公梁啓陣、府次、左定俊朝臣、右定種朝臣、御膳具使秀定、御劍使隆兼朝臣、陪膳殿上人宣香朝臣、重豐朝臣、盛仲、房季、榮敦、東宮職傅右大臣兼(熙)公、學士資敬朝臣、長誠朝臣、春宮坊大夫左大將房(熙)公、權大夫新中納言實憲卿亮實全朝臣、權亮榮親朝臣、大進稙房、權大進光綱、少進時行、權少進源澄仲、

二十三日、東宮拜覲也、今夜亥刻計也、東宮傅兼香公令候議定所庇圓座給、南面、東宮出御于議定所艮方之御座、次東宮大夫實憲卿取御劍歟、御笏歟、次傅卷御簾、次東宮出御、經布障子高遣戶ノ邊ヲ御通リ有之、傅以下供奉、脂燭之輩、布障子ノ前ノ妻戶之內取脂燭、長橋ノ邊西ノ妻戶ノ邊迄也、入御于鬼間、御休息所歟、垂簾也、傅被候鬼間ノ孫庇、北面也、此間主上出御于晝御座、御帳臺無几帳、立御倚子、無晝御座之疊、垂簾、々之內左右有菊燈臺、簾外同前、次頭

辨候御簾歟、次傅目、左少辨稙房從御目、傅仰左中辨宣誠可來由、宣誠相從、次孫庇ノ邊ニ御出之道ノ搆ヲ被命、次從簾中卷簾、太子御出、傅以下供奉、太子令著晝御座簾外之疊給、大夫取祿行于鬼間孫庇之程、亮跪取祿了、掛左肩挾右脇、左ヲ爲上、右ヲ爲下、復座、長橋、次御拜、傅候御後、次令出晝御座給、二枚杉戸ノ方ゟ御出、取脂燭了、次令入議定所了、脂燭殿上人範篤朝臣、輝秀朝臣、保房、房季、丹波尙秀、各束帶、奉行光綱也、

橋本實久卿記

天保十一年三月十四日乙巳、今日立太子也、(孝明天皇統仁親王)少將參陣、去冬奉仰、仍卯剋斗著束帶、縫腋、卷纓、蒔繪劍、紫綾平緒、馬腦帶、具靴、(瑪瑙)隨身二人、□蘇芳垂袴、白張二人等召具參內、予節會本宮等不出仕、仍著衣冠參內、付勾當掌侍申上恭賀、賜祝酒、予爲一條大納言(忠香)殿訪向陣方、兼可訪申被示了、(九條尙忠)右大臣今日內辨也、被著端座、次權大納言以下參仕人々著陣、宣命草被奏聞也、其後返賜、內辨可清書之由被仰歟、內記退出持參清書、內辨披見令持內記進弓場、奏聞儀了、內辨歸著陣、內記置莒、內辨置笏取宣命、取副笏返給莒於內記、々々退去、內辨向別當仰云、宣命使雖微音、其詞聞程也、別當揖許、次內辨居向奧座、被仰外辨、次權大納言以下出敷政門、於鳥曹司著靴、出南戶被著外辨、今日無兩面兀子、左右次將自日月花門引陣、少將爲璽扶持之間遲參也、次將各著靴、舊例著淺沓有例、今日各著靴、小時天皇御于南殿、簾中、須臾內侍臨東檻、內辨微唯直昇殿、此間少將降東片階著靴、自陣方經櫻樹北引陣、立陣也、

次開門闈司分居、次召大舍人二音、少納言行光朝臣代著版位、內辨宣、刀禰召せ、此間、外辨公卿等鴈行如例、行光朝臣門外唯稱、次權大納言(輝弘)入承明門東扉降壇上、練步著標下、次一條大納言殿(忠香)、權中納言(光成)、四條中納言(隆生)、別當(隆光)、新宰相中將(有言)、左大弁宰相(正房)等著標下、異位重行、次召宣命使、以扇鳴笏被告、宣命使別當揖離列、直入軒廊東二間昇殿、昇降有揖、其作法不及見、直降殿西一間被立、南面、次內辨下殿向宣命使揖、被過出東二間、練步被立標下、次宣命使出同間練步、予此間退出、參大宮申恭賀、賜祝酒、次參殿下同申入、次參院付女房申恭賀、賜祝酒、申剋退出、次亦參內、御前除目了、陣執筆左大弁宰相了、式部丞賜除目之間也、右大臣以下著陣、本宮被仰啓陣、將左基貞朝臣、右隆枝朝臣、次右大臣以下各被參本宮、昭陽舍、今度被用小御所、先之傅以下被申慶賀、被參本宮、其後續而關白被參本宮云々、御膳使藏人權右中辨俊克持參御膳具、御劍使頭右中將忠能朝臣御劍持參、權亮取之、夜御殿持參賜祿云々、右大臣以下參入、立南門外、令亮光政朝臣被啓賀、予、一條大納言殿、內々相從候南門外、光政朝臣復命之後、右大臣以下進南庭再拜、西上北面、了退列立南門外、令權亮實德朝臣被啓昇殿之事、復命之後再拜、不進庭中、了各著殿上、關白被著、豫設饗於臺盤、次一獻、大夫輔勸盃、大進取瓶子、次二獻、權大夫勸盃、權大進取瓶子、次居汁物、關白大臣、四位殿上人役之、納言以下豫居之、次三獻、權亮勸盃、權少進取瓶子、次賜祿、關白白

大祓二重、大臣同一重、大納言以下參議以上同一領、予此儀各不及見、次諸卿退出、爲先依御次第注之、下萬、一條亞相公退出、予直ニ退出、此後被供御膳、大夫陪膳、神祇官大殿祭奉仕云々、

今日除目

內大臣從一位　東宮傅藤原忠熙（近衞）兼
少納言侍從正四位下　學士菅原在久（唐橋）兼
伊豫權介從四位上　菅原爲政（桑原）兼
權中納言正二位　權大夫源建通（久我）兼
右中將正四位下　權亮藤原實德（正親町）兼
藏人頭左中辨正四位上　亮藤原光政（烏丸）兼
侍從正五位下　權大進藤原胤保（廣橋）兼
藏人中務丞正六位上　權少進大江俊常兼
左京權大夫從五位下　少進藤原經治兼
右少史內匠助正六位上　少屬紀定厚兼
權少外記中務少丞少內記正六位上　大屬中原職孚兼
左馬少允正六位下　主殿首橘宜敷兼
宮內少丞正六位下　權少屬宗岡經成兼
左將監正六位上　主膳正源吉貫兼
左衞門大志正六位上　主馬首中原章甫兼

今日節會

公卿

內弁御前就塵（九條）　右大臣尙忠　權大納言（廣橋）輝弘　一條大納言忠香　權中納言（廣橋）光成　四條中納言隆生

宣命使（柳原）　右衞門督隆光　新宰相中將（六條）有言　陣儀筆（高野小路）　左大辨宰相正房　少納言行光朝臣　辨資宗

次將左

璽扶持　實麗少　政季朝臣　爲知朝臣

右

劍扶持　公正朝臣中　公前朝臣少　定功朝臣少

本宮啓陣將　左中將基貞朝臣　右中將隆枝朝臣

一會傳奏　新源大納言（廣橋）基豐　奉行職事　忠能（中山）朝臣

拜舞云云、

八江談抄　三　雜事　劍

壺切

壺切者爲張良劍事

又被命云、壺切ハ昔名將劍也、張良劍云々、雄劍ト云僻事也云々、資仲所說也、

壺切事

劍ハ壺切、但壺切燒亡歟、未詳、件劍ハ累代東宮渡物也、而後三條院東宮之時廿三年之間、(藤原敎通)入道殿不令獻給云々、其故ハ藤氏腹東宮之寶物ナレバ、何此東宮可令得給乎云々、仍後三條院被仰之樣、壺切我持無益也、更ニホシカラズト被仰ケリ、サテ遂ニ御卽位ノ後コソ被進ケレ、是皆古今所傳談也云々、

禁祕御抄　上寶劍神璽　抑壺切、代々東宮寶物也、又時々在公家、延喜以少將定方被渡東宮、是始歟、東宮給褂一重、

禁祕御抄階梯　上寶劍神璽　延喜被渡東宮保明太子、諡號文彥太子、醍醐天皇皇子、西宮記、延喜四年二月十九日、召左大臣仰立太子宣命旨云々、使左近少將定方、持壺切劍賜皇太子曰、吾爲太子初、天皇賜此劍、故以賜之、定方奏復命、祿褂一襲、

按壺切者、漢張良劍、資仲卿記、長良公劍、忠仁公兄、花園院御記、(藤原良房)忠仁公劍、寬平御記、(藤原基經)昭宣公劍、顯兼卿抄、(醍醐)延喜帝東宮之時被進之、寬平五年四月二日立太子、山蔭爲御使、是始歟、海浦蒔繪有如龍摺貝、裝束青滑革、延久御記、海浦蒔繪野劍、麒麟螺鈿文、人車記、後冷泉院康平二、正、八、皇居一條院燒亡之時爲灰燼、不被進東宮、後三條院治曆四、十二、十一爲灰燼、仍被鑄造、或抄、此時刄殘、仍被造鞘、顯兼卿抄、承久亂逆之時、紛失之由有沙汰、寬元元、仁治四、八、十、後深草院立太子、被新造、壺切紛失、被渡他御劍、百練抄、正嘉二、八、七、龜山院立太子、自勝光明院寶藏出現、承久不紛失、被納寶藏歟云云、或抄、

壺切の御劍は初め藤原基經の家に傳へ基經之を宇多天皇に獻ず

宇多天皇壺切の御劍を皇太子に在しゝ醍醐天皇に授けたまふ

江次第　十七立太子事　次公卿以下參本宮、令亮啓之、進御前再拜、淺履、執柄傅、或不立此列候簾中、此間被仰昇殿人々、公卿已下、公卿以下令啓昇殿慶、付亮、再拜了、便所、著殿上座、被奉護身劍、壺切入錦袋、或御對面日被奉、以頭中將若兼亮次將遣之、自持之參本宮、立便所令亮奏、亮歸來取之置御所、次亮取祿給勅使、先召上之、或敷座茵、近代不必敷、祿代々不同、或褂二領、或褂袴、或褂一領、下庭再拜、歸參復命、

世俗淺深祕抄　下　一、東宮護劍壺斬、蒔繪海浦、有如龍摺貝、裝束青滑革、此事不見諸家記、延久御記許被註此旨ヲ秘藏云云、

扶桑略記　二十二宇多天皇　(寬平元)仁和五年己酉正月十八日、(藤原基經)太政大臣奏云、昔臣(長良)父有名劍、世傳斯壺切、但有名、(文德)田邑天皇喚件劍、賚陰陽師、卽爲厭法埋土、于時帝崩、陰陽師逃亡、是見鬼者也、而不知劍所在、彼陰陽師居神泉苑、爰推量其處、堀覓得此劍、拔所著劍令覽者是也、光彩電耀、目驚霜刃、還納室、件事仰別當給子云々、

西宮記　十一臨時戊立皇后太子任大臣事　侯爵前田利爲氏所藏　(裏書)寬平五年四月十四日、(醍醐天皇敦仁親王)新太子參覲、(中略)自內以亮被奉劍、(宇多天皇)(菅原道眞)

醍醐天皇壺切の御劍を皇太子保明親王に授けたまふ

皇太子の册立に當り壺切の御劍を授けたまふを例と爲す

扶桑略記　二十三　醍醐天皇　延喜四年甲子二月十日乙亥、保明親王立皇太子、時年二歳、母故攝政太政大臣藤原朝臣基經女、中宮穩子也、（中略）左大臣時平朝臣奏曰、貞觀故事有御劍、以山陰朝臣爲使云々、吾又（醍醐天皇）始爲太子初日、帝（宇多）賜朕御劍、名號壺切、左近少將定方爲使、持壺切劍賜皇太子、定方賜祿褂一襲、

御產部類記　伏見宮記錄文書　利三十五　冷泉院（惠平親王）　九條殿記　立太子　天曆四年七月廿三日戊子、（中略）申二刻被渡壺切御劍於東宮（後朱雀天皇敦良親王）、件御劍須御讓位日被渡進遠規付女房令傳啓、但傳大夫依重服不參入、此間勅使左近權中將良ミ（峯緒）義方朝臣令持護御劍參來、賜座於東渡殿令著之、錦土敷一枚、圓座一枚、義方朝臣捧劍著座、件劍元是納宜陽殿也、刃長二尺五寸五分、鮫尾、鞘長二尺七寸五分、柄長五寸八分、金銀蒔繪、海鳧文浮津波鼈頭、以青消革（滑歟）裝束之、有唐錦袋、左近少將伊尹傳取奉之、卽令奏恐由、給祿白大褂二領、勅使拜舞退出、

左經記　寬仁元年八月廿三日戊子、（中略）申二刻被渡壺切御劍於東宮（後朱雀天皇敦良親王）、件御劍須御讓位日被渡東宮也、而有事障、于今未被渡、置納殿、而間東宮辭退後、今日被渡新宮、頗似有靈感、其儀、藏人範永持出自納殿、於殿上口授右近少將公成朝臣、（兼春宮權亮）、公成朝臣卽令持參御藏小舍人共信、參宮御方、件朝臣爲勅使召也、仍於殿上口取之也、

少將取御劍參進畫御座方、大夫卽進請取御劍、持入御在所之後、亮惟憲朝臣以白褂一重井袴給少將云々、卽下前庭再拜退出、

大鏡　三　左大臣師尹　寬仁元年丁巳八月五日（九）こそは、九さいにて三宮（敦良親王）東宮にたゝせ給て、同月の二十三日にこそは、つぼきりといふたちはうちよりもてまいりしか、（後一條天皇）だい位につかせ給しかば、すなはち東宮（敦明親王）にもまいるべかりしを、しかるべきにやありけん、とかくさはりて、この年比うちのおさめ殿に候つるぞかし、（中略）つぼきりなどの事ひがごとにあめり、故三條院たび〳〵申させ給しかども、とかく申やりて、たてまつらせざりしとこそきゝ侍しか、されば故院も、さむばれ、なくともたてではとておはしましゝ也、

東宮冠禮部類記　（尊仁親王）後三條院　土右記　永承元年十一月廿二日戊戌、（中略）只今夜彼宮入御內裏昭陽舍者、（中略）陣中所司敷莚道、宰相中將（能長）持御劍壺切前行、

續古事談　一　王道后宮　東宮ノ御マモリニ、ツホキリト云太刀ハ、昭宣公（藤原基經）ノ太刀也、（醍醐天皇）延喜ノ御門儲君ニオハシマシケルニ奉ラレタリケルヨリ、傳ハリテ代々ノ御マモリトナルナリ、後三條院東宮ニ立給時、後冷泉院ヨリワタサレサリケリ、後冷泉院ウ

セ給テ後モトメイテ、大二條殿(藤原教通)關白ノ時、後三條院ニタテマツラレニケリ、立坊ノ後廿餘年ワタサレテヤミニキ、今位ニツキテ後、トヽメラレストモアリナムト世ノ人申ケリ、後三條院オホセラレケル、神璽寶劍エウナリシカトモ、廿餘年スキニキ、何カクルシカラントテトヽマリニケリ、其後ホトナク、二條內裏(治暦四年十二月十一日)ノ火事ニヤケテ、身ハカリノコリタリケルニ、ヅカサヤヲ作リテクセラレタル也、

○後三條天皇立太子の時壺切御劍を受けたまはざりしと云ふ說あるも、土右記に據れば、立太子の翌年、皇太子の內裏昭陽舍に入御の事を記したる條に、宰相中將能長の御劍を捧持して、御列中に在るを明記したるに徵して、その誤傳なること明らかなり、

百錬抄　四　後冷泉天皇　康平二年正月八日、皇居一條院燒亡、主上渡御上東門院御所、壺切劍爲灰燼、不被獻東宮也、(尊仁親王)

○康平二年の災に、壺切御劍の灰燼と爲りしことは他に所見なし、且當時御劍は東宮に在れば、この皇居炎上には相關することなし、本文の註に、不被獻東宮也とあるによりて察すれば、後三條天皇東宮の時、御劍を傳承したまはざりしといふ誤傳に基づき、當時御劍は天皇の御所に存せしものとして、更にこの誤傳を生ぜしものならん、

爲房卿記　康和五年八月十七日甲子、今日有策命立太子事、(堀河)(鳥羽天皇宣仁親王)今上第一皇子、母贈女御從二位藤原茂子(基)故大納言實季(季卿母前大貳經平卿女、去正月十五日降誕、(中略)六月九日爲親王、一歲立太子、清和、冷泉兩帝之例也、(中略)諸卿座定有盃酌事、(中略)左府以下退出、傅以下坊官暫被留候、左近權中將俊忠朝臣爲勅使持參御劍、壺切也、佇立殿上南面、出戶外權亮實隆朝臣相逢令啓事由、次召勅使令取護劍、參在御殿簾外、實隆朝臣取之、持參夜御殿、延久權亮師忠朝臣傳取持參例也、而左府今夜仰云、大殿御記、大夫取之持參歟、次實隆朝臣取祿、白褂一重、於殿上賜勅使、々々退下、再拜罷出云々、歸參可申之由歟、

兵範記　久壽二年九月廿三日丁卯、立太子事、(後白河)今上一宮守仁(二條天皇)親王、件御名宇、式部大輔永範朝臣擇申之、(中略)

申剋事了、公卿關白殿下以下率參鳥羽殿、次第儀式被准行康和例、

右近中將光忠朝臣爲勅使持參壺切劍、亮親隆朝臣相會上啓之、

藏人左衞門佐忠親爲御膳具勅使參入、御帳今朝被渡獻、卽被立了云々、

兵範記　仁安元年十月十日庚辰、有立太子事、太上(後白河)天皇第二皇子、憲仁(高倉天皇)、母故正五位下

兵部權大輔平時信女、御年六歲、去年十二月爲親王、今於東三條亭有其儀、（中略）次率參春宮坊云々、藏人左少辨右衞門權佐長方爲御膳具勅使、藏人頭右中將實家朝臣爲壺護（切脫カ）劍勅使、供晝膳、大夫卿權亮朝臣爲朝夕陪膳、次名謁、藏人平時實（家歟）問之云々、

玉葉　治承二年十二月十五日甲辰、此日有册命（安德天皇尊仁親王）立太子事、十二月立坊、實仁太子之外無此例、尤有禁諱、然而二歲三歲立坊、又以不吉、被待四歲者、事似延怠、謂其忌之輕重、歲重月輕、因之歲內所被忩行云々、愚案太不甘心、（中略）次御劍勅使頭中將定能朝臣參上云々、後聞、坊官除目御前儀了、光雅相具御膳參東宮云々、

山槐記　治承四年三月五日丁巳、傳聞、今日自內被獻壺切於新院（高倉上皇）、立坊時自一院（後白河法皇）被獻羽給、仍被獻新院也、件御劍東宮累代御劍也、納赤地錦袋、女房於鬼間賜頭、左中辨經房朝臣賜之、令持藏人、於中門廊外賜小舍人、友弘、友衣冠、於陣口乘車之時入車中、小舍人直不可獻頭、仍相具瀧口令取傳之、於院又如此云々、此事兼日頭辨相尋人々、依無所見云々、左府命之、納長櫃可持參、又被示合予、（中山忠親）小舍人持之在車前歟、示民部卿入道範親、先々入車中之由傳聞之旨示之、仍隨彼議云々、

百鍊抄　十五　後嵯峨天皇　寬元元年八月十日、今上第一皇子久仁（後深草天皇）有立太子事、申刻被始行節會、（中略）公卿相引參本宮、事畢自內裏（後嵯峨天皇）被獻御劍、壺切紛失之間、被渡他御劍、勅使頭中將師繼朝臣賜祿再拜退出、

久仁親王立太子の時壺切の御劍紛失に因り他の御劍を受けたまふ

百鍊抄　十七　後深草院　正元元年十二月廿日戊午、自禁裏（龜山天皇）壺切御劍被返進一院（後嵯峨上皇）云々、

萬一記　正安三年八月廿四日、參內、依立太子節會也、（中略）坊官奏慶之後、左少將俊言（實歟本不詳）尊臣爲勅使、被獻御劍於青圃（閤）、壺切代々儲皇御護劍也、此間被置仙洞、仍參萬里小路殿申出之、（於東面妻戶被出之、）持參內裏、付大納言典侍進入之、於鬼間召後言朝臣、內侍被出之、賜後言朝臣、後言朝臣差笏給之、（入赤地錦袋、）出自無明門、代於弓場給小舍人、（康和後忠令持隨身、可令持小舍人例也、）康和令持隨身、有其次第歟之由、予示之、仍令持小舍人畢、其次俊言朝臣參青圃（閤）、次予退出、于時及曉天、

壺切の御劍の授受

龜山天皇壺切の御劍を後嵯峨上皇に返進したまふ

基量卿記　天和二年三月二十七日、今日儲君（東山天皇朝仁親王）へ伺公之輩被仰出、（中略）今日壺切御劍被遣、以密儀土御門兵部少輔令持參也、本儀近衞中少將可持參也、先年万治度令燒失處、作餝燒了之處、於劍者無別儀、依不及磨云々、不思議之名劍也、累代寶物無他物也、

季連宿禰記　天和三年二月九日壬午、（朝仁親王）立坊、

今日立太子節會幷小除目也、（中略）

本宮次第

傳以下參本宮、（中略）

次勅使著殿上

權亮取祿授勅使、（白大掛二領、）勅使降庭上再拜退出、

近來立坊斷絶之後、立親王時被渡護劍、仍被任其佳例、兼依被渡之、今度不及此儀、

基長卿記　寶永五年二月十六日、（中略）辰刻參內、今日慶仁親王（中御門天皇）有立坊之事、其儀在次第、不能細記、（中略）

本宮之儀

先傳以下列立中門外、（西上南面、公卿一列、雲客一列、）申次亮兼重朝臣離列入切妻戶出逢、復命了再拜昇殿、次御膳具勅使治房參入立中門外、亮出逢、復命之後、治房著殿上、（依雨經砌下中門外拜、各門下也、依雨儀也、）給祿退出、次御劍勅使頭左中將隆典朝臣（路頭乘轅云々、小舍人相從、）捧御劍（壺切、古來之公物也、自往古餝等無之、仍而近代不及沙汰、今度自關白家舊記出現、其裝束等顯然、依是被新調、其蒔繪海浦、古來之說也、今度之義不知、可尋、）立中門下、（依雨不門外、御劍入錦袋、）令亮事由（啓脫カ）、歸出召頭中將、昇中門廊切妻參御殿簾前、（經殿上東簀子、）授御劍於亮、々取之持參夜御殿、

議奏日次案　享保十三年二月三日甲申、關白（近衞家久）參入召御前、當六月立坊御治定之旨、被仰下諸臣、

六月十一日庚寅、以昭仁親王（櫻町天皇）被立皇太子節會也、（中略）此間壺切御劍、以內侍從鬼間簾中被出之、隆兼朝臣進簾下給之、持參本宮、

御湯殿上日記　延享四年三月十六日、立坊のせちゑあり、內侍所へ御百度まいり、御まな一折まいる、ちんのき有、そうもん三度有、內辨近衞右府（內前）殿、奉行頭中將（正親町實連）、（中略）つほきりの御けん春宮（桃園天皇遐仁親王）の御かたへまいる、おにの間のつま戶よりないし殿いたさる、

此たひのてんそう葉室大納言（賴胤）、奉行頭中將なり、

御湯殿上日記　明和五年二月十九日、立坊にて內侍所より御百度、御くま御まな一折まいる、（中略）せち會ひるち分より御はしまり也、（中略）御つほきりの御太刀箱より出し、袋計にておにの間つま戶より長はしわたす、春宮（後桃園天皇英仁親王）御方本宮御作法御覽に出御成、春宮御方にも成、御つほ切御太刀內侍代うけとり申され候ゆへ、內侍まいり申さす候か、時の思しめしにておはしまし候、春宮御方しやうとに女しゆ三人まいる、春宮御方御そくたいにて、御まゑゝもんひろはし大納言（兼胤）、御ふく高くら右兵衞權佐（永範）也、

立太子節會記　文化六年三月廿四日甲申、（仁孝天皇惠仁親王）（中略）

御劍使備忘

刻限參候鬼間障子下、或臺盤所簾下、內侍授御劍、次使捧御劍出殿上下戶、經奧座降小板敷著沓出無名門、小舍人相從、次於弓場邊授御劍於小舍人、帶劍把笏、經階下出和德門至昭陽舍代、次使進立昭陽舍代南門外、小舍人捧御劍立使後傍、次權亮出逢啓事之由、次權亮還出告召之由、次使參進、於便宜所令小取御劍昇殿上沓脫、經東簀子、於南面簾前授御劍於權亮、權亮取之持參夜御殿、更出賜祿、白大褂次使纏頭於祿起座、經本路降殿上沓脫徒跣、進立南庭、南階巽方斜向乾立、二拜、先是帶於訖南門邊著沓退出、次於南門外賜祿於隨身、經本路至無名門外脫劍笏、懸祿於肩昇小板敷至臺盤所簾下、先於打毬障子下落令主殿司取之、復奏畢退出、

隆光卿記　天保十一年三月十四日乙巳、今日統仁(孝明天皇)親王可有册命立太子可參仕舊年來被仰下、(中略)人々參集、辰刻過陣之儀被始、

此間有本宮儀

先傳以下參入昭陽舍代、列立南門、西上北面、公卿一列、殿上人一列、附亮啓事之由、兩揖以下如次第云々、

次藏人辨愛長(後克カ)持參御膳具、召殿上賜祿、亮取之、白大褂一領、愛長賜之退出、不拜、是例也、次御劍勅使忠能(中山)朝臣捧御劍立南門外、壺切、如御代々云々、其儀如次第賜祿同褂一重、忠能朝臣下殿再拜退出云々、

官報　號外　明治二十二年十一月三日

御劍傳進　皇太子嘉仁(大正天皇)親王殿下へ、御先例ニ依リ壺切ノ御劍ヲ傳進セラレ、左ノ勅語アリタリ、

勅語

壺切ノ劍ハ歷朝皇太子ニ傳ヘ以テ朕カ躬ニ迨ヘリ今之ヲ汝ニ傳フ汝其レ之ヲ體セヨ

九　立太子記　天和三年二月九日　幷初覲之事

也、(中略)抑立坊之夏、崇光院已後既斷絕、至今者歷年三百四十年、隔代十有五代、然今度再興之事、欣悅之至、難盡筆頭者也、

輪池叢書　公事　立坊の式、後光嚴院より十五代中絕にて、天和三年に再興せさせ給ひしとぞ、(中略)天和三年立坊記に云、立坊ノ儀式御執行アルベキトノ御沙汰アリ、然レドモ近世親王宣下ノ儀ノミニテ事スミ、立坊ノ式ハ、崇光院ヨリ至只今十四代、二百餘年餘絕タル事也、故文獻不足徵、諸家共考ラルベキ記ナシ、伏見殿ニ、崇光院ノ御時立坊式幷親王ノ御衣トテ、則崇光院御著用、所々蟲バミノ跡アルモノ、笏刀ハ不及申、及天皇元服ノ時、自南殿清涼殿へ入御ノ時、御著用ノ空頂黑幘等ノ物マデ存ス、其上册命

儲君宣下

靈元天皇朝仁親王を儲君に治定し次いで皇太子と爲したまふ

立坊記、萬一錄ナド云ル舊記アリ、其ニ從ヒ考ラルヽ時ニ、大禮ノ儀式粗備レリ、主上悉叡覽アリ、伏見殿ヘ大ニ御感ノ勅諚アリシト聞ユ、既ニシテ陰陽家ニ命ジ玉ヒ、日時ノ勘文ヲ奉ベキトノ勅定ナリ、於茲天和三年春二月九日ニ極リヌ、〔屋代弘賢天保十二年歿〕

羽倉考

一　立太子東宮宣下　靈元院有立太子之事、則不可無東宮宣下之事、（中略）儲君宣下ハ、初ヨリ嗣位タルベシト、明ナル皇子ヲ先儲君ト定メテ、立太子以前ヨリ其禮自餘ノ皇子ト同ジカラズ、當今（櫻町）モ立太子以前ニ儲君宣下アリ、年月ハ忘却ス、中御門院モ立太子ノ前年、寶永四年三月廿二日儲君宣下、東山院モ立太子ノ前年、天和二年三月廿五日儲君宣下アリ、但靈元院ハ明暦四年正月廿八日立太弟ニテ、其前ニ儲君宣下ノ事見エズ、是ハ東山院、中御門院、當今ナドノ如ク、皇考ヨリ位ヲ繼ギタマフニ非ズシテ、皇兄後西院ノ位ヲ嗣ギタマヘレバ、先帝ノ皇弟ニシテ、皇子ニ非ザルガ故ニ、儲君宣下無リシナルベシ、〔荷田在滿寶暦元年歿〕

基熙公記

天和二年三月廿五日癸酉、從今朝持病頭痛發動平臥之處、從禁裏（靈元天皇）有召間、扶所勞著朝衣參內、（中略）頃之前關白（鷹司房輔）被參、九條大納言（輔實）同被參、余亞相又參之後、武家傳奏定誠卿、有能卿、罷出云、今度從關東御繼體之事可在叡慮之由被申上、（中略）抑儲君爲何宮之由未聞之、於御所兩傳奏不及申聞、不可說之次第也、退出之後、余平臥、諸人儲君爲五宮之（東山天皇朝仁親王）由所風聞也、定而必定歟、

廿六日甲戌、諸家輩群參賀申儲君之儀云々、及薄暮從關白有使者、明日儲君五宮始令參內御間、爲御祝肴一種可進上禁裏由被示送、余頭痛平臥之間、倩觀世間之躰、此儲君、大納言典侍局、松木前大納言宗條卿息女、御鍾愛傍若無人、此女子殊有疾痁（疾妬）我慢云々、仍此五宮令降誕給之後、可爲儲君旨漸々申入之歟、當時一宮（寛清親王）御座之日可爲儲君條、諸人內存不可能左右、而去年以非道雖被押籠一宮、今日及此儀、抑一宮、小倉大納言實起卿、去年配流佐土島、息女中納言典侍局之腹也、此中納言典侍亦爲疾痁（疾妬）人、就此典侍身上、先年後水尾院、新廣義門院有愁思召事、仍余奉諫主上、中納言典侍暫令退里亭了、其時主上無本意被思召之間、於一宮者必可爲御繼體間、若後水尾院、新廣義門院以他宮雖可被定、必此一宮之御事、汝可爲御繼體旨、雖幾度拋身命申沙汰由、返々蒙仰、依是于今存此旨之處、被定五宮條、叡心如何々々、□末世之叡慮、言語道斷、且又窺時宜、花山院前大納言定誠卿、千種前大納言有能卿、難波中納言宗量卿等之儜（佞）臣、執朝廷權、關東之義（儀）種々構謀計申行歟、

廿七日乙亥、五宮始令參內御云々、獻肴一種了、

三年二月九日壬午、（中略）今日立坊（朝仁親王）也、

兼輝公記　天和二年三月二十五日、未斜依召參內、攝家中各朝參、兩傳被申渡之、今度五宮儲君事、依相談關東被定之、（中略）可得其旨者、申珍重了、各有御前召、候御前退、

十月二十五日、今日辰刻當今一宮（寬清）親王宣下、是勸修寺門跡爲弟子宮、來月入寺、（中略）抑一宮可爲儲君處、有故被廢之、被立五宮、其儀頗難記載、仍不及具注、

十二月九日、依召參內、左府（近衞基熙）、內府（鷹司兼熙）、前殿下（鷹司場輔）被參、以兩傳被仰出云、儲君宮東宮事御再興、既勅問將軍家、可被任叡慮旨言上、仍來春欲被行立太子后節會、可得其意者、各奏大慶由、有御前召、奏珍重旨退朝、尤三百年中絕、今度御再興、珍重々々、

三年二月九日、（中略）今日立太子也、

靈元院御集　二月九日（天和三年）、中絕の立坊の事、此たひ御沙汰有しに、節會の儀式よりはしめ、ことのさはりなくとけおこなはれぬる事を、

時しありて絕たるをつく此春の我うれしさは身にあまりぬる

執次詰所本御系譜　東山天皇　延寶三年九月三日降誕、號五宮、天和二年三月二十五日爲儲君、八歲、（中略）同十二月二日立親王、（中略）同三年二月九日立皇太子、九歲、

東山天皇慶仁親王を儲君に治定し次いで皇太子と爲したまふ

中御門天皇昭仁親王を儲君に治定し次いで皇太子と爲したまふ

櫻町天皇遐仁親王を儲君に治定し次いで皇太子と爲したまふ

被行節會、

通誠公記　寶永四年三月廿二日乙亥、今日長宮（中御門天皇慶仁親王）被定儲君、

五年二月十六日癸亥、以慶仁親王被立皇太子節會也、

基長卿記　享保五年十月十六日、（中略）今日於宮中御沙汰、自今日可被稱儲君之由被言上也、且儲君伺公之輩被仰付了、此義も今日被申上也、其後儲君へ被仰出、衆中爲御禮被參了、

基槙卿記　享保十三年六月十一日庚寅、

一、卯剋過基廉、今日立太子節會（櫻町天皇昭仁親王）次將就參役參內、何茂取揃、基廉、八條羽林斗（隆英）、余集候、而八條被及遲々候間、白羽林（自カ）ゟ申遣早々參集、辰上剋過陣之義相濟、

八槐記　延享三年正月廿一日丁巳、（中略）此日茶地宮（桃園天皇遐仁親王）被仰定御繼體、近日可有立親王宣下、自今日稱儲君、關白以下群臣奉之奏賀詞、

先召關白（一條兼香）、左大臣（一條道香）、右大臣（近衞內前）、內大臣（二條宗基）、九條大納言（尙實）等、勅云、御在位既及十餘年、其間關白輔佐、前將軍吉宗公父子崇敬最厚、被興頹廢之政事訖、近代聖主御在位多雖及廿餘年、當代屢政

桃園天皇英仁親王を儲君に治定したまひ次代後櫻町天皇皇太子と爲したまふ

光格天皇惠仁親王を儲君に治定し次いで皇太子と爲したまふ

務再興之上、又永御寶位之亥恐思食、謙讓脫屣之叡念依有之、頻御繼嗣之事被仰定云々、入夜余咫尺(實橘兼胤)御座奉件旨、居高思危之叡慮不及言語、可謂明詔、雖然聖算未被滿三十、儲君御幼稚也、永御治世仰冀之旨、雖恐懼以實意再三奏之、幸不背天氣歟、亥剋許退朝、參女御廬、儲君御同居也、賀申有一盞、深更歸畢、

從今日、宰相中將公文、大藏卿重豐、東久世三位通積等可參儲君御所被仰下、

四年三月十六日丙午、(中略)此日遐仁親王冊命皇太子日也、

八槐記

寶曆九年正月十八日庚子、參內、若宮(後桃園天皇英仁親王)二歲、來五月可有立親王宣下、自今可稱儲君被仰定、

明和五年二月十九日戊寅、英仁親王春秋十一歲、先帝皇子、立皇太子之日也、左大臣尙實奉勅被行之、

議奏日次案

文化四年六月廿六日丁酉、關白(鷹司政熙)參入、被窺天氣、皇子寬宮(仁孝天皇惠仁親王)可有立親王、深叡慮之旨、被仰下將軍家之事、於小御所下段、關白召正由宿禰武士、忍侍從、被仰之、武家傳奏廣橋前大納言(伊光)、千種前中(有政)納言被候座、

七月十八日戊午、關白參入、被窺天氣、召御前、辰半刻正由宿禰忍侍從參入、於小御所下段、關白令謁給、去六月廿六日、寬宮可有立親王、被仰進于將軍家申勅答、武家傳奏廣橋前大納言、千種前中納言被候座、廣橋前大納言、忠尹(中山)、淸閑寺前大(祕定)納言、山科中納(忠言)言、六條前中(有庸)納言、千種前中納言等召御前、常御所傍間、關白被傳仰、御繼體之事、厚叡慮有之處、自仙洞(後櫻町)御懇篤被仰進、自中宮光格后欣子內親王、亦敢被仰上、依之今度寬宮爲中宮御實子被定儲君、來九月立親王御治定之事、

九月廿二日辛酉、儲君御名字惠仁、親王宣下也、

六年三月二十四日

一、立坊(惠仁親王)ニ付、辰刻前芝山(持豐)殿御參、

仁孝天皇統仁親王を儲君に治定し次いで皇太子と爲したまふ

言成卿記

天保六年六月廿一日、回文自久我到來、其寫如左、

熙宮(孝明天皇統仁親王)追々御生長、自今日被定儲君、來八九月之間、立親王宣下御治定、尤准后(藤原祺子)御方御養子、御實子御同樣被仰出候事、　熙宮、自今被稱儲君候事、御次第可爲准后御方御次事、儲君江言上之儀、於禁中言上可然之事、今明日中御所々々、准后御方、儲君等へ參賀可然候事、

右之通傳奏議奏列座、大宮權大夫(政季)被申渡候、仍早々申入候也、

六月廿一日　基豐(廣幡)

明治天皇嘉仁親王を儲君に治定し次いで皇太子と爲したまふ

七月廿二日、今日儲君、准后御方江、飛香舍也、御移徙被爲在、

九月十八日、今日儲君立親王宣下、予依家司、巳刻前著束帶參本宮、（中略）廻文到來、親王御名字統仁於佐、右御治定候事、儲君御次第、可爲准后上候、尤節朔以下、儲君江言上之事、可爲是迄之通之事、右之通大宮權大夫被申渡、

十一年三月十四日、今日統仁親王立太子、先被行節會、

官報　第千貳百五拾四號　明治二十年九月一日　宮廷錄事

儲君

嘉仁親王（大正天皇）殿下追々御成長ニ付キ、昨三十一日御先例ニヨリ儲君ニ御治定遊ハサレタリ、

官報　號外　明治二十二年十一月三日

朕祖宗ノ遺範ニ循ヒ嘉仁親王ヲ立テ、皇太子ト爲ス茲ニ之ヲ公布シテ周ク知悉セシム

明治二十二年十一月三日

宮內大臣子爵土方久元奉

讓位の宣命に於いて皇太子を定めて皇位を讓る旨を宣したまへる例

白河天皇の讓位宣命

鳥羽天皇の讓位宣命

後鳥羽天皇の讓位宣命

後陽成天皇の讓位宣命

一〇百錬抄　五　白河天皇　應德三年十一月廿六日、天皇讓位於善仁親王（堀河天皇）、先爲皇太子由載宣命、

法性寺關白記　保安四年正月廿八日壬午、此日天皇（鳥羽）有讓位第一親王夏、母今中宮（藤原璋子）、季五歲、（中略）此間仰宣命趣、其詞云、以顯仁親王（崇德天皇）可爲皇太子、今依薄德卽讓皇位、以關白藤原朝臣（忠通）攝行政夏、一如忠仁公故夏、

百錬抄　五　鳥羽天皇　保安四年正月廿八日、天皇讓位於第一親王顯仁、五、先爲皇太子之由載宣命、

三長記　建久九年正月九日丁未、秉燭以前參內、今日可有行幸于大炊御門殿、前齋院（式子內親王）御所、兼被申子細、是爲十一日讓位也、卽以此內裏可爲新帝皇居之故也、行幸以前殿下（藤原基通）、左大臣、右大臣（藤原兼雅）、土御門大納言（通親）、民部卿（經房）、別當等於鬼門（間カ）邊豫議定讓位事、（中略）大概可被用應德（白河天皇）三年例之由議定云々、

十一日己酉、今日有御讓位（後鳥羽天皇）事、（中略）次頭中將又出陣、仰宣命趣、以爲仁皇子（土御門天皇）爲皇太子、卽讓位、以關白藤原朝臣攝行政事、一如忠仁公故事、兼可止太上皇尊號幷服御物等事、如寬平九年例歟、其詞不聞、任先規記之、上卿召大內記宗業被仰宣命趣歟、

壬生家四卷之日記　慶長十六年三月廿七日丁卯、御讓位（後陽成天皇）、內辨內大臣鷹司殿信尙公、宣命

使中御門中納言資胤卿、公卿、可記、奉行職事頭中將實有朝臣、先劒璽渡御、次行幸有之、

宣命

現神止大八洲國所知須天皇我詔旨良止万宣布勅乎、親王、諸王、諸臣、百官人等、天下公民衆聞食度宣布、朕（後陽成天皇）以庸質氏天日嗣乎承傳賜倍留事、頗胥洎多歳利、菲德之身波此位仁不可堪止歎長賜比天、避皇位賜比奈牟止所念行志、以辭讓之心明禮志、以惻隱之心行仁布、隨法仁可有支政止爲氏、既吉曜良辰乎擇定氏、今日二品政仁親王（後水尾天皇）乎皇太子止定賜比、此天日嗣高座之業乎授賜布、食國乃天下之政乎平久安久仕奉止所食行須、庶事振仁風比、徧供（洪）霑惠澤志、天皇朝廷乎衆助仕奉止宣布天皇勅乎、衆聞食止宣、

慶長十六年三月廿七日

孝亮宿禰日次記　慶長十六年二月二日癸酉、依使者參、傳奏勸修寺大納言被示云、

今度立太子節會、坊官除目可有之由被仰出、女房之事三ヶ條被仰出云々、

十一日壬午、今日立太子節會可有之處、俄以停止、關白幷上卿等有御退出、諸司各退出、

廿三日甲午、大外記來臨、御讓位三月廿七日之由、內々有其催云々、

三月廿七日丁卯、今日御讓位當日也、內辨應司內大臣殿、左大將信尙公、先劒璽渡御、次行幸有之、

後淨明珠院殿記　現神止大八洲國所知須倭根子天皇我詔良止萬止勅命乎、親王、諸王、

諸臣、百官人等、天下公民衆聞食止宣、

朕（明正天皇）以薄德氏天日嗣乎承傳賜倍留事漸送年序禮利、愚昧之身波此位爾不可堪止歎長賜比天、今避皇位賜比奈牟止所念行天、那隨法爾可有岐政止爲天、紹仁親王（後光明天皇）乎皇太子止定賜比天、此天日嗣乎授賜布、衆諸此狀乎悟氏、淸直乃心持天、皇太子乎輔導岐仕奉旦、天下乎平介久令有與、但攝政藤原朝臣波朝重臣奈利、見其誠心爾幼主乎寄託志倍志、然則皇太子乃未親萬機之政間、保輔幼主天攝行政事世牟古止一如忠仁公故事世與、天下乎毛教訓直之天、各己祖乃門乎不滅須、彌高爾彌廣爾仕奉利欲繼止思愼天、無貳心之天仕奉倍止之詔乎（布カ）天皇我勅命乎、衆聞食止宣、

寬永廿年十月三日

道房公記　寬永廿年十月三日甲子、此日有御讓位（明正天皇）事、新主（後光明天皇）御年十一、御母京極局、前中

（子立親王也、）納言基音卿姉也、爲女院御

後淨明珠院殿記　寬文三年正月廿六日、今日於假殿內裏近衞右大將基熙亭、有御讓位（後西天皇）、（中略）

應神天皇先帝の崩後母后の攝政中に皇太子と爲りたまふ

現神度大八洲所知天皇我詔旨良麻勅命乎、親王、諸王、諸臣、百官人等、天下公民衆聞止宣、（食脱カ）
朕（後西天皇）以菲德天天日嗣乎承傳賜倍留事漸送年序禮利、愚庸之身波此位仁不可堪止歎長賜比天、今避皇位賜比奈牟止所念行天奈、隨法爾可有岐政止爲弖、某親王（靈元天皇諱仁親王）乎皇太子止定賜比、此天日嗣乎授賜布、以關白藤原朝臣爲攝政、衆諸此狀乎悟氏、清直乃心乎持天、皇太子乎輔導岐仕奉氏、天下乎平久令有與、又古人有言利、上多岐時爾波下苦止牟奈所聞須、故是以太上天皇止以布號毛停女、又諸乃服御乃物毛停賜比、又如此時仁當都食國乃天下之政乎平介久安久仕奉天、天皇朝廷乎衆助仕奉止宣布天皇勅乎、衆聞食止宣、

寬文三年正月廿六日

忠利宿禰記　寬文三年正月廿六日乙未、今日御讓位、劍璽渡御、（中略）午刻御讓位節會之作法相濟、劍璽渡御之儀被催也、

二　日本書紀　八仲哀天皇　九神功皇后　十應神天皇

九年春二月癸卯朔丁未（五日）、天皇忽有痛身、而明日崩、（庚辰）

十二月戊戌朔辛亥（十四日）、生譽田天皇於筑紫、（仲哀天皇九年）

三年春正月丙戌朔戊子、立譽田別皇子爲皇太子、（癸未）（三日）（應神天皇）

元年春正月丁亥朔、皇太子卽位、（庚寅）

光仁天皇先帝の崩後遺宣に依り皇太子と爲りたまふ

續日本紀　三十稱德天皇　寶龜元年八月癸巳（四日）、天皇崩于西宮寢殿、春秋五十三、左大臣從（神護景雲四）

一位藤原朝臣永手、右大臣正二位吉備朝臣眞備、參議兵部卿從三位藤原朝臣宿奈麻呂、參議民部卿從三位藤原朝臣繩麻呂、參議式部卿從三位石上朝臣宅嗣、近衞大將從三位藤原朝臣藏下麻呂等、定策禁中、立諱爲皇太子、左大臣從一位藤原朝臣永手受遺宣曰、今詔久、事卒爾爾有依天、諸臣等議天、（光仁天皇）白壁王波、諸王乃中爾年齒毛長奈利、又先帝乃功毛在故爾、太子止定天奏波、奏流麻爾宣給布止勅久止宣、

續日本紀　三十一光仁天皇　寶龜元年八月四日癸巳、高野天皇崩、群臣受遺、卽日立諱爲皇太子、（神護景雲四）（稱德）

立太子の事なくして踐祚したまへる例孝德天皇六條天皇

稱光天皇

三　日本書紀　二十四皇極天皇

四年六月庚戌（十四日）、讓位於輕皇子、（乙巳）（孝德天皇）

百錬抄　七二條天皇

永萬元年六月廿五日、讓位於第二親王順仁（六條天皇）二歲、先雖可有立坊、依主上御不豫危急、俄有此儀、二歲例今度始之、

常永入道記　應永十九年八月廿九日壬午、今日御讓位（後小松天皇）也、奉行頭右大弁藤原清長朝臣也、酉刻親王（稱光天皇舅仁親王）御方自裏松亭有渡御、出御門御裏、室町殿爲御同車有御參彼亭、公卿殿

上人少々扈從、永藤朝臣御共、無文事、束帶如恒、牛飼狩衣、雜色如恒、
親王御殿御年十二、自一昨夜有渡御裏松亭也、

椿葉記　さてたいりは、御治天卅年、政務おほしめすまゝにておりさせ給ふ、同(嚴永)十九年八月廿九日、(稱光天皇)一の宮に御くらゐゆつり申さる、御治世はもとのことくにてよろつめてたく渡らせ給、

大乘院寺社雜事記　寬正五年七月十九日

一、今日親王自日野大納言亭渡御室町殿、御一獻等在之、則入御內裏、御車庇云々、(中略)

本內裏、今者號親王御所、自酉剋於內裏節會、仙洞殿、伏見殿、號今內裏、御讓國儀每事無爲無事、珍重々々、至節會明日未剋了、

續史愚抄　三十八　後花園天皇　寬正五年七月十九日庚午、主上御年四十八、讓位於儲皇三品成仁親王無立太子事也、於東洞院殿有固關警固、次被行節會、

後法興院記　明應九年九月廿八日庚辰、未明自方々告示云、去曉寅刻主上崩御云々、無常迅速習雖不始于今、當時之傷嗟言語絕了、晚景密々參親王御方、御座所小直衣也、申入驚存之由、大內記和長朝臣申次也、則退出、

後土御門天皇　後柏原天皇

廿九日辛巳、昨今就崩御儀、侍從大納言(三條西實隆)幷勸修寺黃門(政顯)許江以使者有仰遣事等、抑今度遂以無讓位儀崩御條、更不可有先規、凡珍事也、
十月廿五日丙午、今夜踐祚云々、

二水記　大永六年四月廿九日、今日有踐祚事、薄暮參內、(中略)頃之親王(後奈良天皇知仁親王)御方渡御也、(中略)今度別殿儀依無其便、先親王渡御儀有之云云、仍劒璽渡御事不及其儀也、先例如何之由有沙汰、但當時之儀又有何事哉云云、

康雄記　弘治三年九月四日、今曉刁刻當今崩御也、御歲六十二歲、號後奈良院、
十月廿七日、(正親町天皇方仁親王)踐祚、(中略)踐祚次第略之、刻限諸卿參集、
劒璽渡御、今度依無其便被略之、但本來被安置本殿之上者、別不可及被渡申歟、

御湯殿上日記　天正十四年十一月七日御(正親町天皇)じやういあり、(中略)(後陽成天皇和仁親王)しんわうの御かたこよひより御所にならしまし候、

孝亮宿禰記　寬永六年五月十九日癸卯、就御讓位(後水尾天皇)御沙汰、自女院御所被仰出之旨勅答等有之、又武家兩御所ニ被仰出旨、兩傳奏承之、被下向江戶云々、

後奈良天皇　正親町天皇　後陽成天皇　明正天皇

覺

一、女院御所より御談合として被仰出候、主上御うしろ數年いたませられ候て、通仙院御くすりあかり候て御養生あそはされ候へとも、自然御腫物なと出候へは、俄に御養生なされかたき事に候、御灸なとあそはされ候へとも、御位にてはならさるとの事ニ候間、御讓位有り度おほしめされ候事、

一、女帝の儀くるしかるましき、さやうにも候はゝ、女一宮（明正天皇皇子内親王）に御位をあつけられ、若宮御誕生之上御讓位あるべき事、

右女院の御所より被仰出旨云々

十月廿九日庚辰、今日內親王（後和子）宣下也、

十一月八日己丑、今日御讓位被行片節會、

三　愚紳　安永八年十月廿九日己卯、今曉寅剋於源氏八景（後桃園）主上崩御之旨內々聞之、而堅固密儀不及露顯、（中略）春秋纔廿二、殊更無皇子、唯姬宮一所當春降誕、御座而已也、偏朝家大事、天下安危在此期、萬世褒貶依執柄商量歟、

十一月八日戊子、子終剋有召、所勞之間、先以右京大夫尙資令窺時義之所、皇統事、關白尙實被申出者、主上御違例被及危急、而無皇子之間、太宰帥典仁親王中御門院皇孫也、彈正尹直仁親王子、男

立太子の儀なく儲君治定ありしのみにて踐祚したまへる例　光格天皇

三世祐宮（光格天皇）九歲、兼可令入聖護院門室、當春主上爲御猶子、爲御養子以准后維子御方爲養母、可有踐祚旨、只今有勅定云々、

爲朝家大事之間、扶所勞參入、

十三日癸巳、儲君御名字內々被治定師仁云々、唐橋前大納言在家勘進云云、頗密儀也、

廿五日乙巳、今日新帝（光格）春秋九、先帝御養子、御養母准后從三位藤原仁親王子、母家女房云々、朝踐祚也、

野宮定晴日記　安永八年十月卅日庚辰、（中略）抑主上實者昨曉既及御大事給歟、

被祕之條甚不可然、而繼體之事被仰合關東之故歟、當時之形勢可痛、寶曆之度實者十二日崩給、而及廿一日無披露、今度亦如此歟、且主上無御繼嗣、尤天下之大事也、近代皇統（徽）々如縷、實ニ（不カ）堪恐歎、況於此度乎、當稱光院崩正長之度例歟、依有憚、今日不能具記、

十一月九日己丑、（中略）天明以前中山前亞（愛親）相來臨扶病出逢、被示云、今夜於御學問所、關白以別紙之趣被命、同僚各承了、予所勞之間、以中山前亞相被傳示之趣可告予旨、橋本前（實理）亞相被示告、仍來臨之由也、別紙披見之處如左、

主上御不豫被及御大切候、依無御繼體帥宮息男祐宮九歲爲御養子可有踐祚之旨、叡慮御治定被仰出候事、

以准后被定御養母候事

右承知之旨答之、

言成卿記　萬延元年七月十日、今日(祐宮)和宮儲君御治定云々、廻文到來、

祐宮追々御生長ニ付、自今日儲君御治定、來九月立親王宣下御治定被仰出、准后(藤原夙子)御方御實子、自今日御同居被仰出候事、

一、祐宮自今被稱儲君候事、

一、御次第可爲准后御方御次之事、

一、儲君ニ言上之儀、於禁中言上可然之事、

一、今明日中此所准后儲君等ニ參賀可然事、

右之通兩役列座、右大將(久我建通)被申渡候、仍申入候也、

七月十日　　忠禮(廣橋)

慶應三年正月九日、辰刻衣冠、奴袴、(註略)今日踐祚、當日恐悦(明治天皇)江申上、附御帳了、

俊克卿記　萬延元年五月十一日甲辰、兩役殿下被召候旨議奏被示、各參八景間、東上ニマワル、南面、末北上東面、關白(九條尚忠)殿被仰、被定御繼體之事、祐宮追々御成長被爲有候ニ付、當九月中立親王被爲有度、且准后御實子被仰出候思召、兩役所存被尋下者、一同無所存恐悦之旨申上了、各退、次勅問御人每於小御所御面會被尋下云々、

儲君立親王等御內慮書取一紙、一包、同上ニ付准后御實子幷准后御同居已下等別紙書取二紙、豫入內覽、無思召宜取計被命了、(體在奥、中略)

被定御繼體之事、祐宮段々御成長被爲有候付、今度被定于儲君、來九月中立親王之儀被爲有度被思食候、右之趣關東へ宜被申入候、御內慮之通被仰出度被思召候事、

五月

右中奉書切紙自筆、美濃紙上包、

御內慮之趣、關東於無御子細者、祐宮准后御實子可被仰出思食候事、

右同上

祐宮儲君御治定候者、准后御同居可被遊候、尤立親王宣下後御見合、花御殿へ御別居可被爲有御沙汰之事、

一四　日本書紀　十三　允恭天皇

五年春正月、(反正天皇)(辛亥)瑞齒(反正)別天皇崩、爰群卿議之曰、方今大鷦鷯(仁德)天皇之子、雄朝津間稚子宿禰皇子與大草香皇子、然雄朝津間稚子宿禰皇子長之仁孝、卽選吉日、跪上天皇之璽、

皇嗣未だ定まらざるに天皇崩じ又は位を去りたまひ新帝踐祚したまへる例　允恭天皇

雄略天皇

繼體天皇

元年(壬子)冬十有二月、妃忍坂大中姬命、苦群臣之憂吟、而親執洗手水、進于皇子前、仍啓之曰、大王辭而不卽位、位空之、既經年月、群臣百寮愁之不知所爲、願大王從群望、强卽帝位、(中略)卽日捧天皇之璽符、再拜上焉、皇子曰、群卿共爲天下請寡人、寡人何敢遂辭、乃卽帝位、是年也太歲壬子、

日本書紀　十三安康天皇　三年(丙申)秋八月甲申朔壬辰(九日)、天皇爲眉輪王見弑、

日本書紀　十四雄略天皇　三年(安康天皇)冬十月癸未朔、天皇恨穴穗天皇曾欲以市邊押磐皇子傳國、而遙付囑後事、乃使人於市邊押磐皇子、陽期狹獵、(中略)於是大泊瀨天皇彎弓驟馬、而陽呼曰猪有、卽射殺市邊押磐皇子、(中略)十一月壬子朔甲子(十三日)、天皇命有司、設壇於泊瀨朝倉、卽天皇位、遂定宮焉、

日本書紀　十七繼體天皇　八年(丙戌)冬十二月己亥(八日)、小泊瀨天皇崩、元無男女、可絕繼嗣、壬子(二十一日)、大伴金村大連議曰、方今絕無繼嗣、天下何所繫心、自古迄今、禍由斯起、今足仲彦(仲哀)天皇五世孫、倭彦王、在丹波國桑田郡、請試設兵仗、夾衛乘輿、就而奉迎、立爲人主、大臣大連等一皆隨焉、奉迎如計、於是倭彦王遙望迎兵、懼然失色、仍遁山壑不知所詣、

元年(丁亥)春正月辛酉朔甲子(四日)、大伴金村大連更籌議曰、男大迹王性慈仁孝順、可承天緒、冀慇懃勸進、紹隆帝業、物部麁鹿火大連、許勢男人大臣等僉曰、妙簡枝孫、賢者唯男大迹王也、丙寅(六日)、遣臣連等、持節以備法駕、奉迎三國、夾衛兵仗、肅整容儀、警蹕前驅、奄然而至、於是男大迹天皇晏然自若、踞坐胡床、齊列陪臣、旣如帝坐、持節使等由是敬憚、傾心委命、冀盡忠誠、然天皇意裏尙疑、久而不就、適知河內馬飼首荒籠密奉遣使、具述大臣大連等所以奉迎本意、留二日三夜、遂發、乃喟然而歎曰、懿哉馬飼首、汝若無遣使來告、殆取嗤於天下、世云勿論貴賤、但重其心、蓋荒籠之謂乎、及至踐祚、厚加荒籠寵待、甲申(十二日)天皇行至樟葉宮、二月辛卯朔甲午(四日)、大伴金村大連乃跪上天子鏡劍璽符再拜、男大迹天皇謝曰、子民治國重事也、寡人不才、不足以稱、願請廻慮擇賢者、寡人不敢當、大伴大連伏地固請、男大迹天皇西向讓者三、南向讓者再、大伴大連等皆曰、臣伏計之、大王子民治國最宜稱、臣等爲宗廟社稷計不敢忽、幸藉衆願、乞垂聽納、男大迹天皇曰、大臣大連將相諸臣咸推寡人、寡人敢不乖、乃受璽符、是日卽天皇位、

宣化天皇

欽明天皇

日本書紀　十八宣化天皇　二年十二月(安閑天皇)(乙卯)(安閑)勾大兄廣國押武金日天皇崩無嗣、群臣奏上劍鏡於武小廣國(宣化天皇)押盾尊使卽天皇之位焉、

日本書紀　十九欽明天皇　四年冬十月(宣化天皇)(己未)(宣化)、武小廣國押盾天皇崩、皇子天國(欽明)排開廣庭天皇令

用明天皇
崇峻天皇
推古天皇
舒明天皇

群臣曰、余幼年淺識、未閑政事、山田皇后明閑百揆、請就而決、山田皇后怖謝曰、妾蒙恩寵、山海詎同、萬機之難、婦女安預、今皇子者、敬老慈少、禮下賢者、日中不食以待士、加以幼而穎脫、早擅嘉聲、性是寬和、務存矜宥、請諸臣等、早令登位光臨天下、冬十二月庚辰朔甲申、天國排開廣庭皇子卽天皇位、

日本書紀　二十一用明天皇　十四年秋八月、(敏達)淳中倉太珠敷天皇崩、九月甲寅朔戊午(五日)、天皇卽天皇位、

日本書紀　二十一崇峻天皇　(用明天皇)二年夏四月、(丁未)(用明)橘豐日天皇崩、(中略)八月癸卯朔甲辰(二日)、炊屋姬尊與群臣勸進天皇卽天皇之位、

日本書紀　二十二推古天皇　豐御食炊屋姬天皇、(中略)卅九歲當于泊瀨(崇峻)部天皇五年十一月、天皇爲大臣馬子宿禰見殺、嗣位既空、群臣請淳中(敏達)倉太珠敷天皇之皇后額田部皇女、以將令踐祚、皇后辭讓之、百寮上表勸進至于三、乃從之、因以奉天皇璽印、冬十二月壬申朔(八日)己卯、皇后卽天皇位於豐浦宮、

日本書紀　二十三舒明天皇　豐御(推古)食炊屋姬天皇廿九年、皇太子豐聰耳尊薨、而未立皇太子、以卅六年三月天皇崩、九月葬禮畢之、嗣位未定、當是時蘇我蝦夷臣爲大臣、獨欲定嗣位、顧

畏群臣不從、則與阿倍麻呂臣議而聚群臣饗於大臣家、食訖將散、大臣令阿倍臣語群臣曰、今天皇旣崩無嗣、若急不計、畏有亂乎、今以詆王爲嗣、天皇臥病之日、詔田村(舒明天皇)皇子曰、天下大任、本非輙言、爾田村皇子愼以察之、不可緩、次詔山背大兄王曰、汝獨莫諠讓、必從群言、愼勿違、則是天皇遺言焉、今誰爲天皇、時群臣嚮之無答、亦問之、非答、强且問之、於是大伴連進曰、旣從天皇遺命耳、更不可待群言、阿倍臣則問曰、何謂也、開其意、對曰、天皇曷思歟、詔田村皇子、曰天下大任也、不可緩、因此而言、皇位旣定、誰人異言、時采女臣摩禮志、高向臣宇摩、中臣連彌氣、難波吉士身刺四臣曰、隨大伴連言更無異、許勢臣大麻呂、佐伯連東人、紀臣鹽手三人進曰、山背大兄王是宜爲天皇、唯蘇我倉麻呂臣更名雄當、獨曰、臣也當時不得便言、更思之後啓、爰大臣知群臣不和、而不能成事退之、先是大臣獨問境部摩理勢臣曰、今天皇崩無嗣、誰爲天皇、對曰、擧山背大兄爲天皇、是時山背大兄居於斑鳩宮、漏聆是議、卽遣三國王、櫻井臣和慈古二人、密謂大臣曰、傳聞之、叔父以田村皇子欲爲天皇、我聞此言、立思矣、居思矣、未得其理、願分明欲知叔父之意、於是大臣得山背大兄之告而不能獨對、則喚阿倍臣、中臣連、紀臣、河邊臣、高向臣、采女臣、大伴連、許勢臣等、仍曲擧山背大兄之語、旣而便且謂大夫等曰、汝大夫等、共詣於斑鳩宮、當啓山背大兄王曰、賤臣何之獨輙定嗣位、唯擧天皇之遺詔、以

告于群臣、群臣並言、如遺言、田村皇子自當嗣位、更詎異言、是群卿言也、特非臣心、但雖有臣私意、而惶之不得傳啓、乃面日親啓焉、爰群大夫等受大臣之言、共詣于斑鳩宮、使三國王、櫻井臣、以大臣之辭、啓於山背大兄王、時大兄王使傳問群大夫等曰、天皇遺詔奈之何、對曰、臣等不知其深、唯得大臣語狀稱、天皇臥病之日、詔田村皇子曰、非輕輙言來之國政、是以爾田村皇子愼以言之、不可緩、次詔大兄王曰、汝肝稚而勿諠言、必宜從群言、是乃近侍諸女王及采女等悉知之、且大王所察、於是大兄王且令問之曰、是遺詔也、專誰人聆焉、答曰、臣等不知其密、既而更亦令告群大夫等曰、愛之叔父勞思、非一介之使、遣重臣等而敎覺、是大恩也、然今群卿所導天皇遺命者、少々違我之所聆、吾聞天皇臥病、而馳上之侍于門下、時中臣連彌氣自禁省出之曰、天皇命以喚之、則參進向于閤門、亦栗隈采女黑女迎於庭中引入大殿、於是近習者栗下女王爲首、女孺鮪女等八人、幷數十人侍於天皇之側、且田村皇子在焉、時天皇沈病不能覩我、乃栗下女王奏曰、所喚山背大兄王參赴、則天皇起臨之、詔曰、朕以寡薄久勞大業、今曆運將終、以病不可諱、故汝本爲朕之心腹、愛寵之情不可爲比、其國家大基是非朕世、自本務之、汝雖肝稚愼以言、乃當時侍之近習者悉知焉、故我蒙是大恩、而一則以懼、一則以悲、踊躍歡喜、不知所如、仍以爲、社稷宗廟重事也、我眇少以不賢、何敢當焉、當是時思欲語叔父及群卿等、然未有可導之時、於今非言耳、吾曾將訊叔父之病、向京而居豐浦寺、是日天皇遣八口采女鮪女、詔之曰、爲汝叔父大臣常爲汝愁言、百歲之後、嗣位非當汝乎、故愼以自愛矣、既分明有是事、何疑也、然我豈餐天下、唯顯聆事耳、則天神地祇共證之、是以冀正欲知天皇之遺勅、亦大臣所遣群卿者、從來如嚴矛（嚴矛、此云伊箇之保虛、）取中事而奏請人等也、故能宜白叔父、既而泊瀨仲王、別喚中臣連、河邊臣、謂之曰、我等父子並自蘇我出之、天下所知、是以如高山恃之、願嗣位勿輙言、則令三國王、櫻井臣、副群卿而遣之曰、欲聞還言、時大臣遣紀臣、大伴連、謂三國王、櫻井臣曰、先日言訖、更無異矣、然臣敢之輕誰王也、重誰王也、於是數日之後、山背大兄亦遣櫻井臣、告大臣曰、先日之事陳聞耳、寧違叔父哉、是日大臣病動、以不能面言於櫻井臣、明日大臣喚櫻井臣、卽遣阿倍臣、中臣連、河邊臣、小墾田臣、大伴連、啓山背大兄言、自磯城嶋宮御宇天皇（欽明）之世、及近世者、群卿皆賢哲也、唯今臣不賢而遇當乏人之時、誤居群臣上耳、是以不得定基、然是事重也、不能傳導、故老臣雖勞、面啓之、其唯不誤遺勅者也、非臣私意、既而大臣傳阿倍臣、中臣連、更問境部臣曰、誰王爲天皇、對曰、先是大臣親問之日、僕啓既訖之、今何更亦傳以告耶、乃大忿而起行之、適是時、蘇我氏諸族等悉集、爲嶋（馬子）大臣造墓而次于墓所、爰摩理勢臣壞墓所之廬、退蘇我田家而不仕、時大臣慍之、遣身狹君勝牛、錦織

首赤猪而誨曰、吾知汝言之非、以干支之義不得害、唯他非汝是、我必忤他從汝、若他是汝非、我當乖汝從他、是以汝遂有不從者、我與汝有瑕、則國亦亂、然乃後生言之、吾二人破國也、是後葉之惡名焉、汝愼以勿起逆心、然猶不從、而遂赴于斑鳩、住於泊瀨王宮、於是大臣益怒、乃遣群卿、請于山背大兄曰、頃者摩理勢違臣匿於泊瀨王宮、願得摩理勢、欲推其所由、爰大兄王答曰、摩理勢素聖皇所好、而暫來耳、豈違叔父之情耶、願勿瑕、則謂摩理勢曰、汝不忘先王之恩而來、甚愛矣、然其因汝一人、而天下應亂、亦先王臨沒、謂諸子等曰、諸惡莫作、諸善奉行、余承斯言、以爲永戒、是以雖有私情、忍以無怨、復我不能違叔父、願自今以後勿憚改意、從群而无退、是時大夫等且誨摩理勢臣之曰、不可違大兄王之命、於是摩理勢臣進無所歸、乃泣哭更還之、居於家十餘日、泊瀨王忽發病薨、爰摩理勢臣曰、我生之誰恃矣、大臣將殺境部臣、而興兵遣之、境部臣聞軍至、率仲子阿椰出于門、坐胡床而待、時軍至乃令來目物部伊區比以絞之、父子共死、乃埋同處、

(己丑)元年春正月癸卯朔丙午(四日)、大臣及群卿共以天皇之璽印獻於田村皇子、則辭之曰、宗廟重事矣、寡人不賢、何敢當乎、群臣伏固請曰、大王先朝鍾愛、幽顯屬心、宜纂皇綜光臨億兆、卽日卽天皇位、

日本書紀

二十四　皇極天皇　(辛丑)十三年十月、(舒明)息長足日廣額天皇崩、(壬寅)元年春正月丁巳朔辛未(十五日)、(皇極天皇)皇后卽天皇位、〔第三卷三五頁參照〕

續日本紀

四　元明天皇　慶雲三年十一月、(文武)豐祖父天皇不豫、始有禪位之志、天皇謙讓、固辭不受、四年六月、豐祖父天皇崩、庚寅(二十四日)、天皇御東樓、詔召八省卿及五衛督率等、告以依遺詔攝萬機之狀、秋七月壬子(十七日)、天皇卽位於大極殿、詔曰、(下略)

三代實錄

四十四　陽成天皇　元慶八年二月壬辰朔、四日乙未、先是天皇手書、送呈太政大臣曰、朕近身病數發、動多疲頓、社稷事重、神器叵守、所願速遜此位焉、宸筆再呈、旨尤難忤、是日天皇出自綾綺殿、遷幸二條院、二品行兵部卿本康親王、右大臣從二位兼行左近衛大將源朝臣多、大納言正三位兼行右近衛大將太皇太后宮大夫陸奧出羽按察使藤原朝臣良世、中納言從三位在原朝臣行平、中納言從三位兼行左衛門督源朝臣能有、參議刑部卿正四位下兼行近江守忠貞王、參議正四位下行伊豫權守源朝臣冷、參議正四位下行右衛門督兼近江權守藤原朝臣諸葛、參議正四位下行皇太后宮大夫兼備中守藤原朝臣國經、參議正四位下行左近衛中將藤原朝臣有實、扈從文武百官供奉如常、但少納言不奏給鈴之狀、諸衞不稱警蹕、神璽寶劍鏡等依例相從、驛鈴傳符內印管鑰等、留置承明門內東廊、令參議

皇極天皇
元明天皇
光孝天皇

正四位下行左大辨兼播磨守藤原朝臣山陰、從五位上行少納言兼侍從藤原朝臣諸房、左少辨正五位下安倍朝臣清行等留守焉、會文武百官於院南門、詔曰、現神止大八洲御宇日本根子天皇加御命良萬宣御命乎、親王等、王等、臣等、百官人、天下公民衆聞給止宣、食國乃政乎永遠聞食倍乎、喜御病時々發己止有天、萬機滯己止久成奴、天神地祇之祭乎毛闕怠己止有奈牟加止危美畏利念保之天皇位乎讓遥給天、別宮爾遷御坐奴止宣御命乎、親王等、大臣等聞給部承給天、恐美畏母國典爾准天、太上天皇之尊號乎進留、又皇位波一日母不可曠、一品行式部卿親王（光孝天皇時康親王）波、諸親王中爾貫首爾毛御坐、又前代爾無太子時爾波、如此老德乎立奉之例在、加以御齡母長給比、御心母正直久、慈厚久、愼深御坐天、四朝爾佐仕給天、政道乎母熟給利、百官人、天下公民末、天謳歌所皈、咸無異望、故是以天皇璽綬乎奉天、天日繼位爾定奉良乎、久親王等、王等、臣等、百官人、天下公民衆聞給部止宣、中納言在原朝臣行平於庭誥之、百辟群寮並立侍焉、事畢、王公已下拜舞而退、於是以神璽寶鏡劍等、付於王公、卽日親王公卿歩行、奉天子神璽寶鏡劍等今（光孝）皇帝於東二條宮、百官諸仗、圍繞相從、二條院與二條宮、相去東行數百歩、

三代實錄　四十五　光孝天皇　元慶八年二月四日乙未、太上天皇遷御二條院、遜皇帝位焉、于

時天皇在東二條宮、親王公卿奉天子璽綬神鏡寶劍等、天皇再三辭讓、曾不肯受、二品行兵部卿本康親王起座跪奏言、歷數攸在、謳歌是歸、昔者漢文三讓雖高、猶當大橫之籙、遂應代邸之迎、伏願、陛下在此樂推、幸聽於群臣矣、五日丙申、親王公卿引文武百官、奉迎天皇、卽日鸞輿入御東宮、親王公卿扈從、

愚管抄　三光孝　扨清和ハ十八年タモチテ、廿六ニテ、又太子ノ陽成院ノ九歳ノ御歳御讓位アリテ、卅九ニテ御出家アリテ、卅一ニテウセタマイニケリ、コノ陽成院九歳ニテクライニツキテ八年、十六マデノ間ニ、昔ノ武烈天皇ノ如クナノメナラズアサマシクオハシマシケレバ、ヲヂニテ昭宣公基經ハ攝政ニテ、諸ノ群議アリテ、コレハイカバハ國王トテ國ヲモオサメヲハシマスベキトテナム、ヲロシマイラセントテ、ヤウヤウニサダメアリケルニ、仁明ノ御子ニテ時康ノ親王トテ、式部卿宮ニテヲワシマシケルヲ、ムカヘトリテクライニツケマイラセラレケリ、コレヲ光孝天皇ト申也、

兵範記　久壽二年七月廿三日戊辰、午刻天皇（近衛）崩於近衛殿、春秋十七歳、

廿四日己巳、早旦前藏人頭光賴朝臣爲法皇（鳥羽）御使、以第四親王雅仁（後白河天皇）可令登用之由被申殿（藤原忠通）下、卽同朝臣、新帝雜事依院宣申行、殿下且任先例、且隨當時便、被評定之、（中略）次殿下召

御裝束令昇給、出御晝御座、次藏人源長定、高忠、依殿下仰、晝御帳間上格子、只一間許上也、卷御簾、件一間
副母屋柱立燈臺供燈、殿下令安劍璽於御帳中南端給、次令候晝御座東頭給、次召頭辨光外不上御簾格子等
賴朝臣、光賴朝臣經簀子參長押下、卽奉仰召近將、右近中將師仲朝臣自簀子參進、依殿下
御命、進著御帳南頭、褰御几帳帷、取寶劍退下簀子、次左近中將成雅朝臣同參上、如初依仰
參進、取神璽退下、(註略)兩將自南簀子東行、殿下令扈從給、(註略)先是公卿列立、爲先下
薦前行、主殿官人炬松明、在近將左右、左大將內大臣在御劍前、殿下令候劍璽後給、左右次
將以下相副之、左右衞門兵衞等供奉如行幸儀、漏刻時簡杭在後陣中、大刀契鈴印同相具
之、次外記史官掌召使等、各以扈從、(中略)入自高松殿四足門、道間掃部供筵道、主殿每辻引暢、禁制雜人、至于
新帝宮、右衞門留門外、兵衞在中門外、近衞入中門、公卿列立中門外、筵道經四足門至于中
門內、敷留廊南沓脫下、次將捧劍璽、殿下引率之、令昇堂上給、左大將以下在庭、劍璽經中門
廊幷對代南庇及透渡殿、參進寢殿南面、置南庇御座左右、次將退去、殿下令候簀子給、此間堂上不敷筵道
新帝出御晝御座、引直衣、直被勅關白詔、殿下令唯稱給、便被仰藏人以下事歟、

神皇正統記

第七十七代、第四十二世、後白河院、諱は雅仁、(中略)近衞は、鳥羽の上皇鍾愛の御子なりしかと、早世しまし〳〵ぬ、崇德の御子重仁の親王つかせ給へかりしに、本より御中心よからすやみぬ、上皇おほしめしわつらひけれと、此御門(後白河)たゝせたまふ、立太子もなくて、すくに居させ給ふ、

後堀河天皇

百錬抄

十二　順德院　承久三年七月八日庚寅、(中略)今日一院(後鳥羽上皇)幷修明門院、於鳥羽殿御出家云々、主上(仲恭)密々渡御九條殿云々、九日辛卯、持明院(守貞親王)入道宮御子、御年十歲、有御踐祚事、關東申行之、

後嵯峨天皇

增鏡

二　新島もり　新院(順德上皇)も佐渡國にうつらせ給、まことや七月九日(承久三年)、御門(仲恭)をもおろしたてまつりき、この卯月かとよ、御讓位とてめでたかりしに、夢のやうなり、

增鏡

三　ふぢ衣　このみだれいできて、一院(後鳥羽上皇)の御ぞうはみなさま〴〵にさすらへ給ひぬれば、をのづからちいさきなど殘給へるも世にさしはなたれて、さりぬべき君もおはしまさぬにより、あづまよりのをきてにて、かの入道の御子(後堀河)の十になり給を、承久三年七月九日にはかに御位につけたてまつる、

增鏡

四　三神山　九日(仁治三年正月)のあかつきかくれ(四條天皇)させ給ぬとてのゝしりあへる、いとあさましともいふばかりなし、(中略)いまだ御つぎもおはしまさず、又御はらからの宮などもわたらせ給はねば、世中いかになりゆかんずるにかと、たどりあへるさまなり、さて

しもやはにて、あづまへぞつげやりける、(藤原頼經)(道家)將軍は大殿の御子、今は大納言殿ときこゆ、御うしろみは承久にのぼりたりし泰時朝臣なり、時房と一所にて小弓いさせ、酒もりなどして、心とけたる程なりけるに、京よりのはしり馬といへば、なに事ならんとおどろきながら、つかひめしよせてきくに、いとあさまし、さりとてあるべきならねば、そのむしろよりやがて神事はじめて、若宮のやしろにてくじをぞとりける、そのほどみやこには、いとうかびたる事ども、心のひき〳〵いひしろふ、(中略)あづまの使、(中略)城介義景といふもの、(中略)阿波(土御門上皇)の院の御子(後鳥羽天皇邦仁親王)御位にと申ていでぬ、

平戸記　仁治三年正月十九日壬寅、(中略)仰云、東使到來、然而其仁未聞、只今之間、其使參一條云々、事定者、今夜卽可被行其禮之由、兼以被議定也、予(平經高)申云、今夜已及深更了、被行□之處、春夜易曙、若及白晝、劍璽令渡大路給之條如何、能可有御案歟、仰云、此事尤可然、不思寄也、誠猿方可候歟、近代公事自白晝被行事、猶及晚更、此疑可然、以其由且可申一條歟云々、所被仰之事太多、雖然不能記錄、其後罷出、歸路參左相門、自一條殿未歸給云々、暫與基邦朝臣言談之處、大府(藏人頭)卿密々送消息云、依飛脚之聞參候一條殿、東使只今參入、阿波院宮可宜之由令申上之由、粗所聞也云々、其後退出、于時子刻也、於途中相逢頭左中辨、同告此由、自一條殿馳參殿下云々、

抑此事、關東計申之條、雖知末世之至極、可悲々々、十善帝位之運、更非凡夫愚賤之所思、而依令顧時議給歟、一旦雖被仰合、憖以凡卑之下愚計立帝位之條、未曾有事也、我朝者神國也、不似異域之風、自玆天地開之後、國常立尊以降、皆先主令計立給、至不慮之事者非此限、至光仁光孝二代、群臣議定歟、然而其趣偏爲安天下也、今非群議、以異域蠻類之身、計申此事之條、宗廟之冥慮如何、尤可恐々々、其殃定不廻踵歟、凡重事出來之時、如愚意者、只決群議、爲先天下安全之計、可被奉立之、以其趣具可被仰遣關東也、此上不相叶其意趣者、善惡可被計行、天下者重器也、雖片時不可空王位之故、如此相計之由被仰遣、何可有子細哉、其上有不受事者、又非可愁思食、非可痛思食、只可被奉任神宮八幡之神慮事也、今自相(容カ)如此御計之間、重事彌重疊、御案之趣皆以相違歟、可悲々々、彼宮者祖母承明門院令扶持申給、故通方卿雖奉養育、事以變改之後、所令坐彼院給也、天下事出來之後、以可執權之意趣、前內府(定通公)頻以發營、連々以飛脚示遣關東云々、加之御緣邊之輩、關東之有緣有數、隨彼內府之妻者、泰時重時朝臣等之姉妹也、就中重時者有一腹之好、仍九日已後偏以結構、今果而不默止、可然之儀也、勿論々々、但帝王之位、以凡夫

之身結搆之條、雖末代日月未墜地、定其災不空歟、道路可以目歟、前內府執權之世、今一重可衰徵歟、何爲之、所詮人世之運至極之故歟、悲哉々々、

後聞、頭左中辨定嗣朝臣自一條殿爲御使馳參、殿下今夜卽可被遂行之由令申給云々、然而如予申狀令申給云々、仍今夜不被行其禮、明日可被行云々、殿下自內裏御參猪隈入道殿、其後御參一條入道殿、被議此間事云々、然而入道殿被仰云、於今者非口入之限、只被仰前內府可被計給之由令申給云々、依之以頭辨爲御使、條々被仰遣云々、每事計申云々、人口之(云カ)、至今夜事如此、何況於將來哉、世之權勢只可在彼云々、關東使二人差進、十四日出國、六ケ日京著云々、自勢多先進使者云々、或說、先遣使者於前內府許云々、入夜使者兩人參一條殿、被召御前云々、其後向相國禪門許、卽面謁云々、兩所共以不請之氣炳焉云々、東使頻答以笑云々、但於今者何詮哉、愚案、文始終定無其儀歟、兩所ハ凡皆存知之故也、

廿日癸卯、關東飛脚之後、以頭左中辨定嗣朝臣、受禪事、去夜卽可有沙汰之由、自入道殿被申云々、而夜已及深更了、此後有沙汰之處、春夜易曙、劍璽出御之後、天曙者、途中白晝之條如何之由、殿下令申給云々、夜前予執申之趣也、仍去夜無沙汰云々、其後殿下自內裏先令參猪隈入道殿給、其後御參一條殿、受禪之間事有議定云々、其儀今夜可被行之由被仰下

云々、(中略)

今夜御元服之後、渡御冷泉萬里小路四條大納言第、(件亭兼日奉仰、其事藏人佐時繼奉行云々、(中略)及深更被渡劍璽、途中深泥、人々舐鼻、每事違例、不及子細、

滿濟准后日記　應永卅五年七月

十一日、今日條々重事、自管領申入旨等在之、仍御會以前密々申入之了、一、內裏(稱光)樣御惱以外、何樣御事モ出來時者、奉行以下事兼可被定置歟事、一、新帝御事誰人ニテ可有御座哉事、同兼能々可被申談關白事、(中略)

內裏樣御惱事幷新帝御事等、以時房卿、經成卿、親光朝臣三人可申談執柄(二條持基)之由被仰間、則此由就近所召時房卿一人、室町殿仰樣、明旦申入執柄旨具仰聞了、

十二日、昨日重事等尙々可被仰談、今日昨日兩條被仰談執柄處、彼御意見趣具可相聞由被仰、仍時房卿以下三人祗候、申樣、執柄御返事、新帝御事、誠爲御用意內々可被定申條尤可爲珍重候、先何樣仙洞へ有御奏聞、依勅答趣重可被仰談歟云々、

十三日、今日午以後入寺、今日伏見殿宮(後花園天皇、遐仁王)十歲自西南渡御若王子坊、密々儀也、內々室町殿樣如此被計申了、其故ハ內裏樣御惱以外御大事也、萬一何樣御事モ出來時ハ臨期可有

御纏頭歟、旁又依有御怖畏子細、竊奉入若王子也、警固事、赤松左京大夫入道承了、強不及自身參也、御隱密故歟、自西南渡御之儀、御張輿、御輿舁等自管領召進之了、女房出行體ニテ入御云々、御膳等事、一向若王子僧正忠意沙汰之、不及公儀也、

十六日、今日自室町殿仙洞へ御申子細在之、新主事何樣被定申哉、內裏樣御事如醫師申者、近日御大事必可出來云々、定臨期可有御仰歟、仍內々被申云々、此旨執柄被院參、御申尤可宜旨、以時房卿、經成卿、親光朝臣三人被申執柄也、仍執柄院參シテ被申入處、仙洞聊御窮屈之折節也、御對面等可有如何哉、重事之間、以申次仁御一奏聞不可然云々、仍以書狀被申入處、勅答之旨、以伏見殿宮爲御猶子可被定申之由被載勅書則彼勅書自執柄以時房卿被進室町殿、珍重之由御申云々、次自室町殿以經成卿被申仙洞、伏見殿宮御方自去十三日奉移若王子坊了、其子細聊被聞食事共在之、爲御用心也、此旨最前ニ可被申入處、新主事未無被仰出旨時分遮而如此之由被申入條、定此御內心歟之由叡慮モヤノ故ニ、于今御斟酌也キ、已以此宮被定申之由被仰下ニ付テ只今御申云々、經成卿依輕服不及院參、以書狀申入也、勅答如法御悅喜子細條々御申云々、其子細ハ此宮御事、以伏見殿御一流之儀被定申新主歟、御怖畏內々千萬處、只今爲室町殿御申樣偏被任仙洞叡慮

間、於今者旁御安堵此事也云々、勅書一見了、

廿日、今曉卯終、主上（稱光）崩御、御年廿八歲、皇子一人モ無御座、珍事々々、

廿八日、今日新主（後花園）御踐祚、自仙洞渡御三條前右府（公光）亭、御車、八葉、供奉少々、非殊御行粧云々、未宮御儀也、御裝束御半尻云々、次劍璽渡御、

椿葉記　さるほとに內裏は廿日（正長元年七月）崩御なりぬ、諡號稱光院、踐祚の事今はひし〳〵とさたまりて、禁中は觸穢なれは、三條前右府公光公の亭を點しめされて新內裏になさる、（中略）同廿九日新內裏へ渡御なる、（後小松上皇）院の御猶子の儀にて踐祚あり、よろつ舊規にかはらす、御歲十歲にならせましますめてたさも世の不思議なれは天下の口遊にてそ侍る、

後光明院御弔記　承應三甲午年九月二十日、寅刻當今（後光明）崩御、御廿一歲、御腦疱（瘡）瘡、當十四日ヨリ御疱ミユル、醫師等御藥ヲ獻ス、歷庵、道作、御疱瘡輕ク御心地モ宜シカリケル處ニ、十九日夜ヨリ俄ニ重セ玉ヒ崩御、實母ハ號京極局、園基音ノ妹、（中略）

十月九日、從江戶品川侍從高如內膳正京著、是ハ御代繼ノ儀ニ付テ被差上、

十日、高如、重宗ト伴、女院御所ヘ出仕、御代繼ノ宮、仙洞女院被思召通、花町仲（良カ）（後西天皇）仁親王女院

爲御養子踐祚、仙洞當歲ノ宮、先帝御養子ノ事、將軍家モ宜被思召ノ旨奏之、花町宮（先帝御弟、高松ノ家ヲ繼給、家名ヲ改號花町、實母櫛笥局、四條隆音姉、）御代繼ニ立給事ハ、先帝御在位ノ內、過ツル正月元日ノ御夢ニ、天ヨリ赤龍雲ニ乘テ降リ、沙門一人、主上ノ御前ニ踞テ龍ニ乘シテ天上ト奏聞ス、御心ノ內ニ不審ニ被思召立煩セ給ヘハ、沙門頻ニ天上ヲスヽメ奉ル、無是非龍ニ乘シ給フ、傍ニ西園寺右府（實永）候スト御覽アリ、又八月朔日ノ御夢ニ、赤髮ノ童子來テ、主上ノ御懷中ニ入ト御覽有テ御夢覺ル、是ヨリ御心地モ不例、供御モ常ナラス、玉體衰サセ玉フニヤ、武家傳奏淸閑寺前大納言共房、野宮前大納言定逸、並寵臣勸修寺前大納言經廣、三條中納言實敎、持明院前中納言基定ヲ被召、去年六月廿六日內裏炎上ヨリ、院御所遷幸不御快、御治世モ久シカルマシキト思召、仙洞當夏誕生ノ若宮御養子御代繼ニタテタク被思召之由、仙洞女院エ可申ト勅諚有リ、諸臣奉テ無勿體勅諚、仙洞モ被聞召、叡慮モ如何ト奏聞ス、主上モ其後ハ何トモ仰モナシ、此度崩御ニ付テ、諸卿勅諚存當リ、仙洞女院エ奏之、先帝ノ被仰置上ハ、當歲ノ若宮可有踐祚ト僉議アリ、雖然當歲ノ宮卽位有テ、攝政年久シカランモ如何ニ思召セハ、花町宮御貌モ麗シク渡セ玉ヘハ御代繼ニ立セ給ヒ、當歲ノ宮御養子十六ニ成セ給時、御位モ讓リ玉ヒ可然ト、仙洞女院思召、此旨武家エ告知セ可申ト板倉周防守ニ御內勅有リ、依之江戶エ申上、如此相定リテ高知京著ト云々、

十一日、依吉辰花町宮可有踐祚ト兼テ雖被相定、少妨有テ延引、

十一月廿八日、花町宮踐祚、

忠利宿禰日記　承應三年九月廿六日癸丑、新坂掛川之間、少內記定慶馳寄示云、去廿日主上崩御之由有聞云々、驚胸了、

十月十日丙寅、傳聞、御繼帝（體）之事、可爲花町宮（良仁親王）之由關東被申之、上使品川內膳云々、

十一日丁卯、參二條殿、仰云、花町宮（良仁親王、今年御十八才、）可有踐祚之由一定云々、

十一月廿八日甲寅、今日花町宮（御諱良仁、上皇皇子、御母故左中將隆致朝臣女、慶安元年七月十九日爲親王、同四年十一月廿五日任式部卿、今年御十七才、）於花町亭有踐祚之事、今日自仙洞被渡劍璽於花町亭、

天皇崩後皇嗣故ありて踐祚したまはずして新帝踐祚したまへる例　仁德天皇

一五　日本書紀　十一　仁德天皇

（庚午）四十一年春二月、（應神）譽田天皇崩、時太子菟道稚郞子、讓位于大鷦（仁德天皇）鷯尊未卽帝位、（中略）太子曰、我知不可奪兄王之志、豈久生之煩天下乎、乃自死焉、時大鷦鷯尊聞太子薨以驚之、從難波馳之到菟道宮、

（癸酉）元年春正月丁丑朔己卯（三日）、大鷦鷯尊卽天皇位、

顯宗天皇　齊明天皇　元正天皇

日本書紀　十五　顯宗天皇　白髮(清寧)天皇三年、（中略）夏四月、立億計(仁賢天皇)王爲皇太子、立天皇(顯宗)爲皇子、五年春正月、白髮天皇崩、是月、皇太子億計王與天皇讓位、久而不處、（中略）十二月、百官大會、皇太子億計取天皇之璽、置之天皇之坐、再拜從諸臣之位曰、此天皇之位、有功者可以處之、著貴蒙迎、皆弟之謀也、以天下讓天皇、

元年(乙丑)春正月己巳朔、大臣大連等奏言、皇太子億計、聖德明茂、奉讓天下、陛下正統當奉鴻緒、爲郊廟主、承續祖無窮之烈、上當天心、下厭民望、而不肯踐祚、遂令金銀蕃國群僚遠近、莫不失望、天命有屬、皇太子推讓、聖德彌盛、福祚孔章、在孺而勤、謙恭慈順、宜奉兄命、承統大業、制曰、可、乃召公卿百僚於近飛鳥八釣宮卽天皇位、百官陪位者皆忻忻焉、

日本書紀　二十六　齊明天皇　二十五　孝德天皇　白雉五年(甲寅)冬十月癸卯朔、皇太子(天智天皇葛城皇子)聞天皇病疾、乃奉皇祖母尊間人皇后、幷率皇弟公卿等、赴難波宮、壬子(十日)、天皇崩于正寢、（中略）十二月壬寅朔己酉(八日)、（中略）是日皇太子奉皇祖母尊、遷居倭河邊行宮、

續日本紀　七　元正天皇　日本(元正)根子高瑞淨足姬天皇後五年十月崩、

日本書紀　二十六　齊明天皇　天萬(孝德)豐日天皇位於飛鳥板蓋宮、

元年(乙卯)春正月壬申朔甲戌(三日)、(齊明天皇)皇祖母尊卽天皇位、

續日本紀　六　元明天皇　靈龜(和銅八)元年九月庚辰(二日)、天皇禪位于氷高(元正天皇)內親王、詔曰、（中略）憂勞庶政、九載于玆、今精華漸衰、耄期斯倦、深求閑逸、高踏風雲、釋累遺塵、將同脫屣、因以此神器、欲讓皇(聖武天皇首親王)太子、而年齒幼稚、未離深宮、庶務多端、一日萬機、一品氷高內親王、早叶祥符、夙彰德音、天縱寬仁、沉靜婉孌、華夏載佇、謳訟知歸、今傳皇帝位於內親王、公卿百寮、宜悉祇奉以稱朕意焉、

後櫻町天皇

續日本紀　七　元正天皇　日本(元正)根子高瑞淨足姬天皇、（中略）九月庚辰(二日)(靈龜元年)、受禪卽位于大極殿、

八槐記　寶曆十二年七月十二日癸酉、主上(桃園)御病症益盛、（中略）遂以未時始崩給歟、

如夢、悲淚難止、令經春秋僅廿二給、實有死生命、絕言舌、有晏駕者、皇太姊智(後櫻町天皇)子內親王可有繼嗣有遺詔之由、關白內前、左大臣尙實、右大臣輔平、前關白道香、內大臣道前被議之、親王雖可有踐祚、幼稚五歲御之間、明正院令繼皇統給之例、且後光明院崩給御養子靈元院春秋三歲、依幼稚後西院(花町式部卿親王)以踐祚之例、親王十歲迄暫皇太姊一品智子內親王可有踐祚、當時之儀於重事者、被問將軍家治公之所存之間、主上御事深隱之、不露顯御不豫之謀也、

廿七日戊子、（中略）一品智(トシ)子內親王先帝之皇太姊、春秋廿三、被行踐祚之禮、

愚紳　寶曆十二年七月十二日癸酉、（中略）未刻斗近臣各可參御前者參入御前、龍床御殿琴碁書畫繪間、已崩御後也、只今御閇眼云々、忙然如夢、

二十日辛巳、自關白殿被仰云、主上御異例於有御變事者、雖儲（後桃園天皇）皇親王（英仁、御年五、）御繼體勿論、爲御幼稚之間、到御十歲比萬天、一品智子內親王（號緋宮、主上姉宮也、櫻町院第二皇女、御母青綺門院、）可有御在位旨、此日有勅定云々、女皇之儀、明正院已來事也、

一六　日本書紀　十五　仁賢天皇

（清寧天皇三年カ）二年夏四月、遂立億計（仁賢）天皇爲皇太子、事具弘計天皇紀、五年、白髮（清寧）天皇崩、天皇（顯宗）以天下讓弘計天皇、爲皇太子如故、事具弘計天皇紀也、

一代要記　甲　清寧天皇　太子

億計、天皇三年四月立之、

一代要記　甲　顯宗天皇　太子

億計、如元、

日本書紀　二十四　皇極天皇

（乙巳）四年六月庚（十四日）戌、讓位於輕皇子、立中大兄（孝德天皇）爲皇太子、

革命勘文　天智天皇者息長（舒明）足日廣額天皇之太子也、讓位於母天豐（皇極）財重日足姬天皇及舅天萬豐日（孝德）天皇廿一年間、猶爲太子攝萬機、

日本書紀　二十七　天智天皇

天命開別天皇、息長足日廣額天皇太子也、母曰天豐財重日足姬天皇、天豐財重日足姬天皇四年、讓位於天萬豐日（孝德）天皇、立天皇爲皇太子、天萬豐日天皇後五年十月崩、明年、皇祖母尊（齊明天皇）卽天皇位、七年七月丁（二十四日）巳崩、皇太子素服稱制、

一代要記　甲　孝德天皇　太子

中大兄、舒明第一子、天皇元年六月先帝立之、

一代要記　甲　齊明天皇　太子

中大兄、如元、

續日本紀　九　聖武天皇　天璽國押開豐櫻彥天皇、（中略）和銅七年六月立爲皇太子、于時年十四、

續日本紀　六　元明天皇　和銅七年六月庚（二十五日）辰、（聖武天皇）皇太子加元服、

靈龜元年九月庚（二日）辰、天皇禪位于氷高內（元正天皇）親王、詔曰、（中略）以此神器欲讓皇（聖武天皇）太子、而年齒幼稚、未離深宮、（中略）今傳皇帝位於內親王、

續日本紀　九　元正天皇　神龜元年二月甲（四日）午、天皇禪位於皇（聖武天皇）太子、

一代要記　甲　元明天皇　（和銅）七年甲寅六月二十八日庚辰、以豐櫻彥（聖武天皇）親王爲太子、年十四、

後桃園天皇の儲君に治定あり、次代後櫻町天皇の皇太子と爲りたまふ

十歲以下にて皇太子と爲りたまへる例　譽田別尊　小泊瀨稚鷦鷯尊

一代要記　甲元正天皇　太子

豐櫻彥

一代要記　甲聖武天皇　天瑞國押開豐櫻彥、文武太(皇)子、二代東宮、

八槻記　寶曆九年正月十八日庚子、參內若(英仁親王)宮二歲、來五月可有立親王宣下、自今可稱儲君被仰定、

知音卿記　明和五年二月十九日戊寅、今日立太子節會、英仁親(後桃園天皇)王、先帝(桃園)第一皇子、御母准后(藤原富子)女御、寶曆八年七月二日降誕、(中略)同九年正月十八日爲儲君、(中略)明和五年二月十九日立皇太子、

執次詰所本御系譜　第百十九代後桃園院、治十年、諱英仁、桃園院皇子、御母恭禮門院富子、(中略)

皇年代略記　應神天皇、諱譽田、仲哀第四子、母神功皇后、(中略)

仲哀九年庚辰十二月降誕、筑紫之蚊田、神功皇后三年癸未正月丙辰朔戊(三日)子、立太子、四、

水鏡　上一　廿七代　武烈(小泊瀨稚鷦鷯尊)天皇、(中略)

次ノミカドヲ武烈天皇ト申キ、仁賢天皇ノ御子、(中略)仁賢天皇七年正月ニ東宮ニ立給フ、御年六歲、

聖武天皇皇子某皇子

恒貞親王

惟仁親王

貞明親王

敎仁親王

保明親王

續日本紀　十聖武天皇　神龜四年閏九月丁(二十九日)卯、皇子誕生焉、

十一月己(二日)亥、天皇御中宮、太政官及八省各上表、奉賀皇子誕育、幷獻玩好物、(中略)詔曰、朕賴神祇之祐、蒙宗廟之靈、久有神器、新誕皇子、宜立爲皇太子、布告百官、咸令知聞、

皇年代略記　仁明天皇　天長十年二月卅日、立恒貞親王爲皇太子、九、

三代實錄　一清和天皇　天皇諱惟仁、文德天皇之第四子也、(中略)嘉祥三年歲在庚午三月廿五日癸卯、生天皇於太政大臣東京一條第、十一月廿五日戊戌、立爲皇太子、于時誕育九月也、

三代實錄　三十陽成天皇　天皇諱貞明、先太上(清和)天皇之第一子也、母皇太后(高子)、贈太政大臣正一位藤原朝臣長良之女也、后兄右大臣藤原朝臣基經、初夢、后露臥庭中、苦腹脹滿、頃之腹潰、氣昇屬天、卽便成日、其後后以選入掖庭、遂有身、去貞觀十年十二月十六日乙亥、生帝於染殿院、十一年二月一日、天皇立爲皇太子、誕育三月矣、

日本紀略　宇多天皇　寬平五年四月二日庚午、詔敦仁親(醍醐天皇)王爲皇太子、卽任坊官等、太子年始九歲、

日本紀略　醍醐天皇　延喜三年十一月廿日丙辰、女御藤原穩子產生第二皇子、名曰崇象、

慶賴王

寬明親王

憲平親王

守平親王

師貞親王

後改保明、

四年二月十日乙亥、今上第二子崇象親王爲皇太子、於紫宸殿宣制、太子年二、

日本紀略　醍醐天皇　延長元年（延喜二十三）四月廿九日癸酉、詔、以故文獻彥（保明親王）太子息慶賴王爲皇太子、年三、

日本紀略　朱雀天皇　朱雀院

諱寬明、醍醐天皇第十一之子也、（中略）天皇延長元年七月廿四日丙寅、誕生于右大臣藤原朝臣五條第、（中略）三年十月廿一日庚辰、爲皇太子、年三、

日本紀略　冷泉天皇　冷泉院

諱憲平、村上天皇第二之子也、（中略）天曆四年五月廿四日辛酉、誕生于丹後守藤原遠規宅、（中略）七月廿三日戊子、於外祖右大臣（藤原師輔）第立爲皇太子、

日本紀略　圓融天皇　圓融院

諱守平、村上天皇第五之子也、（中略）天德三年三月二日寅時誕生、（中略）康保四年九月一日、立爲皇太弟、年九、

日本紀略　花山天皇　花山院

諱師貞、冷泉院天皇第一之子也、（中略）安和元年十月廿六日誕生、（中略）二年八月十三日、爲皇太子、年二、

日本紀略　一條天皇　一條院

諱懷仁、圓融天皇第一之子也、（中略）天元三年六月一日壬申誕生、（中略）永觀二年八月廿七日、立爲皇太子、年五、

百錬抄　四條院　三條天皇、諱貞、居五年、

冷泉天皇第二子、（中略）寬弘八年六月十三日受禪、是日立敦成親王（後一條天皇）爲皇太子、四歲、一條院二男、

日本紀略　後一條天皇　寬仁元年八月九日甲戌、皇太子敦明親王請退儲皇、卽日立帝同胞弟敦良親王（後朱雀天皇）爲皇太弟、年九、

扶桑略記　二十九　後三條天皇　延久三年辛亥二月十日丙寅、故參議侍從源基平卿息女御息所基子誕第二皇子、（實仁親王）

四年壬子十二月八日壬午、（中略）同日以第二皇子實仁親王爲皇太子、年始二歲、

百錬抄　五　堀河院　康和五年正月十六日、皇子降誕（鳥羽院是也、）于左少辨顯隆五條宅、（中略）八月十七日、立第一親王宗仁（鳥羽天皇）爲皇太子、一歲、去正月降誕、一歲立坊、清和、冷泉二代之例也、

懷仁親王

敎成親王

敎良親王

實仁親王

宗仁親王

體仁親王

百錬抄　六崇德院　保延五年五月十八日、從三位得子誕上皇皇子、(鳥羽)體仁、近衞院也、八月十七日、立體仁親王爲皇太子、太上皇第六子、母從三位得子、美福門院也、

憲仁親王

百錬抄　七六條院　仁安元年十月十日、以憲仁親王(高倉天皇)爲皇太子、六歲、於東三條第有此事、

言仁親王

顯廣王記　治承二年十一月十二日、中宮(平德子)於六波羅亭誕生皇子、今上(高倉)一宮也云云、十二月十五日立皇太子、知仁(言)(安德天皇)親王、今日第一皇子誕生以後三十三日也、

守成親王

猪隈關白記　正治二年四月十五日、是日有立坊事、院第三御子、(後鳥羽)親王守成(順德天皇)、四歲、母範季卿女也、

懷成親王

百錬抄　十二順德院　建保六年十月十日、中宮御產、(藤原立子)皇子降誕云々、(仲恭天皇懷成親王)十一月廿六日、被行立太子節會、

秀仁親王

百錬抄　十三後堀河院　寬喜三年二月十五日、中宮誕皇子、(藤原鎭子)萬壽以降絕而無此事、衆庶悅、(中略)十月廿八日、今上第一親王爲皇太子、秀仁、(四條天皇)

久仁親王

百錬抄　十五後嵯峨院　寬元元年六月十日乙卯、自去夜有中宮(藤原姞子)御產氣也、(中略)午後皇子降誕、八月十日、今上第一皇子、(後深草天皇)久仁、有立太子事、

恒仁親王

五代帝王物語　正嘉二年八月七日、院(後嵯峨)の第六の皇子恒仁(龜山)親王春宮に立せ給ふ、御年十歲、是も大宮院(藤原姞子)の御腹也、

世仁親王

增鏡　九北野の雪　十二月(文永四年)一日ごろ、皇后宮(藤原佶子)又御產とて天下さはぐに、えもいはぬ玉のおのこみこ後宇多院むまれ給ぬ、

胤仁親王

增鏡　十あすか川　かくて今上(龜山)の若宮(後宇多天皇世仁親王)六月廿六日親王宣旨ありて、おなじき(文永五年)八月廿五日坊に居給ぬ、

富仁親王

勘仲記　正應二年四月廿五日甲戌、今日今上若宮、(伏見)(後伏見天皇胤仁親王)二歲、御母儀故五辻宰相經氏卿女、中納言典侍、立太子册命日也、

一代要記　癸花園天皇　第九十四當帝花園

諱富仁、號花園院、伏見帝第二皇子、(中略)以永仁五年七月二十六日誕焉、(中略)正安三年八月二十四日庚寅、立坊、年五歲、

恒良親王

續史愚抄　二十後醍醐天皇　元弘(建武元)四年正月廿三日壬子、今上第三皇子恆良親王御年十、或作十三謬歟、又作第五皇子、母從三位藤原朝臣廉子、立親王日欠、册爲皇太子、節會、(中略)皇年私記、春宮坊補任、歷代最要、大系圖、公卿補任、元弘記裏書、南方紀傳、或記、南紀、

朝仁親王

皇年代私記　東山院、諱朝仁、靈元院第五皇子、

慶仁親王

昭仁親王

遐仁親王

惠仁親王

統仁親王
十一歲以上二十歲以下にて皇太子と爲りたまへる例

神渟名川耳尊
大日本彦耜友尊

觀松彥香殖稻尊

天和三年二月九日立太子、御年九、

季連宿禰記　寶永五年二月十六日癸亥、（中略）今日親王御方（中御門天皇靈仁親王）今上（東山）皇子、御八才、御母櫛笥前中納言隆賀卿女、新大典侍局、（中略）有立太子之事、

立坊拜覲記　享保十三年六月十三日、（一）今日昭仁親王（靈町天皇）御歲、九立太子節會也、

八槐記　延享四年三月十五日乙巳、今日遐仁親王（桃園天皇）於小御所可有御元服也、春秋七歲、

十六日丙午、（中略）此日遐仁親王册命皇太子日也、

篤長卿記　文化六年三月廿四日甲申、今日册命立太子也、當今（光格）第五皇子、儲君親王御實母勸修寺故前大納言經逸卿女、宰相典侍婧子、諱惠仁（仁孝天皇）、十歲、爲中宮御（欣子內親王）

實麗卿記　天保十一年三月十四日乙巳、今日立太子也（孝明天皇統仁親王）、今年十歲、

皇年代略記　綏靖天皇、諱神渟（安寧）、號神渟名川耳天皇、（中略）

神武天皇廿九年己丑降誕、四十二年壬寅正月壬子朔甲寅（三日）爲太子、十四、

日本書紀　懿德天皇　大日本彦耜友天皇、磯城津彦玉手看天皇第二子也、（中略）磯城津彦玉手看天皇十一年春正月壬戌（一日）、立爲皇太子、年十六、

日本書紀　孝昭天皇　六十八年春正月丁未朔戊午（十二日）、立觀松彥香殖稻尊爲皇太子、年十廿、

日本書紀　孝元天皇　大日本根子彥太瓊天皇太子也、（中略）

天皇以大日本根子彥太瓊天皇卅六年春正月、立爲皇太子、年十九、

日本書紀　開化天皇　廿二年春正月己巳朔壬午（十四日）、立稚日本根子彥大日日尊爲皇太子、年十六、

日本書紀　崇神天皇　廿八年春正月癸巳朔丁酉（五日）、立御間城入彥尊爲皇太子、年十九、

日本書紀　垂仁天皇　四十八年夏四月戊申朔丙寅（十九日）、立活目尊爲皇太子、

日本書紀　垂仁天皇　活目入彥五十狹茅天皇、御間城入彥五十瓊殖天皇第三子也、

（中略）天皇以御間城天皇廿九年歲次壬子春正月己亥朔、生於瑞籬宮、

○本書に據りて推算するときは活目入彥五十狹茅尊の立太子の時は御年二十歲なり、

皇代記　垂仁天皇、號活目入彥五十狹茅天皇、崇神第三子、（中略）

年辛卯四月爲皇太子、年廿、或廿二、

日本足彥國押人尊

大日本根子彥國牽尊

稚日本根子彥大日日尊

御間城入彥五十瓊殖尊
活目入彥五十狹茅尊

八、

日本書紀　孝昭天皇　四（癸酉）六十八年春正月丁亥朔庚子（十四日）、立日本足彥國押人尊爲皇太子、年廿、

日本書紀　孝元天皇　大日本根子彥國牽天皇、（孝靈）大日本根子彥太瓊天皇太子也、（中略）

天皇以大日本根子彥太瓊天皇卅六年春正月、立爲皇太子、年十九、

日本書紀　孝元天皇　廿二年春正月己巳朔壬午（十四日）、立稚日本根子彥大日日尊爲皇太子、年十六、

日本書紀　開化天皇　廿八年春正月癸巳朔丁酉（五日）、立御間城入彥尊（崇神天皇）爲皇太子、年十九、

日本書紀　崇神天皇　四十八年夏四月戊申朔丙寅（十九日）、立活目尊（垂仁天皇）爲皇太子、

日本書紀　垂仁天皇　活目入彥五十狹茅天皇、御間城入彥五十瓊殖天皇（崇神）第三子也、

（中略）天皇以御間城天皇廿九年歲次壬子春正月己亥朔、生於瑞籬宮、

○本書に據りて推算するときは活目入彥五十狹茅尊の立太子の時は御年二十歲なり、

皇代記　垂仁天皇、號活目入彥五十狹茅天皇、崇神第三子、（中略）

年辛卯四月爲皇太子、年廿、或廿二、崇神廿七年庚戌正月己（己）亥朔誕生、同册八

譯語田渟中倉太珠敷尊

廐戸豐聰耳皇子

葛城皇子

草壁皇子

皇年代略記　敏達天皇、諱渟中倉太珠敷、（中略）

宣化三年戊午降誕、欽明十五年甲戌正月甲午（七日）、立太子、十七、

日本書紀　二十二　推古天皇　元年（癸丑）夏四月庚午朔己卯（十日）、立廐戸豐聰耳皇子爲皇太子、仍錄攝政、以萬機悉委焉、

上宮聖德法王帝說　（廐戸豐聰耳皇子）上宮聖德法王、又云法主王、甲午年產、壬午（推古天皇三十年）年二月廿二日薨逝也、生冊九年、少（小）治田宮爲東宮也、墓川内志奈我岡也、

○廐戸豐聰耳皇子、推古天皇三十年二月御年四十九歲にて薨じたまへるより推せば推古天皇元年四月皇太子と爲りたまへる時は、御年二十歲なり、

日本書紀　二十四　皇極天皇　四年（孝德天皇元年乙巳）六月庚戌（十四日）、讓位於輕皇子、（孝德天皇）立中大兄爲皇太子、

日本書紀　二十三　舒明天皇　十三年（辛丑）冬十月己丑朔丁酉（九日）、天皇崩于百濟宮、丙午（十八日）、殯於宮北、是謂百濟大殯、是時東宮開別皇子（葛城皇子）年十六而誄之、

○葛城皇子、舒明天皇十三年十月御年十六歲なるより推せば、孝德天皇元年六月皇太子と爲りたまへる時は御年二十歲なり、

日本書紀　二十九　天武天皇　十年（壬午）春二月庚子朔甲子（二十五日）、（中略）是日立草壁皇子尊爲皇太子、

因以令攝萬機、

本朝皇胤紹運錄　村上忠順本

第四十　天武天皇

草壁皇子

初萬機、賜長岡天皇號、

淨廣位、號日置（並）皇子、

母持統女帝、天智元壬戌年降誕、

天武十二立太子、而當皇帝登霞之時、母后持統三己丑年四月薨、二十八歲、

○草壁皇子持統天皇三年四月御年二十八歲にて薨じたまへるより推せば天武天皇十年二月皇太子と爲りたまへる時は、御年二十歲なり、

珂瑠皇子

一代要記　甲　文武天皇　（第四十二）文武天皇

天津足根大父、諱輕（珂瑠）、天武孫、草壁第二子、（中略）持統十一年丁酉二月立皇太子、八月一日甲子受禪、同日卽位、時年十五、

首親王

續日本紀　九　聖武天皇　（首親王）天璽國押開豐櫻彥天皇、（註略）天（文武）之眞宗豐祖父天皇之皇子也、（中略）和銅七年六月立爲皇太子、于時年十四、

安殿親王
恒世親王
正良親王
道康親王
成明親王

一代要記　乙　平城天皇　第五十一　平城天皇

日本根子天排國高彦尊、諱安殿、俗號奈良帝、桓武太子、（中略）延曆四年乙丑十一月二十五日爲皇太子、年十二、

日本紀略　淳和天皇　弘仁十四年四月壬寅（十八日）出自東宮遷御內裏、先立侍從從四位下恒世王爲皇太子、

天長三年五月丁卯朔、（中略）三品恒世親王薨、今上（淳和）第一皇子、（中略）年廿二、

○恒世親王天長三年五月御年二十二歲にて薨じたまへるより推せば、弘仁十四年四月皇太子と爲りたまへる時は、御年十九歲なり、

一代要記　乙　仁明天皇　第五十四　仁明天皇（註略）

日本根子天璽豐聰惠（聰）諱正良、號深草天皇、嵯峨第一皇子、（中略）弘仁元年誕生、（註略）同十四年立皇太子、時年十四、

文德實錄　一　文德天皇、諱道康、仁明天皇長子也、（中略）年十六、承和九年八月乙丑（四日）立爲皇太子、

日本紀略　村上天皇　村上天皇

居貞親王
親仁親王
尊仁親王
貞仁親王
守仁親王
熙仁親王

諱成明、醍醐天皇第十四之子也、（中略）延長四年六月二日丁亥、降誕生於桂芳坊、（中略）天慶七年四月廿二日甲子、立爲皇太子、御年十九、

日本紀略　三條天皇　三條院

諱居貞、冷泉院天皇第二子也、（中略）天皇、貞元（天延四）元年丙子月日誕生、（中略）寬和二年七月十六日、（中略）此日立爲皇太子、年十一、十

扶桑略記　二十八　後朱雀天皇　長元（長暦元）十年八月十七日、以親仁（後冷泉天皇）親王立皇太子、年十三歲、天皇太子、

扶桑略記　二十八　後朱雀天皇　寬德二年乙酉正月十六日癸酉、（中略）同日第二皇子尊仁（後三條天皇）親王立皇太子、年十二歲、

一代要記　戊　白河天皇　第七十二　白河天皇（註略）

諱貞仁、後三條第一皇子、（中略）延久元年四月二十八日甲子、於閑院立爲皇太子、年十七、

百錬抄　七　後白河院　後白河天皇諱仁、雅三年、

鳥羽院第四皇子、（中略）久壽二年九月廿三日、立第一親王守仁爲皇太子、十三、二條院是也、

一代要記　癸　伏見天皇　第九十一　伏見天皇（註略）

諱熙仁、後深艸帝第一子、(中略)文永二年七月十一日降誕、建治元年十一月五日、立皇太子、年十一、

邦治親王

一代要記　癸後二條天皇　後二條天皇(第九十三)(註略)

諱邦治、後宇多院第一子、(中略)弘安八年二月二日降誕、(中略)同年(永仁六)八月十日甲子、立太子、年十四、

邦良親王

歷代皇紀　五後醍醐天皇　皇太子

邦良親王、元惟良、

後二條第一皇子、(中略)文保二年三月九日立坊、十九、

量仁親王

皇年代略記　光嚴院、諱量仁、後伏見第一皇子、(中略)

正和二年癸丑七月九日卯時誕生、(中略)嘉曆元年七月廿四日立太子、十四、

義良親王

關城書裏書　今年延元四八月十六日、主上(後醍醐)崩于吉野行宮、御年五十二、義良親王(後村上天皇)踐祚、十二、

新葉和歌集　十六雜上　延元四年よしのゝ行宮にて、後村上院立坊有し比よめる、

前大僧正賴意

花の色鳥の聲まて時にあふ春の宮ゐそ光ことなる、

英仁親王

八槐記　明和五年二月十九日戊寅、(中略)英仁親王(後桃園天皇)春秋十一歲、立皇太子之日也、左大臣尙實奉勅被行之、

嘉仁親王

嵯峨實愛日記　明治十二年八月三十一日

一、午後二時過、柳原正二位(光愛)書狀來、今朝八時十二分權典侍愛子分娩、皇子(嘉仁親王)降誕、仍及通知云々、

二十二年十一月三日

一、今日天長節也、此日儲君嘉仁親王(大正天皇)立太子之儀所被仰出也、

二十一歲以上にて皇太子と爲りたまへる例

日本書紀　四安寧天皇　磯城津彥玉手看天皇、神渟(綏靖)名川耳天皇太子也、(中略)天皇以神渟名川耳天皇廿五年立爲皇太子、年廿一、

磯城津彥玉手看尊

日本書紀　四孝安天皇　七十六年(甲辰)春正月己巳朔癸酉(五日)、立大日本根子彥太瓊尊(孝靈天皇)爲皇太子、年廿六、

大日本根子彥太瓊尊

日本書紀　七景行天皇　大足彥忍代別天皇、活目(垂仁)入彥五十狹茅天皇第三子也、(中略)活目入彥五十狹茅天皇卅七年立爲皇太子、時年廿一、

大足彥忍代別尊

日本書紀　七景行天皇　五十一年(辛酉)秋八月己酉朔壬子(四日)、立稚足彥尊(成務天皇)爲皇太子、

稚足彥尊

白髮武廣國押稚日本根子尊　億計尊

廣國押武金日尊

大友皇子

日本書紀　七成務天皇　六十年(庚午)夏六月己巳朔(十一日)己卯、天皇崩、時年一百七歲、

○成務天皇六十年六月御年百七歲にて崩じたまへるより推せば景行天皇五十一年八月皇太子と爲りたまへる時は御年三十八歲なり、

扶桑略記　二雄略天皇　廿二年戊午正月、以白髮(清寧天皇)皇子立皇太子、生年卅五、

皇年代略記　仁賢天皇、諱大脚、又號億計天皇、(中略)

仁德天皇八十七年己亥降誕、清寧天皇三年壬戌四月立太子、卅四、爲二代皇子、清寧无繼嗣、仍立之、

日本書紀　十七繼體天皇　七年(癸巳)十二月辛巳朔(八日)戊子、詔曰、朕承天緒、獲保宗廟、兢々業々、間者天下安靜、海內清平、屢致豐年、頻使饒國、懿哉摩呂古、示朕心於八方、盛哉勾大兄(安閑天皇廣國押武金日尊)、光吾風於萬國、日本邕々、名擅天下、秋津赫々、譽重王畿、所寶惟賢、爲善最樂、聖化憑茲遠扇、玄功藉此長懸、寔汝之力、宜處春宮、助朕施仁、翼吾補闕、

日本書紀　十八安閑天皇　二年(乙卯)冬十二月癸酉朔(十七日)己丑、天皇崩于勾金橋宮、時年七十、

○安閑天皇二年十二月御年七十歲にて崩じたまへるより推せば繼體天皇七年十二月皇太子と爲りたまへる時は、御年四十八歲なり、

扶桑略記　五天智天皇　十年辛未十月、天皇臥病、(中略)同月、立大友太政大臣爲皇太子、(中略)同月五日、(十二月)大友皇(弘文天皇)太子卽爲帝位、生年廿五、(四)

懷風藻　淡海朝大友皇子二首

皇太子者、淡海(天智)帝之長子也、(中略)年廿三(四)立爲皇太子、(中略)會壬申年之亂、天命不遂、時年廿五、

○本書崩御の御年廿五歲なるより推せば、天智天皇十年十月皇太子と爲りたまへる時は、御年二十四歲なり、

阿倍內親王

大炊王

白壁王

皇年代略記　孝謙天皇、諱阿倍、號高野姬、聖武女、(中略)

養老二年戊午降誕、天平十年戊寅正月壬午(十三日)立太子、廿一、

續日本紀　二十一淳仁天皇　廢帝、諱大炊王、天淳(天武)中原瀛眞人天皇之孫、一品舍人親王之第七子也、(中略)天平勝寶八歲、皇太子道祖王、諒闇之中、心不在慼、九歲三月廿九日辛丑、高(稱德)野天皇、皇太后(光明)、(中略)定策禁中、廢皇太子、(中略)四月四日乙巳、遂迎大炊王於仲麻呂田村第、立爲皇太子、時年廿五、

皇年代略記　光仁天皇、諱白壁、號日本根子天宗高紹、天智孫、田原施基皇子第六子、(中略)

和銅二年己酉誕生、(中略)神護景雲四年庚戌八月一日(四)癸巳、大臣已下議定策禁中爲皇太子、六十

山部親王
神野親王
大伴親王
定省親王
教明親王
尊治親王

二、稱德无繼嗣、病急、仍群臣議立之、

皇年代略記　桓武天皇、諱山部、號日本根子皇統彌照天皇、光仁長子、（中略）天平九年丁丑降誕、（中略）寶龜四年正月十四日（二日戊寅）庚寅立太子、卅七、

扶桑略記　平城天皇　延曆（大同元）廿五年五月十八日辛巳、（中略）卽日改爲大同元年、同日以賀美能（神野）親王立皇太子、生年廿一、是嵯峨天皇也、一云、十九日壬午立皇太子也、

皇年代略記　淳和天皇、諱大伴、號日本根子高譲彌遠尊、桓武第三子、（中略）延曆五年丙寅月日降誕、（中略）弘仁元年庚寅（大同五）九月十三日爲皇太弟、廿五、

三代實錄　五十光孝天皇　仁和三年八月廿五日丙寅、詔曰、朕之諸兒、皆錫朝臣之姓、（中略）第七息定省（宇多天皇）年廿一、扶侍朕躬、未曾出閤、（中略）其創臣姓、以列親王、心星宜肖帝子之名、岱曷辭天孫之號、廿六日丁卯、天皇聖體乖豫、是日立第七皇子諱爲皇太子、

百錬抄　四後一條院　後一條天皇、諱敦成、敦廿年、一條天皇第二子、（中略）長和五年正月廿九日受禪、（中略）是日立敦明親王爲皇太子、廿三、一條院第一子、

皇年代略記　後醍醐院、諱尊治、後宇多第二皇子、（中略）

德治三年九月十九日立太子、廿一、後二條院有事、邦良皇子幼年、仍法皇被仰關東有沙汰、

一八　皇室典範義解　第三章　成年立后立太子

第十五條　儲嗣タル皇子ヲ皇太子トス皇太子在ラサルトキハ儲嗣タル皇孫ヲ皇太孫トス

恭テ按スルニ、皇太子古ハ「ヒツギノミコ」ト稱フ、神武天皇紀ニ、立皇子神渟名川耳尊爲皇太子ト、此レ乃史臣皇太子ノ稱ヲ用ヰ、日嗣ノ御子ノ名ニ當テタル者ニシテ、中古以來ハ取テ典禮トセラレタリ、其ノ皇子ニ非スシテ入テ皇嗣トナルモ、史臣亦皇太子ヲ以テ稱フ、成務天皇、日本武尊ノ第二子足仲彦尊爲ス、卽チ皇姪ナリ、從姪孫ノ天皇ニシテ、族叔祖ヲ立ツルニ至テモ亦太子ト呼ヘリ、孝謙天皇ノ淳仁天皇ニ於ケル是レナリ、皇但シ或ハ立太子ヲ宣行スルアリ、或ハ宣行セサルアリテ、其ノ實一定ノ成例アラス、皇弟ヲ立ツルニ至テハ、或ハ儲君ト稱ヘ、反正天皇ノ履中天皇ニ於ケル、後三條天皇ノ後冷泉天皇ニ於ケル、或ハ太弟ト稱フ、蜉蝣、淳和、村上、圓融、亦未タ盡一ナラス、今後朱雀、順徳、龜山、既ニ皇位繼承ノ法ヲ定メ、明文ノ揭クル所ト爲スト雖ト、立太子、立太孫ノ外、支系ヨリ入テ大統ヲ承クルノ皇嗣ハ、立坊ノ儀文ニ依ルコトヲ須キス、而シテ皇太子、皇太孫ノ名稱ハ皇子、皇孫ニ限ルヘキナリ、

第十六條　皇后皇太子皇太孫ヲ立ツルトキハ詔書ヲ以テ之ヲ公布ス

恭テ按スルニ、（中略）

立太子ノ詔ハ、始メテ光仁天皇紀ニ見ユ、貞觀儀式ニ、立皇太子儀章、宣制ノ式ヲ載ス、曰ク法ノマヽニ有ルヘキ政トシテ、某ノ親王ヲ立テヽ皇太子ト定メ賜フ、故ニ此ノ狀ヲ悟リテ百官人等仕奉ト詔ル云々ト、蓋皇太子、皇太孫ハ、祖宗ノ正統ヲ承ケ、皇位ヲ繼嗣セムトス、故ニ皇嗣ノ位置ハ、立坊ノ儀ニ由リ始メテ定マルニ非ス、而シテ立坊ノ儀ハ、此ニ由テ以テ臣民ノ瞻望ヲ鬱カシムル者ナリ、

官報　號外　明治四十二年二月十一日

皇室令第三號

立儲令

第一條　皇太子ヲ立ツルノ禮ハ勅旨ニ由リ之ヲ行フ

第二條　立太子ノ禮ヲ行フ期日ハ宮內大臣之ヲ公告ス

第三條　立太子ノ禮ヲ行フ當日之ヲ賢所皇靈殿神殿ニ奉告シ勅使ヲシテ神宮神武天皇山陵竝先帝ノ山陵ニ奉幣セシム

第四條　立太子ノ禮ハ附式ノ定ムル所ニ依リ賢所大前ニ於テ之ヲ行フ

第五條　立太子ノ詔書ハ其ノ禮ヲ行フ當日之ヲ公布ス

第六條　立太子ノ禮訖リタルトキハ皇太子皇太子妃ト共ニ賢所皇靈殿神殿ニ謁ス

第七條　立太子ノ禮訖リタルトキハ皇太子皇太子妃ト共ニ天皇皇后太皇太后皇太后ニ朝見ス

第八條　立太子ノ禮訖リタルトキハ宮中ニ於テ饗宴ヲ賜フ

第九條　前各條ノ規定ハ皇太孫ヲ立ツルノ禮ニ之ヲ準用ス

皇太子冊立表

皇太子	御父	御母	立太子ノ年月日	御年齡
神淳名川耳尊（綏靖天皇）	神武天皇	皇后媛蹈鞴五十鈴媛命	神武天皇四十二、正、三	十四歲
磯城津彥玉手看尊（安寧天皇）	綏靖天皇	皇后五十鈴依媛命	綏靖天皇二十五、正、七	二十一歲
大日本彥耜友尊（懿德天皇）	安寧天皇	皇后渟名底仲媛命	安寧天皇十一、正、一	十六歲
觀松彥香殖稻尊（孝昭天皇）	懿德天皇	皇后天豐津媛命	懿德天皇二十二、二、十二	十八歲
日本足彥國押人尊（孝安天皇）	孝昭天皇	皇后世襲足媛命	孝昭天皇六十八、正、十四	二十歲

大日本根子彦太瓊尊（孝靈天皇）	孝安天皇	皇后押媛命	孝安天皇七十六、正、五	二十六歲		
大日本根子彦國牽尊（孝元天皇）	孝靈天皇	皇后細媛命	孝靈天皇三十六、正、一	十九歲		
稚日本根子彦大日日尊（開化天皇）	孝元天皇	皇后鬱色謎命	孝元天皇二十二、正、十四	十六歲		
御間城入彦五十瓊殖尊（崇神天皇）	開化天皇	皇后伊香色謎命	開化天皇二十八、正、五	十九歲		
活目入彦五十狹茅尊（垂仁天皇）	崇神天皇	皇后御間城姬命	崇神天皇四十八、四、十九	二十歲		
大足彦忍代別尊（景行天皇）	垂仁天皇	皇后日葉酢媛命	垂仁天皇三十七、正、一	二十一歲		
稚足彦尊（成務天皇）	景行天皇	皇后八坂入媛命	景行天皇五十一、八、四	三十八歲		
足仲彦尊（仲哀天皇）	日本武尊	妃兩道入姬命	成務天皇四十八、三、一	不詳		
譽田別尊（應神天皇）	仲哀天皇	皇后氣長足姬尊	神功皇后攝政三、正、三	四歲		
菟道稚郎子皇子	應神天皇	妃宮主宅媛	應神天皇四十、正、二十四	不詳		
大兄去來穗別尊（履中天皇）	仁德天皇	皇后磐之媛命	仁德天皇三十一、正、十五	不詳		
多遲比瑞齒別尊（反正天皇）	仁德天皇	皇后磐之媛命	履中天皇二、正、四	不詳		
木梨輕皇子	允恭天皇	皇后忍坂大中姬命	允恭天皇二十三、三、七	不詳		
自幼武尊國押稚日本根子尊	清寧天皇		雄略天皇二十二、正、一	三十五歲		
億計尊（仁賢天皇）	磐坂市邊押磐尊	妃葛城韓媛命	清寧天皇三、四、七	三十四歲		
小泊瀨稚鷦鷯尊（武烈天皇）	仁賢天皇	皇后春日大娘皇女	仁賢天皇七、正、三	六歲		
廣國押武金日尊（安閑天皇）	繼體天皇	妃目子媛命	繼體天皇七、十二、八	四十八歲		
譯語田渟中倉太珠敷尊（敏達天皇）	欽明天皇	皇后石姬皇女	欽明天皇十五、正、七	十七歲		

庶戶豐聰耳皇子	用明天皇	皇后穴穗部皇女	推古天皇元、四、十	二十歲		
葛城皇子（天智天皇）	舒明天皇	皇后寶皇女	孝德天皇元、六、十四	二十歲		
大海人皇子（天武天皇）	舒明天皇	皇后寶皇女	天智天皇七、二、二十三	不詳		
大友皇子（弘文天皇）	天智天皇	宮人伊賀宅子娘	天智天皇十、十、	二十四歲		
草壁皇子	天武天皇	皇后鸕野皇女	天武天皇十、二、二十五	二十歲		
珂瑠皇子（文武天皇）	草壁皇子	妃阿閉皇女	持統天皇十一、二、十六	十五歲		
首親王（聖武天皇）	文武天皇	夫人藤原宮子娘	元明天皇和銅七、六、	十四歲		
某皇子	聖武天皇	皇后藤原安宿媛	聖武天皇神龜四、十一、二	三ヶ月		
阿倍內親王（孝謙天皇）	聖武天皇	皇后藤原安宿媛	聖武天皇天平十、正、十三	二十一歲		
道祖王	新田部親王		孝謙天皇天平勝寶八、五、二	不詳		
大炊王（淳仁天皇）	舍人親王	夫人當麻山背	孝謙天皇天平勝寶九、四、四	二十五歲		
白壁王（光仁天皇）	施基親王	妃紀橡媛	稱德天皇神護景雲四、八、四	六十二歲		
他戶親王	光仁天皇	皇后井上內親王	光仁天皇寶龜二、正、二十三	不詳		
山部親王（桓武天皇）	光仁天皇	夫人高野新笠	光仁天皇寶龜四、正、二	三十七歲		
早良親王	光仁天皇	夫人高野新笠	桓武天皇天應元、四、四	不詳		
安殿親王（平城天皇）	桓武天皇	皇后藤原乙牟漏	桓武天皇延曆四、十一、二十五	十二歲		
神野親王（嵯峨天皇）	桓武天皇	皇后藤原乙牟漏	平城天皇大同元、五、十九	二十一歲		
高岳親王	平城天皇	宮人伊勢繼子	嵯峨天皇大同四、四、十四	不詳		

大伴親王(淳和天皇)	桓武天皇	夫人藤原旅子	嵯峨天皇	大同五、九、十三	二十五歳	
恒世親王	淳和天皇	妃高志内親王	淳和天皇	弘仁十四、四、十八	十九歳	
正良親王(仁明天皇)	嵯峨天皇	皇后橘嘉智子	淳和天皇	弘仁十四、四、十八	十四歳	
恒貞親王	淳和天皇	皇后正子内親王	仁明天皇	天長十、二、三十	九歳	
道康親王(文徳天皇)	仁明天皇	女御藤原順子	仁明天皇	承和九、八、四	十六歳	
惟仁親王(清和天皇)	文徳天皇	女御藤原明子	文徳天皇	嘉祥三、十一、二十五	九ケ月	
貞明親王(陽成天皇)	清和天皇	女御藤原高子	清和天皇	貞観十一、二、一	四ケ月	
定省親王(宇多天皇)	光孝天皇	女御班子女王	光孝天皇	仁和三、八、二十六	二十一歳	
敦仁親王(醍醐天皇)	宇多天皇	女御藤原胤子	宇多天皇	寛平五、四、二	九歳	
保明親王	醍醐天皇	皇后藤原穏子	醍醐天皇	延喜四、二、十	四ケ月	
慶頼王	保明親王	妃藤原仁善子	醍醐天皇	延喜二十三、四、二十九	三歳	
寛明親王(朱雀天皇)	醍醐天皇	皇后藤原穏子	醍醐天皇	延長三、十、二十一	三歳	
成明親王(村上天皇)	醍醐天皇	朱雀天皇	天皇	天慶七、四、二十二	十九歳	
憲平親王(冷泉天皇)	村上天皇	皇后藤原安子	村上天皇	天暦四、七、二十三	四ケ月	
守平親王(圓融天皇)	村上天皇	皇后藤原安子	村上天皇	天暦四、七、二十三	四ケ月	
師貞親王(花山天皇)	冷泉天皇	女御藤原懐子	圓融天皇	安和二、八、十三	十二ケ月	
懐仁親王(一條天皇)	圓融天皇	女御藤原詮子	花山天皇	永観二、八、二十七	五歳	
居貞親王(三條天皇)	冷泉天皇	女御藤原超子	一條天皇	寛和二、七、十六	十一歳	

敦成親王(後一條天皇)	一條天皇	中宮藤原彰子	三條天皇	寛弘八、六、十三	四歳	
敦明親王	三條天皇	皇后藤原娍子	後一條天皇	長和五、正、二十九	二十三歳	
敦良親王(後朱雀天皇)	一條天皇	中宮藤原彰子	後一條天皇	寛仁元、八、九	九歳	
親仁親王(後冷泉天皇)	後朱雀天皇	女御藤原嬉子	後朱雀天皇	長暦元、八、十七	十三歳	
尊仁親王(後三條天皇)	後朱雀天皇	皇后禎子内親王	後朱雀天皇	寛徳二、正、十六	十二歳	
貞仁親王(白河天皇)	後三條天皇	女御藤原茂子	後三條天皇	延久元、四、二十八	十七歳	
實仁親王	後三條天皇	女御源基子	白河天皇	延久四、十二、八	二歳	
宗仁親王(鳥羽天皇)	堀河天皇	女御藤原苡子	堀河天皇	康和五、八、十七	八ケ月	
體仁親王(近衛天皇)	鳥羽天皇	皇后藤原得子	崇徳天皇	保延五、八、十七	四ケ月	
守仁親王(二條天皇)	後白河天皇	宮人藤原懿子	後白河天皇	久壽二、九、二十三	十三歳	
憲仁親王(高倉天皇)	後白河天皇	女御平滋子	六條天皇	仁安元、十、	十六歳	
言仁親王(安徳天皇)	高倉天皇	中宮平徳子	高倉天皇	治承二、十二、十五	二ケ月	
守成親王(順徳天皇)	後鳥羽天皇	宮人藤原重子	土御門天皇	正治二、四、十五	四歳	
懐成親王(仲恭天皇)	順徳天皇	中宮藤原立子	中宮藤原立子	建保六、十一、二十六	二ケ月	
秀仁親王(四條天皇)	後堀河天皇	中宮藤原蹲子	後堀河天皇	寛喜三、十、二十八	九ケ月	
久仁親王(後深草天皇)	後嵯峨天皇	中宮藤原姞子	後嵯峨天皇	寛元元、八、	十四ケ月	
恒仁親王(龜山天皇)	後嵯峨天皇	中宮藤原姞子	後深草天皇	正嘉二、八、七	十歳	
世仁親王(後宇多天皇)	龜山天皇	皇后藤原佶子	龜山天皇	文永五、八、二十五	十ケ月	

熙仁親王(伏見天皇)	後深草天皇	宮人藤原愔子	後宇多天皇建治元、十一、五	十一歲
胤仁親王(後伏見天皇)	伏見天皇	典侍藤原經子	伏見天皇正應二、四、二十五	二歲
邦治親王(後二條天皇)	後宇多天皇	宮人源基子	後伏見天皇永仁六、八、十	十四歲
富仁親王(花園天皇)	伏見天皇	宮人藤原季子	後二條天皇正安三、八、二十四	五歲
尊治親王(後醍醐天皇)	後宇多天皇	典侍藤原忠子	花園天皇德治三、九、十九	二十一歲
邦良親王	後二條天皇	典侍藤原宗子	後醍醐天皇文保二、三、九	十九歲
量仁親王(光嚴院)	後伏見天皇	女御藤原寧子	後醍醐天皇嘉曆元、七、二十四	十四歲
恒良親王	後醍醐天皇	宮人藤原廉子	後醍醐天皇元弘四、正、二十三	十歲
義良親王(後村上天皇)	後醍醐天皇	宮人藤原廉子	後醍醐天皇延元四、三、	十二歲
熙成王(後龜山天皇)	後村上天皇	女御藤原氏	長慶天皇正平二十三、	不詳
朝仁親王(東山天皇)	靈元天皇	典侍藤原宗子	靈元天皇天和三、二、	九歲
慶仁親王(中御門天皇)	東山天皇	典侍藤原賀子	東山天皇寶永五、二、十六	八歲
昭仁親王(櫻町天皇)	中御門天皇	女御藤原尙子	中御門天皇享保十三、六、十一	九歲
遐仁親王(桃園天皇)	櫻町天皇	典侍藤原定子	櫻町天皇延享四、三、十六	七歲
英仁親王(後桃園天皇)	桃園天皇	女御藤原富子	後櫻町天皇明和五、二、十九	十一歲
惠仁親王(仁孝天皇)	光格天皇	典侍藤原婧子	光格天皇文化六、三、二十四	十歲
統仁親王(孝明天皇)	仁孝天皇	典侍藤原雅子	仁孝天皇天保十一、三、十四	十歲
嘉仁親王(大正天皇)	明治天皇	典侍柳原愛子	明治天皇明治二十二、十一、三	十一歲

備考　一、本表中、御年齡の項、御誕生後一年未滿の場合に限り月を以て數へたり、

一、荒暦に、後龜山天皇の皇弟、同天皇の東宮に在しゝこと見ゆ、皇弟は泰成親王なるべしとの說あれども明確ならず、

第二款　皇嗣の改替

一たび皇嗣册立の事ありて後も、或は天皇在位中に皇太子薨去したまひしに因り、或は皇太子自ら皇嗣たることを辭したまひしに因り、或は皇太子に重大の事故あり、勅旨を以て皇嗣たることを廢したまひしに因り、遂に皇位に卽きたまふに至らざりしこと、其の例尠しとせず。斯かる場合には、更に皇嗣を册立したまひしこと、を普通と爲せども、皇太子薨去の場合には、時に其の儀なかりしこともなきに非ず。此の外、天皇の崩御に當り、皇太子辭讓して皇位に卽きたまはず、二代の天皇に皇太子と爲りたまひし例あること、は、前に述べたるが如し。

天皇在位中に皇太子の薨去ありしは、推古天皇の皇太子廐戸豐聰耳皇子、白河天皇の皇太弟實仁親王は、其の例なり(一)。天皇崩御の後、皇太子皇位に卽きたまふに至らずして薨去ありしは、應神天皇の皇太子菟道稚郎子、允恭天皇の皇太子木梨輕皇子は、其の例なり(二)。皇太子薨去に因り、更に皇嗣の册立ありしは、持統天皇稱制中に皇太子草壁皇子薨じ、天皇卽位の後、草壁皇子の御子珂瑠(文武天皇)を皇太子と爲したまひ、聖武天皇の皇太子某皇子薨じて、皇女阿倍(孝謙天皇)を皇太子と爲したまひ、醍醐天皇の皇太子保明親王薨じて、其の御子慶賴王を皇太子と爲し、慶賴王薨じて、更に皇子寬明親王(朱雀天皇)を皇太子と爲したまひしが如き是なり。又後醍醐天皇は初め後二條天皇の皇子邦良親王を皇太子と爲したまひしが、其の薨ずるに及び、後伏見天皇の皇子量仁親王(光嚴院)を皇太子と爲したまひ、次いで元弘の變後、皇子恒良親王を皇太子と爲したまひしが、足利尊氏の叛に因り、親王は北國に赴き、天皇は吉野に遷幸したまひ、親王の足利氏の爲に幽せられて薨ずるに及び、更に皇子義良親王(後村上天皇)を皇太子と爲したまひしが如きは、特異の事例なり(三)。

皇太子自ら皇嗣たることを辭したまひ、因りて皇嗣の改替ありしは、天智天皇の皇太弟大海人皇子(天武天皇)の辭退に因り、大友皇子(弘文天皇)を皇太子と爲したまひ、淳和天皇の皇太子恒世親王の辭退に因り、正良親王(仁明天皇)を皇太子と爲したまひ、後一條天皇の皇太子敦明親王の辭退に因り、敦良親王(後朱雀天皇)を皇太子と爲したまひしが如き是なり(四)。

時としては、皇太子に重大の事故ありたる爲、廢太子の事ありたる

天皇在位中に皇太子の薨去ありし例

例もなきに非ず。孝謙天皇は皇太子道祖王の淫縦の故を以て廢して之を諸王と爲し、大炊王(淳仁天皇)を立てゝ皇太子と爲したまひ、光仁天皇は皇太子他戸親王の母后井上内親王の大逆の故を以て廢して之を庶人と爲し、山部親王(桓武天皇)を立てゝ皇太子と爲したまひ、桓武天皇は皇太子早良親王の藤原種繼暗殺のことに坐するの故を以て廢して之を淡路國に遷し、安殿親王(平城天皇)を立てゝ皇太子と爲したまひ、嵯峨天皇は皇太子高岳親王の藤原藥子の亂に坐するの故を以て之を廢し、大伴親王(淳和天皇)を立てゝ皇太子と爲したまひ、仁明天皇は皇太子恒貞親王の伴健岑等の叛逆に坐するの故を以て之を廢し、道康親王(文德天皇)を立てゝ皇太子と爲したまひしが如き是なり(三)。

一　日本書紀　二十二　推古天皇　元年(癸丑)夏四月庚午朔己卯(十日)、立庶戸豐聰耳皇子爲皇太子、仍錄攝

推古天皇の豐聰耳皇子薨じたまふ

以萬機悉委焉、橘豐日(用明)天皇第二子也、母皇后曰穴穗部間人皇女、皇后懷姙開胎之日、巡行禁中、監察諸司、至于馬官、乃當廐戸、而不勞忽產之、生而能言、有聖智、及壯一聞十人訴、以勿失能辨、兼知未然、且習内教於高麗僧慧慈、學外典於博士覺哿、並悉達矣、父天皇愛之令居宮南上殿、故稱其名、謂上宮廐戸豐聰耳太子、

二十九年春二月己丑朔癸巳(五日)、半夜廐戸豐聰耳皇子命薨于斑鳩宮、是時諸王諸臣及天下百姓悉、長老如失愛兒、而鹽酢之味、在口不嘗、少幼者如亡慈父母、以哭泣之聲滿於行路、乃耕夫止耜、舂女不杵、皆曰、日月失輝、天地既崩、自今以後誰恃哉、是月、葬上宮太子於磯長陵、

扶桑略記　三　推古天皇　元年四月、勅曰、朕女人也、性不解物、宜天下之政皆付太子、百寮萬民聞而悦之、廐戸皇子爲皇太子、萬機之政悉委太子、于時太子生年廿二、身有聖智、兼知未然、内外二教、無不妙通、天皇愛之、命居宮南、稱上宮太子、

扶桑略記　四　推古天皇　廿九年辛巳二月廿二日、聖德太子薨于斑鳩宮、時年卅九、

百錬抄　五　白河院　同四年(延久)十二月八日受禪、年廿、是日立實仁親王爲皇太弟、後三條院第二子、

應德二年十一月八日、皇太弟實仁薨、十五、後三條院第二子、

白河天皇の皇太弟實仁親王薨じたまふ

爲房卿記　應德二年十一月八日戊戌、今日寅刻皇太弟(實仁親王)薨、冊命爲太子云々、薨給、春秋十五、後三條院第二親王、

天皇崩御の後皇太子皇位にましますにより即き至らたる去ずして例の如く天皇の道を應神天皇の皇太子菟道稚郎子皇位に即きたまひしてふ

母故參議源基平卿女基子、女御也、延久四年十二月八日爲太弟、日來頗疫以發御、遂令薨逝給、（三年六月十八日應神太子薨五才）以後全無此例、大夫實季卿倫閑參內被奏此由、予傳聞其旨、馳參殿下令申事由了、

二　日本書紀

應神天皇　四十年（己巳）春正月辛丑朔戊申（八日）、天皇召大山守命、大鷦鷯尊問之曰、汝等者愛子耶、對言、甚愛也、亦問之、長與少孰尤焉、大山守命對言、不逮于長子、於是天皇有不悅之色、時大鷦鷯尊預察天皇之色、以對言、長者多經寒暑、既爲成人、更無悒矣、唯少子者、未知其成不、是以少子甚憐之、天皇大悅曰、汝言寔合朕之心、是時、天皇常有立菟道稚郎子爲太子之情、然欲知二皇子之意、故發是問、是以不悅大山守命之對言也、甲子（二十四日）、立菟道稚郎子爲嗣、卽日任大山守命令掌山川林野、以大鷦鷯尊爲太子輔之、令知國事、

仁德天皇　大鷦鷯天皇（諱）譽田天皇（諱）之第四子也、母曰仲姬命、五百城入彥皇子之孫也、天皇幼而聰明叡智、貌容美麗、及壯仁寬慈惠、四十一年春二月、譽田天皇崩、時太子菟道稚郎子、讓位于大鷦鷯尊、未卽帝位、仍諮大鷦鷯尊、夫君天下以治萬民者、蓋之如天、容之如地、上有驩心、以使百姓、百姓欣然、天下安矣、今我也弟之、且文獻不足、何敢繼嗣位登天業乎、大王者風姿岐嶷、仁孝遠聆、以齒且長、足爲天下之君、其先帝立我爲太子、豈有能才乎、唯愛之者也、亦奉宗廟社稷重事也、僕之不佞、不足以稱、夫昆上而季下、聖君而愚臣、古今之常典焉、願王勿疑、須卽帝位、我則爲臣之助耳、大鷦鷯尊對言、先皇謂皇位者一日之不可空、故預選明德、立王爲貳、祚之以嗣、授之以民、崇其寵章、令聞於國、我雖不賢、豈棄先帝之命輒從弟王之願乎、固辭不承、各相讓之、是時額田大中彥皇子、將掌倭屯田及屯倉、而謂其屯田司出雲臣之祖淤宇宿禰曰、是屯田者自本山守地、是以今吾將治矣、爾之不可掌、時淤宇宿禰啓于皇太子、皇太子謂之曰、汝便啓大鷦鷯尊、於是淤宇宿禰啓大鷦鷯尊曰、臣所任屯田者、大中彥皇子距不令治、大鷦鷯尊問倭直祖麻呂曰、倭屯田者元謂山守地、是如何、對言、臣之不知、唯臣弟吾子籠知也、適是時、吾子籠遣於韓國、而未還、爰大鷦鷯尊謂淤宇曰、爾躬往於韓國、以喚吾子籠、其兼日夜而急往、乃差淡路之海人八十人爲水手、爰淤宇往于韓國、卽率吾子籠而來之、因問倭屯田、對言、傳聞之、於纏向（垂仁）玉城宮御宇天皇之世、科太子大足彥尊定倭屯田也、是時勅旨、凡倭屯田者、每御宇帝皇之屯田也、其雖帝皇之子、非御宇者不得掌矣、是謂山守地非之也、時大鷦鷯尊遣吾子籠於額田大中彥皇子、而令知狀、大中彥皇子更無如何焉、大鷦鷯尊乃知其惡而赦之勿罪、然後大山守皇子每恨先帝廢之非立、而重有是怨、則謀之曰、我殺太子遂登帝位、爰大鷦鷯尊預聞其謀、密告太子、備兵令守、時太子設兵待之、大山守皇子不知其備兵、獨領數百兵士、夜半發而行之、會明、詣菟道將渡河、時太子服

布袍、取楫櫓、密接度子、以載大山守皇子而濟、至于河中、誂度子蹈船而傾、於是大山守皇子墮河而沒、更浮流之、歌曰、知破揶臂苔、于旎能和多利珥、佐烏刀利珥、破揶鷄務臂苔辭、和餓毛胡珥虛務、然伏兵多起、不得著岸、遂沈而死焉、令求其屍、泛於考羅濟、時太子視其屍、歌之曰、智破揶臂等、于泥能和多利珥、和多利涅珥、多弖屢、阿豆瑳由彌、摩由彌、伊枳羅牟苔、虛虛呂破望閇耐、伊斗羅牟苔、虛虛呂破望閇耐、望苔弊破、枳彌烏於望臂泥、須惠幣破、伊暮烏於望比泥、伊羅那鷄區、曾虛珥於望比、伽那志鷄區、虛虛珥於望臂、伊枳羅儒層區屢、阿豆瑳由彌、摩由彌、乃葬于那羅山、既而興宮室於菟道而居之、猶由讓位於大鷦鷯尊、以久不卽皇位、爰皇位空之既經三載、時有海人、賫鮮魚之苞苴獻于菟道宮也、太子令海人曰、我非天皇、乃返之令進難波、大鷦鷯尊亦返以令獻菟道、於是海人之苞苴鯘於往還、更返之取他鮮魚而獻焉、讓如前日、鮮魚亦鯘、海人苦於屢還、乃棄鮮魚而哭、故諺曰、有海人耶、因己物以泣、其是之緣也、太子曰、我知不可奪兄王之志、豈久生之煩天下乎、乃自死焉、時大鷦鷯尊聞太子薨以驚之、從難波馳之到菟道宮、爰太子薨之經三日、時大鷦鷯尊摽擗叫哭不知所如、乃解髮跨屍、以三呼曰、我弟皇子、乃應時而活、自起以居、爰大鷦鷯尊語太子曰、悲兮、惜兮、何所以歟自逝之、若死者有知、先帝何謂我乎、乃太子啓兄王曰、天命也、誰能留焉、若有向天皇之御所、

允恭天皇の皇太子木梨輕皇子天皇崩御の後皇位に卽かずして薨じたまふ

具奏兄王聖之且有讓矣、然聖王聞我死、以急馳遠路、豈得無勞乎、乃進同母妹八田皇女曰、雖不足納采、僅充掖庭之數、乃且伏棺而薨、於是大鷦鷯尊素服、爲之發哀、哭之甚慟、仍葬於菟道山上、

古事記

中　於是、(應神)天皇問大山守命與大雀命(仁德天皇)詔、汝等者、孰愛兄子與弟子、(天皇所以發是問者、宇遲能和紀郎子有令治天下之心也、)爾大山守命白、愛兄子、次大雀命知天皇所問賜之御情而白、兄子者既成人、是無悒、弟子者未成人是愛、爾天皇詔、佐邪岐阿藝之言(自佐至藝五字以音、)如我所思、卽詔別者、大山守命爲山海之政、大雀命執食國之政以白賜、宇遲能和紀郎子所知天津日繼也、故大雀命者勿違天皇之命也、(中略)於是、大雀命與宇遲能和紀郎子二柱、各讓天下之間、海人貢大贄、爾兄辭令貢於弟、弟辭令貢於兄、相讓之間、既經多日、如此相讓、非一二時故、海人既疲往還而泣也、故諺曰、海人乎因己物而泣也、然宇遲能和紀郎子者早崩、故大雀命治天下也、

日本書紀

十三　允恭天皇　(甲戌)二十三年春三月甲午朔庚子(七日)、立木梨輕皇子爲皇太子、容姿佳麗、見者自感、同母妹輕大郎皇女、亦艷妙也、太子恒念合大娘皇女、畏有罪而默之、然感情既盛、殆將至死、爰以爲、徒空死者、雖有罪、何得忍乎、遂竊通、乃悒懷少息、因以歌之曰、阿資臂紀能、椰摩娜烏兎絇利、椰摩娜箇彌、斯哆媚烏和之勢、志哆那企貳、和餓儺勾兎摩、箇哆儺企貳、

和餓儺勾兎摩、去嚩去曾、椰主區津(波カ)娜布例、

(乙亥)二十四年夏六月、御膳羹汁凝以作氷、天皇異之卜其所由、卜者曰、有內亂、蓋親親相姧乎、時有人曰、木梨輕太子姧同母妹輕大郎皇女、因以推問焉、辭既實也、太子是爲儲君不得罪、則流輕大娘皇女於伊豫、是時太子歌之曰、於褒企彌烏、志摩珥波夫利、布儺阿摩利、異餓幣利去牟鋤、和餓哆哆瀰由璹、去等烏許曾、哆哆瀰等異絆梅、和餓兎摩烏由梅、又歌之曰、阿摩儻霧、箇留惋等賣、異哆儺介麼、臂等資利奴陪瀰、幡舍能夜摩能、波刀能、資哆儺企邇奈勾、

日本書紀　十三　安康天皇

穴穗天皇、(允恭)雄朝津間稚子宿禰天皇第二子也、一云、第三子也、母曰忍坂大中姬命、稚渟毛二岐皇子之女也、四十二年春正月、(允恭)天皇崩、冬十月、葬禮畢之、是時太子行(木梨輕皇子)暴虐、淫于婦女、國人謗之、群臣不從、悉隸穴穗皇子、爰太子欲襲穴穗皇子、而密設兵、穴穗皇子復興兵將戰、故穴穗括箭、輕括箭、始起于此時也、時太子知群臣不從百姓乖違、乃出之匿物部大前宿禰之家、穴穗皇子聞則圍之、大前宿禰出門而迎之、穴穗皇子歌之曰、於朋摩弊、烏摩弊輸區塗餓、訶那杜加礙、訶區多智豫羅涅、阿梅多知夜梅牟、大前宿禰答歌之曰、瀰椰比等能、阿由臂能古輸孺、於智珥岐等、瀰椰比等等豫牟、佐杜弭等茂由梅、乃啓皇子曰、願勿害太子、臣將議、由是太子自死于大前宿禰之家、一云、流伊豫國、

皇太子薨去に因り更に皇嗣の册立ありし例持統天皇の稱制中に皇太子草壁皇子薨じ天皇即位の後珂瑠皇子を皇太子と爲したまふ

古事記　中

(允恭)天皇崩之後、定木梨之輕太子所知日繼、未卽位之間、姧其伊呂妹輕大郎女而、(中略)是以、百官及天下人等、背輕太子而、歸穴穗御子、爾輕太子畏而、逃入大前小前宿禰大臣之家而、備作兵器、爾時所作矢者、銅其箭之內、故號其矢謂輕箭也、穴穗王子亦作兵器、此王子所作之矢者、卽今時之矢者也、是謂穴穗箭也、於是、穴穗御子興軍、圍大前小前宿禰之家、爾到其門時、零大氷雨、(中略)爾其大前小前宿禰擧手打膝、儺訶那傳、自訶下三字以音、歌參來、(中略)如此歌參歸、白之、我天皇之御子、於伊呂兄王無及兵、若及兵者必人咲、僕捕以貢進、爾解兵退坐、故大前小前宿禰、捕其輕太子、率參出以貢進、其太子被捕、(中略)故其輕太子者流於伊余湯也、亦將流之時、(中略)如此歌、卽共自死、

三

日本書紀　二十九　天武天皇

(壬午)十年二月庚子朔甲子、(二十五日)是日立草壁皇子尊爲皇太子、因以令攝萬機、

日本書紀　三十　持統天皇

(己丑)三年夏四月乙未、(十三日)皇太子草壁皇子尊薨、

續日本紀　一　文武天皇

(珂瑠皇子)天之眞宗豐祖父天皇、(天武)天渟中原瀛眞人天皇之孫、(草壁)日並知皇子尊之第二子也、(中略)(持統)高天原廣野姬天皇十一年、立爲皇太子、

神皇正統記　第四十一代、持統天皇は、(中略)庚寅の春正月一日卽位、大和の藤原

聖武天皇の皇太子某皇子薨じ阿倍内親王を皇太子と爲したまふ

の宮にまします、草壁の皇子は太子に立給しか、世をはやくし給ふに依て、其御子輕王を皇太子とす、文武にまします、

續日本紀　十　聖武天皇　神龜四年十一月己亥(二日)、天皇御中宮、太政官及八省各上表、奉賀皇子誕育、幷獻玩好物、(中略)詔曰、朕賴神祇之祐、蒙宗廟之靈、久有神器、新誕皇子、宜立爲皇太子、布告百官、咸令知聞、

五年八月甲申(二十一日)、勅、皇太子寢病、經日不愈、自非三寶威力、何能解脫患苦、因玆、敬造觀世音菩薩像一百七十七軀、幷經一百七十七卷、禮佛轉經、一日行道、緣此功德、欲得平復、又勅、可大赦天下、以救所患、其犯八虐、及官人枉法受財、監臨主守自盜、盜所監臨、强盜、竊盜得財、常赦所不免者、並不在赦限、(中略)丙戌(二十三日)、天皇御東宮、緣皇太子病、遣使奉幣帛於諸陵、(中略)九月丙午(十三日)、皇太子薨、壬子(十九日)、葬於那富山、時年二、天皇甚悼惜焉、爲之廢朝三日、爲太子幼弱、不具喪禮、但在京官人以下、及畿內百姓、素服三日、諸國郡司各於當郡、擧哀三日、

扶桑略記　六　聖武天皇　神龜四年丁卯十一月己亥(二日)、以光明子大夫人所生皇子立皇太子、

神龜五年戊辰九月丙午日(十三日)、皇太子薨、二歲、天皇甚悼惜焉、爲之廢朝三日、太子幼弱、不具喪禮、但在京官人以下、及畿內百姓、素服三日、諸國郡司各於當郡、擧哀三日、

醍醐天皇の皇太子保明親王薨じ慶賴王を皇太子と爲したまふ

續日本紀　十三　聖武天皇　天平十年春正月壬午(十三日)、立阿倍內親王(孝謙天皇)爲皇太子、

扶桑略記　拔萃　聖武天皇下　天平十年正月十三日壬午日、以阿倍內親王立皇太子、于時生年廿、高野天皇是也、

日本紀略　醍醐天皇　延喜四年二月十日乙亥、今上第二子崇象親王爲皇太子、於紫宸殿宣制、太子年二、

十一年十一月廿八日、皇太子崇象親王改名保明、

延長元年三月廿一日乙未、是日也、依皇太子臥病、大赦天下、子刻皇太子保明親王薨、年廿一、

天下庶人莫不悲泣、其聲如雷、擧世云、嘗帥靈魂宿忿所爲也、

扶桑略記　二十三　醍醐天皇　延喜四年甲子二月十日乙亥、保明親王立皇太子、時年二歲、

扶桑略記　二十四　醍醐天皇　延喜廿三年癸未三月廿一日、皇太子保明親王無病而薨、年廿一歲、

日本紀略　醍醐天皇　延長元年(延喜二十三)四月廿九日癸酉、詔、以故文獻彥(保明親王)太子息慶賴王爲皇太子、年三、